茨城県教育財団文化財調査報告第175集

島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ

島名前野遺跡

平成13年3月

茨　　城　　県
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第175集

島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ

島名前野遺跡（しまなまえの）

平成13年3月

茨　　城　　県
財団法人　茨城県教育財団

序

つくば市は，昭和38年に筑波研究学園都市計画地域の指定を受けて以来，日本の科学技術の研究開発の核としての，さらに，国際交流の拠点としての国際都市にふさわしい町づくりを進めております。

この新しい町づくりの一環として平成17年に開通予定の常磐新線は，つくばと東京圏を直結し，人・物・情報の交流を盛んにするだけでなく，地域活性化の大きな力となります。そこで，平成６年７月に県，市，地権者が三者協議で合意に達したのを受け，以来，新線整備と沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業が進められております。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け，平成７年４月から平成12年３月までは熊の山遺跡の発掘調査を，平成11年４月から平成12年３月までは島名前野遺跡・島名前野東遺跡の発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は，すでに当財団の文化財調査報告第120集，第133集，第149集，第166集として刊行いたしました。

本書は，平成11年度に調査を行った島名前野遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより，教育・文化の向上の一助として，御活用いただければ幸いです。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である茨城県からいただいた多大なる御協力に対し，心から御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，つくば市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導，御協力をいただいたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成13年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　齋　藤　佳　郎

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成11年４月から平成12年３月まで発掘調査を実施した，茨城県つくば市大字島名に所在する島名前野遺跡の発掘調査報告書である。

2　当遺跡の発掘期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査　平成11年４月１日～平成12年３月31日

整理　平成12年４月１日～平成12年５月31日

3　当遺跡の発掘調査は，調査第二課長小泉光正の指揮のもと，調査第二課第二班長横須孝憲，主任調査員原信田正夫が平成11年４月から平成12年３月まで，三谷正，稲田義弘が平成11年４月から平成11年６月，平成11年10月から平成12年３月まで，平松孝志が平成11年４月から平成11年９月まで，川村満博が平成11年10月から平成11年12月まで，大塚雅昭が平成12年１月から平成12年３月まで担当した。

4　当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は，整理課長川井正一，首席調査員荻野谷悟の指揮のもと，主任調査員稲田義弘が担当した。

5　発掘調査及び整理に際し御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，X＝＋6,040m，Y＝＋20,560mの交点を基準点（A1a1）とした。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ1，2，3…とし，「A1区」，「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3…0とし，名称は，大調査区の名称を冠して「A1a1区」，「B2b2区」のように呼称した。

2　本文・実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構	住居跡－SI	掘立柱建物跡－SB	粘土採掘坑－NSK	土坑－SK	井戸跡－SE
	溝跡－SD	道路跡－SF	遺物包含層－HG	ピット－P	
遺物	土器・陶器－P	拓本記録土器－TP	土製品－DP	石器・石製品－Q	金属製品－M
土層	撹乱－K				
計測値	現存値－（　）	推定値－［　］			

ただし，実測図・遺物観察表における土器・陶器の記号については，Pを省略し，番号のみを記した。

3　土層と遺物における色調の判定には，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

4　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

(1)　遺構全体図は500分の1，遺構実測図は60分の1の縮尺で掲載した。

(2)　遺物実測図は3分の1の縮尺とした。

(3)　遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

粘　土　　焼土・炉　　竈・赤彩

● 土器　▲ 拓本土器　○ 土製品　□ 石器・石製品　―――― 硬化面

5　遺物観察表の作成方法については，次のとおりである。

(1)　土器の計測値の表示は，口径－A　器高－B　底径－C　高台径－D　高台高－Eとし，単位はcmである。

(2)　備考の欄は，残存率，写真図版番号（PL）及びその他必要と思われる事項を記した。

6　「主軸」は，竈を持つ竪穴住居跡については竈を通る軸線とし，他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10°－E，N－10°－W）。

抄　　録

ふりがな	しまな・ふくだっぽいったいがたとくていとちくかくせいりじぎょうちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　名	島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書
副書名	島名前野遺跡
巻　次	Ⅵ
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第175集
著者名	稲田義弘
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　TEL　029－225－6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　TEL　029－225－6587
発行日	2001（平成13）年3月21日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
しまなまえの 島名前野遺跡	いばらきけんつくばし 茨城県つくば市 おおあざしまなあざまえの 大字島名字前野 3911番地ほか	08220 － 2100	36度 3分 12秒	140度 3分 49秒	12 ～ 14m	19990401 ～ 20000331	9,967㎡	島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
島名前野遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡　17軒 土坑　4基	土師器（椀・坏・高坏・器台・坩・壺・甕・甑・ミニチュア土器（手捏土器），土製品（球状土錘），石器・石製品（紡錘車・砥石）	縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。集落跡の中では，古墳時代前期が中心である。調査区域南部の遺物包含層からは，8世紀代の須恵器が大量に出土している。
		奈良時代	竪穴住居跡　8軒 井戸跡　1基 粘土採掘坑　1基 遺物包含層1か所	土師器（甕），須恵器（坏・高台付坏・盤・短頸壺・長頸瓶・鉢・甕）	
		時期不明	竪穴住居跡　1軒 掘立柱建物跡1棟		
	その他	縄文時代	土坑　1基	縄文土器（深鉢片）	
		近世	溝跡　2条 道路跡　1条	陶磁器片（椀・瓶）	
		時期不明	土坑　51基 溝跡　8条	須恵器片（坏・高台付坏・盤・高盤・鉢・甕・甑），土師器片（坏・甕）	

目　　次

序
例　言
凡　例
抄　録
目　次
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査経過……1
第２章　位置と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3
第３章　調査の成果……9
　第１節　遺跡の概要……9
　第２節　基本層序の検討……9
　第３節　遺構と遺物……11
　　１　縄文時代の遺構と遺物……11
　　(1)　土　坑……11
　　２　古墳時代の遺構と遺物……12
　　(1)　竪穴住居跡……12
　　(2)　土　坑……53
　　３　奈良時代の遺構と遺物……57
　　(1)　竪穴住居跡……57
　　(2)　井戸跡……78
　　(3)　粘土採掘坑……82
　　(4)　遺物包含層……83
　　４　その他の時代の遺構と遺物……92
　　(1)　竪穴住居跡……92
　　(2)　掘立柱建物跡……94
　　(3)　溝　跡……95
　　(4)　道路跡……98
　　(5)　土　坑……99
　　５　遺構外出土遺物……104
　第４節　まとめ……108
写真図版……115

挿図目次

第1図　島名前野遺跡周辺遺跡位置図…… 6
第2図　島名前野遺跡調査区設定図…… 8
第3図　基本土層図…… 9
第4図　島名前野遺跡全体図……10
第5図　第20号土坑・出土遺物実測図……11
第6図　第1号住居跡実測図……13
第7図　第1号住居跡出土遺物実測図……14
第8図　第2号住居跡実測図……15
第9図　第2号住居跡出土遺物実測図……16
第10図　第3号住居跡実測図……18
第11図　第3号住居跡出土遺物実測図……19
第12図　第5号住居跡・出土遺物実測図……20
第13図　第6号住居跡実測図……21
第14図　第6号住居跡出土遺物実測図……22
第15図　第7号住居跡・出土遺物実測図……24
第16図　第8号住居跡実測図……26
第17図　第8号住居跡・出土遺物実測図……27
第18図　第8号住居跡出土遺物実測図……28
第19図　第9号住居跡実測図……30
第20図　第9号住居跡掘り方・出土遺物実測図…31
第21図　第9号住居跡出土遺物実測図(1)……32
第22図　第9号住居跡出土遺物実測図(2)……33
第23図　第10号住居跡実測図……36
第24図　第10号住居跡出土遺物実測図(1)……37
第25図　第10号住居跡出土遺物実測図(2)……38
第26図　第12号住居跡・出土遺物実測図……40
第27図　第13号住居跡実測図……42
第28図　第13号住居跡・出土遺物実測図……43
第29図　第14号住居跡実測図……44
第30図　第14号住居跡出土遺物実測図……45
第31図　第15号住居跡実測図……45
第32図　第15号住居跡出土遺物実測図……46
第33図　第17号住居跡実測図……48
第34図　第17号住居跡出土遺物実測図(1)……49
第35図　第17号住居跡出土遺物実測図(2)……50
第36図　第22号住居跡・出土遺物実測図……52
第37図　第22号住居跡出土遺物実測図……53
第38図　第15・19号土坑・出土遺物実測図……54
第39図　第15号土坑出土遺物実測図……55
第40図　第17号土坑・出土遺物実測図……55
第41図　第56号土坑・出土遺物実測図……56
第42図　第4号住居跡・出土遺物実測図……58
第43図　第4号住居跡出土遺物実測図……60
第44図　第11号住居跡出土遺物実測図……61
第45図　第16号住居跡実測図……63
第46図　第16号住居跡掘り方・出土遺物実測図…64
第47図　第19号住居跡実測図……66
第48図　第19号住居跡掘り方・出土遺物実測図…67
第49図　第20A号住居跡実測図……69
第50図　第20A号住居跡出土遺物実測図(1)……70
第51図　第20A号住居跡出土遺物実測図(2)……71
第52図　第20B号住居跡・出土遺物実測図……72
第53図　第21号住居跡実測図……74
第54図　第21号住居跡出土遺物実測図(1)……75
第55図　第21号住居跡出土遺物実測図(2)……76
第56図　第23号住居跡・出土遺物実測図……78
第57図　第1号井戸跡実測図……79
第58図　第1号井戸跡出土遺物実測図(1)……80
第59図　第1号井戸跡出土遺物実測図(2)……81
第60図　第1号粘土採掘坑実測図……82
第61図　第1号粘土採掘坑出土遺物実測図……83
第62図　第1号遺物包含層土層断面図……84
第63図　第1号遺物包含層実測図……85
第64図　第1号遺物包含層出土遺物実測図(1)……86
第65図　第1号遺物包含層出土遺物実測図(2)……87
第66図　第1号遺物包含層出土遺物実測図(3)……88
第67図　第1号遺物包含層出土遺物実測図(4)……89
第68図　第18号住居跡実測図……93
第69図　第1号掘立柱建物跡実測図……94
第70図　第1号溝跡・出土遺物実測図……95
第71図　第2号溝跡・出土遺物実測図……96
第72図　第4～10号溝跡土層断面図……97
第73図　第1号道路跡土層断面・出土遺物実測図……98
第74図　第4号土坑実測図……99

第75図　第21号土坑実測図 ……100
第76図　第22号土坑実測図 ……100
第77図　第23号土坑実測図 ……101
第78図　第49号土坑実測図 ……101
第79図　その他の土坑実測図(1) ……102
第80図　その他の土坑実測図(2) ……103
第81図　遺構外出土遺物実測図(1) ……104
第82図　遺構外出土遺物実測図(2) ……105
第83図　遺構外出土遺物実測図(3) ……106
第84図　島名前野遺跡集落変遷図 ……109

表　目　次

表1　島名前野遺跡周辺遺跡一覧表……7
表2　島名前野遺跡住居跡一覧表……93
表3　島名前野遺跡溝跡一覧表……97
表4　島名前野遺跡土坑一覧表 ……103

写真図版目次

PL1　島名前野遺跡遠景
　　島名前野遺跡調査区域全景
PL2　第1号住居跡完掘状況
　　第2号住居跡遺物出土状況
　　第3号住居跡完掘状況
PL3　第5・10号住居跡完掘状況
　　第6・14号住居跡完掘状況
　　第7号住居跡完掘状況
PL4　第8号住居跡完掘状況
　　第8号住居跡炭化材出土状況
　　第9号住居跡完掘状況
PL5　第9号住居跡遺物出土状況
　　第12号住居跡完掘状況
　　第13号住居跡完掘状況
PL6　第15号住居跡遺物出土状況
　　第17号住居跡完掘状況
　　第17号住居跡遺物出土状況
PL7　第4号住居跡完掘状況
　　第11号住居跡完掘状況
　　第16号住居跡完掘状況
PL8　第19号住居跡完掘状況
　　第20B号住居跡完掘状況
　　第21号住居跡完掘状況
PL9　第21号住居跡竈完掘状況
　　第1号粘土採掘坑完掘状況
　　第1号遺物包含層遺物出土状況
PL10　第1号遺物包含層遺物出土状況
　　第4～9号土坑完掘状況
　　第20～23号土坑完掘状況
PL11　第2・5～8号住居跡出土遺物
PL12　第8・9号住居跡出土遺物
PL13　第9・10・15号住居跡出土遺物
PL14　第10・12・15・17号住居跡出土遺物
PL15　第17・22号住居跡，第15・17・56号土坑出土遺物
PL16　第4・11・16・19・20A・21号住居跡出土遺物
PL17　第1号遺物包含層出土遺物
PL18　第1・2・9号住居跡，第1・2号溝跡，遺構外出土遺物
PL19　第13・17号住居跡，第20号土坑，遺構外出土遺物
PL20　遺構外出土遺物

第1章 調 査 経 緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県では，首都圏とつくば研究学園都市を結ぶ常磐新線の早期開通をめざし，常磐新線の建設とそれに伴う沿線開発に取り組んでいる。

平成6年8月18日，茨城県知事は，茨城県教育委員会に対して，常磐新線沿線地域の開発を行うため，つくば市島名地区の土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて照会を行った。それを受けて，茨城県教育委員会は，平成6年9月19日から27日にかけて事業地内の現地踏査を，平成8年6月21～28日，8月19～22日，10月16日，23～24日，29～30日にかけて試掘調査を行った。

その結果，開発予定地内において島名前野遺跡の存在を確認し，平成8年11月18日，茨城県教育委員会は，茨城県知事及びつくば市教育委員会にその旨を回答した。回答を受けた茨城県知事は，平成11年3月4日，茨城県教育委員会に対して，事業地内に所在する島名前野遺跡6,393㎡の取り扱いについて協議を求めた。茨城県教育委員会は，島名前野遺跡の重要性に鑑み，また文化財保護の立場から慎重に検討を重ねた。そして同年3月15日，現状保存が困難であることから，茨城県教育委員会は茨城県知事あてに，島名前野遺跡を記録保存する旨を回答し，併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

そこで，茨城県と茨城県教育財団は埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び，平成11年4月1日から平成12年3月31日にかけて，島名前野遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調 査 経 過

島名前野遺跡の発掘調査は，熊の山遺跡，島名前野東遺跡と併せて，平成11年4月1日から平成12年3月31日までの1年間にわたって実施した。10月下旬までは，熊の山遺跡の調査と並行して，島名前野遺跡の試掘，表土除去等を行い，10月下旬から遺構調査を行った。島名前野遺跡の調査経過について，準備段階を含めて，その概要を記述する。

4月　発掘調査を開始するための諸準備を行った。6日に調査区内の現地踏査を実施した。12日に県南都市建設事務所と平成11年度調査区について打ち合わせを行った。12日から14日に調査機材を搬入した。14日に補助員を投入して熊の山遺跡の現場作業を開始し，20日に島名前野遺跡のトレンチ試掘を開始した。

5月　引き続き試掘調査を行い，遺構を確認した。調査区南部の黒色土を掘り込むと水がしみ出し，作業が難航した。

6月　4日から21日まで重機による調査区域北部及び南東部の表土除去を行い，遺構確認も併せて行った。

7月　27日から29日まで重機による調査区域南西部の表土除去を行い，遺構確認も併せて行った。

9月　24日から28日まで調査区域の除草と方眼杭打ち作業を行った。

10月　熊の山遺跡の調査終了をうけ，25日から島名前野遺跡の遺構調査を開始した。

11月　引き続き遺構調査を行い，30日までに竪穴住居跡9軒，掘立柱建物跡1棟，土坑9基，道路跡1条の調査を終了する。

12月　引き続き遺構調査を行い，27日までに竪穴住居跡9軒，土坑17基，溝5条の調査を終了した。

1月　19日から調査区域北東部の黒色土が堆積する区域にトレンチを設定し，遺構確認作業を開始した。31日までに竪穴住居跡4軒，陥し穴4基，土坑15基，溝3条の調査を終了した。

2月　2日から調査区域南部の遺物包含層の調査を開始した。遺物包含層は，水分を多く含み，朝晩の冷え込みによる凍結で調査の進捗が滞った。21日から航空写真撮影のため，調査と並行して遺構清掃を行い，23日に撮影を実施した。28日までに竪穴住居跡2軒，土坑9基，粘土採掘坑1基，溝2条の調査を終了した。

3月　引き続き遺構調査を行った。6日に委託者に対する報告会を実施した。8日までに井戸跡1基と遺物包含層1か所の遺構調査を終了した。9日から17日まで補足調査を行った。21日に出土遺物を整理センター国田分館へ搬出し，事務所並びに休憩所等の整理，危険箇所の埋め戻しなどの安全対策を行い，27日にはすべての現地調査を終了した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

島名前野遺跡は，茨城県つくば市大字島名字前野3911番地ほかに所在している。

つくば市は，茨城県南西部に位置し，北は真壁郡明野町，同郡真壁町，新治郡八郷町に，東は新治郡新治村，土浦市，南は牛久市，稲敷郡茎崎町，筑波郡伊奈町，同郡谷和原村に，西は水海道市，結城郡石下町，同郡千代川村，下妻市に接している。

つくば市は，信仰と行楽で名高い筑波山を北端に，南西側に広がる標高約23m前後の平坦な台地上に位置している。この台地は，筑波・稲敷台地と呼ばれ，東を霞ヶ浦に流入する桜川，西を利根川に合流する小貝川と，南流する二つの河川によって区切られている。それぞれの河川によって大きく開析された流域には，標高約5mほどの沖積地が発達している。両河川の間にも，東から花室川，蓮沼川，小野川，東谷田川，西谷田川などの中小河川がほぼ北から南に向かって流れており，台地は浅く開析され，谷津や低地が細長く入り組んでいる。

筑波・稲敷台地は，貝化石を産する，海成の砂層である成田層を基盤として，その上に竜ヶ崎層と呼ばれる斜交層理の顕著な砂層・砂礫層，その上に常総粘土層と呼ばれる火山灰質粘土層（0.3～5.0m），その上に褐色の関東ローム層（0.5～2.5m）が堆積し，最上部は腐植土層となっている。

当遺跡の所在する島名地区は，つくば市の南西部，旧谷田部町域に所在する。当遺跡は，東谷田川と西谷田川にはさまれた舌状台地から東谷田川の沖積低地に向かう河岸段丘上の標高12～14mの緩斜面部に位置している。両河川の沖積低地は，主に水田に利用されており，水田との比高は約4mである。調査前の現況は休耕地であった。

第2節　歴史的環境

温和な気候，平坦な台地と南北に流れる河川は，人々が生活を送るのに適した環境を形作ってきており，この地域の人々の生活の足跡は，旧石器時代までさかのぼる。

旧石器時代については，東谷田川支流の蓮沼川左岸の神田遺跡〈32〉，小貝川左岸の中台遺跡などから，ナイフ形石器や尖頭器などの遺物が出土している。なかでも，花室川左岸の中原遺跡では，平成10年度までの調査で石器の集中地点が6か所確認され，ナイフ形石器・石刃などが出土している。

小貝川左岸の台地及び東谷田川，西谷田川に挟まれた台地で遺跡が確認されるのは，縄文時代中期以降である。西谷田川に面した台地の縁辺部に立地している境松遺跡〈37〉は，つくば市谷田部の代表的な貝塚であり，縄文時代中期から後期の土器や石器が出土している。貝類は，オキシジミ，ヤマトシジミ，ムラサキガイ，シオフキなどで構成されている。小貝川に臨む台地上に立地する山田遺跡〈3〉からは，縄文時代中期から後期の土器や石器が広範囲にわたって出土し，大規模な集落跡の可能性がある。島名前野遺跡周辺では，当遺跡の東側に隣接する島名前野東遺跡〈2〉，当遺跡から500m南にタカドロ遺跡〈24〉，一町田遺跡〈25〉が確認されている。島名前野東遺跡からは後期の竪穴住居跡が，タカドロ遺跡と一町田遺跡からは中期から後期にかけての遺物が出土しており，東谷田川，西谷田川に挟まれた台地では，縄文時代中期から本格的に人々の生

活が営まれるようになったと考えられる。

弥生時代の遺跡は，当地域では少ない。谷田部地区では，中期から後期の遺物の出土した境松遺跡，高山遺跡〈4〉などが確認されているのみである。

古墳時代の遺跡は，下横場遺跡，面の井古墳群〈10〉，関の台古墳群〈9〉，下河原崎古墳群〈12〉などの中小の古墳群が数多く確認されている。大規模古墳はなく，その大半が径7～25mの円墳である。島名前野遺跡周辺では，当遺跡の1km北側の熊の山遺跡に隣接する島名熊の山古墳群〈17〉，さらに1km北に関の台古墳群〈9〉がある。集落跡としては，当遺跡に隣接して島名前野東遺跡，当遺跡の北約500mに薬師遺跡〈6〉，さらに北約500mに熊の山遺跡〈1〉，西約500mには榎内遺跡〈7〉がある。いずれの遺跡も東谷田川と西谷田川に挟まれた台地上に立地している。また，東谷田川左岸の台地上には，北東約1.5kmに氷堀遺跡〈30〉，東約1.5kmに柳橋遺跡〈31〉がある。特に，古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての大規模集落である熊の山遺跡は，集落としての起源は古墳時代前期に求められ，同様に古墳時代前期の竪穴住居跡が確認された島名前野東遺跡とともに，当遺跡との関連が考えられる。

平安時代は，『和名類聚抄』によれば，谷田部地区は河内郡八部郷といい，かつて，仁徳天皇の妃八田若郎女のため八田部を置いた所と言われる。また，島名も『和名類聚抄』にある「嶋名郷」に比定されている。

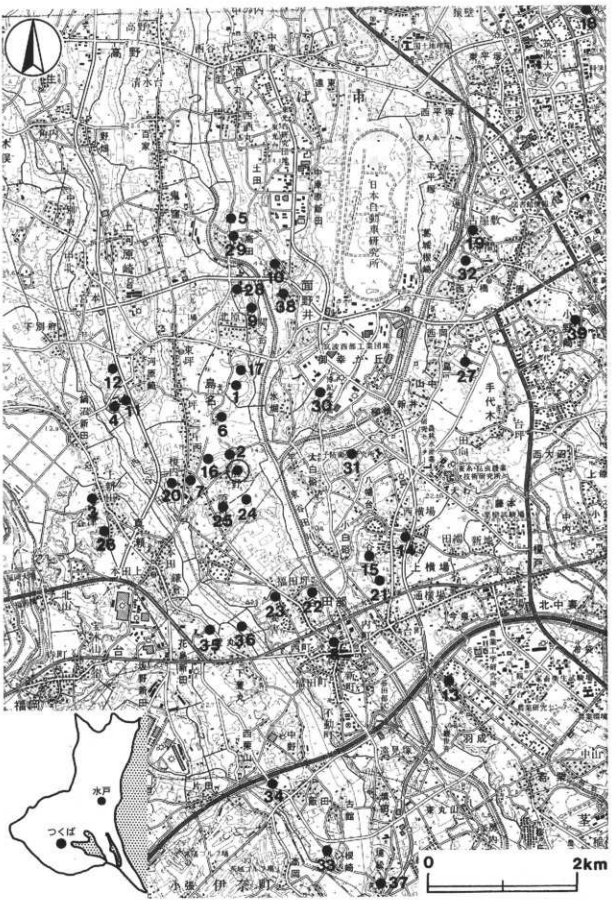
つくば市谷田部における奈良・平安時代の遺跡は近年まで知られていなかったが，平成7年度から平成11年度までの当財団の調査によって，熊の山遺跡で奈良・平安時代を中心にして竪穴住居跡1300軒以上，掘立柱建物跡100棟以上が確認された。さらに，当遺跡の約2.5km南の根崎遺跡〈33〉にもこの時代の遺構が存在することが，当財団の調査によって明らかになった。

中・近世の遺跡は，つくば市谷田部では城館跡がほとんどであり，谷田部城跡〈8〉，小野崎館跡〈39〉，辺間城跡〈19〉，面野井城跡〈38〉，熊の山城跡，高須賀城跡などがある。当遺跡に隣接した島名前野東遺跡では，方形に巡る堀跡から大量の土師質土器が出土している。堀の内側の調査はこれからであるが，城館跡の可能性が高い。また，利根川，牛久沼を経て移動してきた六軒党という人々が島名地区に居を構え，周辺を開拓していったという伝承もあり，今後の調査の成果が期待できる。なお，近世のつくば市谷田部の大部分は谷田部藩領になっており，島名地区は旗本領になっている。

参考文献

・大山年次，蜂須紀夫　『茨城県　地学のガイド』　コロナ社　1977年
・蜂須紀夫，大森昌衛　『茨城の地質をめぐって』　築地書館　1979年
・谷田部の歴史編さん委員会　『谷田部の歴史』　谷田部町教育委員会　1975年
・茨城県史編さん会　『茨城県史　中世編』　茨城県1976年
・池邊彌　『和名類聚抄郡郷里驛名考證』　吉川弘文館1981年
・竹内理三　『角川日本地名大辞典　8　茨城県』　角川書店1973年
・中山信名　『新編常陸国誌』(復刻版)　崙書房1964年
・江原忠昭　『増補　茨城の地名』　桜人社　1976年
・茨城県教育財団　「科学博関連道路谷田部明野線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」
　『茨城県教育財団文化財調査報告』第22集　1983年
・茨城県教育財団　「主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」
　『茨城県教育財団文化財調査報告』第41集　1987年

・茨城県教育財団　「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第93集　1994年
・茨城県教育財団　「（仮称）萱丸地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第119集　1997年
・茨城県教育財団　「鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）」
『茨城県教育財団文化財調査報告』第166集　2000年
・茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』２版　1990年



第1図　島名前野遺跡周辺遺跡位置図

表1　島名前野遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
◎	島名前野遺跡		○		○	○			20	ツバタ遺跡				○			
1	熊の山遺跡				○	○	○	○	21	台成井遺跡		○					
2	島名前野東遺跡		○		○	○	○	○	22	福田前遺跡		○					
3	山田遺跡		○						23	福田坪池の台遺跡		○					
4	高山遺跡			○					24	タカドロ遺跡		○					
5	和田台遺跡				○				25	一町田遺跡		○					
6	薬師遺跡				○				26	真瀬新田谷津遺跡		○					
7	榎内遺跡				○				27	苅間遺跡				○			
8	谷田部城跡						○		28	関の台遺跡				○			
9	関の台古墳群				○				29	高田遺跡				○			
10	面の井古墳群				○				30	水堀遺跡				○			
11	高山古墳群				○				31	柳橋遺跡				○			
12	下河原崎古墳群				○				32	神田遺跡	○	○	○	○	○	○	○
13	羽成古墳群				○				33	根崎遺跡	○	○		○	○	○	
14	道心塚古墳群				○				34	西栗山遺跡	○	○		○			
15	台町古墳群				○				35	三度山遺跡		○		○			
16	榎内古墳群				○				36	古屋敷遺跡		○		○		○	○
17	島名熊の山古墳群				○				37	境松遺跡		○	○				
18	柴崎遺跡	○	○		○	○	○		38	面野井城跡						○	
19	苅間城跡						○		39	小野崎館跡						○	

第2図　鳥名前野遺跡調査区設定図

第3章　調査の成果

第1節　遺跡の概要

鳥名前野遺跡は，つくば市の西部を南流する東谷田川右岸の台地から低地に下りる緩斜面部に位置している。標高は12m～14mで，現況は休耕地である。今回の調査の結果，古墳時代，奈良時代の集落跡を中心とする複合遺跡であることが確認できた。遺構は，縄文時代の陥し穴1基，古墳時代の竪穴住居跡15軒，土坑4基，奈良時代の竪穴住居跡8軒，井戸跡1基，粘土採掘坑1基，遺物包含層1か所，近世の溝跡2条，道路跡1条，時期不明の竪穴住居跡1軒，掘立柱建物跡1棟，土坑51基，溝跡8条である。竪穴住居跡の分布は，調査区域南部の埋没谷をさけるように北部で密度が濃く，南に向かうにつれて薄くなる。遺物包含層からは，8世紀代に比定される土器が多量に出土しており，同時期の竪穴住居跡との関連がうかがわれる。

遺物は，遺物収納箱（60×40×20cm）に34箱出土している。遺物の大部分は，古墳時代から奈良時代にかけての土師器（坏，高坏，器台，甕，甑，ミニチュア土器），須恵器（坏，盤，鉢，壺，甕）である。その他の遺物として，縄文土器片，球状土錘，紡錘車，砥石，陶磁器などが出土している。

第2節　基本層序の検討

当遺跡は，調査区域南部に埋没谷を含む，緩やかな斜面部に立地しており，テストピットを掘った位置は，当遺跡において最も標高の高い調査区北部（A8f7区）である。テストピットの土層を観察すると，ローム層上部にはソフトローム層はなく，ソフト化が進まなかったか，耕作土にとり込まれたものと考えられる。

第1層は，黒褐色をした耕作土層で，ローム小ブロック・ローム粒子少量を含む。厚さは10～18cmである。

第2層は，暗褐色をした腐植土層である。ローム粒子を中量含み，粘性・締まりとも普通である。厚さは8～18cmである。

第3層は，暗褐色をしたハードローム層である。粘性は普通で，締まりは強い。厚さは20～31cmである。

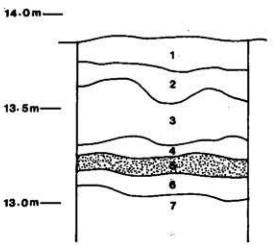
第4層は，褐色をしたハードローム層である。火山ガラス粒子を微量含む。始良Tn火山灰（AT）を含む層と考えられる。粘性・締まりとも強い。厚さは5～13cmである。

第5層は，暗褐色をしたハードローム層である。第Ⅱ黒色帯に相当するものと考えられる。粘性・締まりともに強い。厚さは8～12cmである。

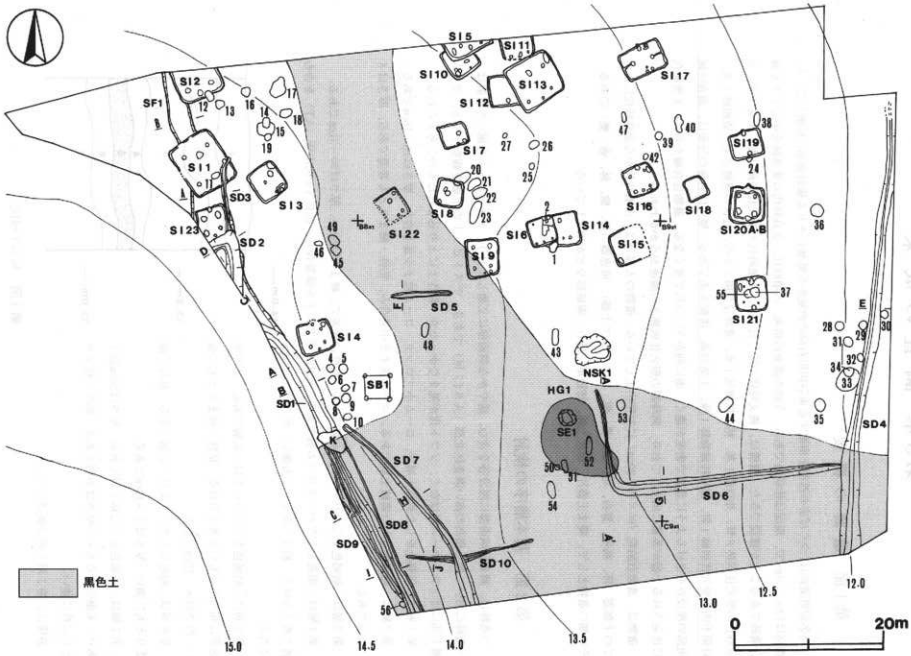
第6層は，褐色をしたハードローム層である。粘性・締まりともに強い。厚さは7～13cmである。

第7層は，暗褐色をした粘土層である。厚さは20cm以上あり，未掘のため本来の厚さは不明である。粘性・締まりともに特に強い。

遺構は，第3層上面で確認している。



第3図　基本土層図



第4図　鳥名前野遺跡全体図

第3節　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で，土坑1基を確認した。以下，確認した遺構と出土した遺物について記載する。

(1) 土　坑

第20号土坑（第5図）

位置　調査区域の北西部，A8i4区。

重複関係　南部の覆土上層を第8号住居に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸2.41m，短軸1.10mの楕円形で，深さ72cmである。

長径方向　N－50°－E

壁面　南西壁は外傾して，その他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。

底面　長径1.32m，短径0.65mの楕円形である。中央部がわずかにくぼんでいる。

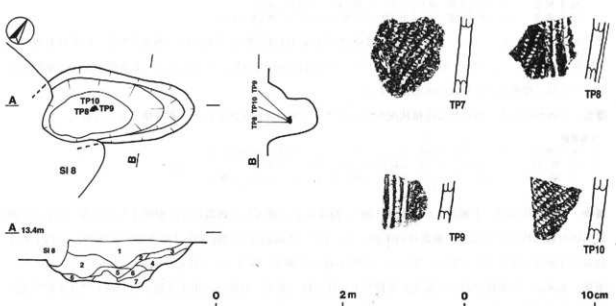
覆土　7層からなる。レンズ状の堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒	褐	色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒	褐	色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3	暗	褐	色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4	暗	褐	色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
5	極暗褐		色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
6	暗	褐	色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック微量
7	暗	褐	色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量

遺物　縄文土器6点が出土している。TP7～10は深鉢の胴部片である。TP7は覆土中から，TP8～10は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，遺構の形態から，陥し穴の可能性が考えられる。時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台式期)と考えられる。



第5図　第20号土坑・出土遺物実測図

第20号土坑出土遺物観察表

図版番号	時　期	形　式	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
TP7～10	縄文時代中期中葉	阿玉台Ⅱ～Ⅲ式	TP7～10は深鉢の胴部片で，直線的に立ち上がる。いずれもRLの羽節縄文が施されている。TP8・9は，隆帯に沿って2列の結節平行沈線文が施されている。	長石・赤色粒子にぶい赤褐色普通	第5図 PL19

2　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で，古墳時代の竪穴住居跡15軒，土坑4基を確認した。以下，確認した遺構と出土した遺物について記載する。

(1)　竪穴住居跡

第1号住居跡（第6・7図）

位置　調査区域の北西部，A7i5区。

重複関係　覆土の上部に第1号道路が構築されている。また，本跡の南東部を第11号土坑・第3号溝に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸7.42m，短軸6.46mの長方形である。

主軸方向　N－30°－W

壁　北西壁から北東壁にかけて検出され，壁高は5cmである。南側へ傾斜している地形のため，南西壁と南東壁の立ち上がりは確認できなかった。

壁溝　全周している。上幅12～18cm，下幅3～9cm，深さ5～10cmで，断面はU字形である。

床　全体的に平坦である。特に踏み固められた部分は認められない。

炉　中央部やや北西寄りに付設されている。長径82cm，短径68cmの楕円形で，床面から8cmほど掘りくぼめられた地床炉である。長径方向は住居跡の主軸方向と直交する。炉床面は皿状をしており，火熱を受けてわずかに赤変している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　明赤褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量

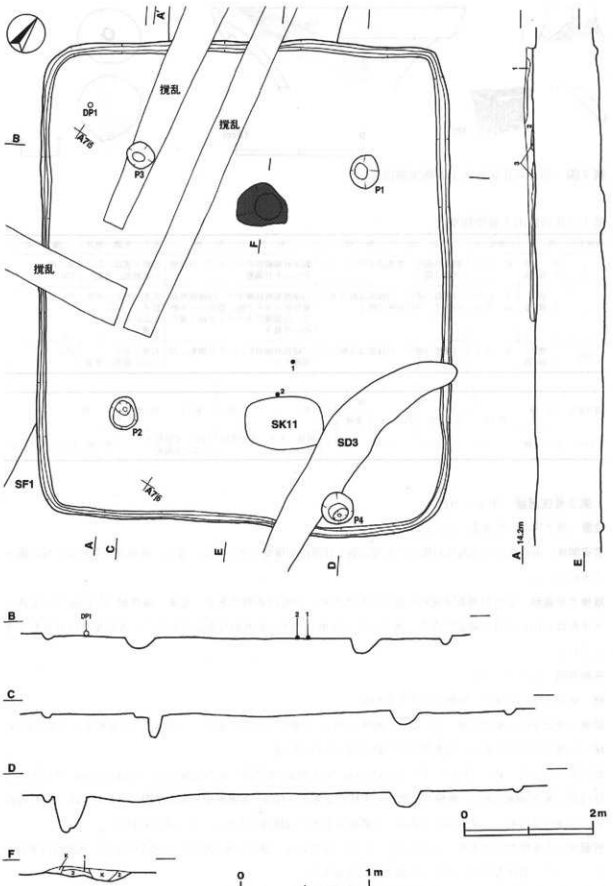
ピット　4か所（P1～P4）。P1～P3は径42～51cmのほぼ円形で，深さ46～68cmである。いずれも各コーナー寄りに位置しており，主柱穴と考えられる。P4は径48cmの円形，深さ56cmで，南東壁東寄りの壁際に位置しており，規模から主柱穴の可能性がある。

覆土　3層からなる。不自然な堆積状況やロームブロックの含有状況から，人為堆積と考えられる。

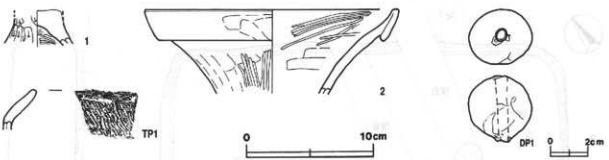
土層解説
1　極暗褐色　ローム中ブロック中量，ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
2　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
3　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量，ローム中ブロック微量

遺物　土師器片53点，土製品1点（球状土錘），撹乱により混入した陶器片4点が出土している。P1の土師器高坏の脚部片は中央部やや東寄りの床面から，P2の土師器壺の口縁部片は南東部の床面から，TP1の土師器片は南部の覆土中から出土している。DP1の球状土錘は，西コーナー付近の床面から出土している。

所見　本跡は，当遺跡において最大の規模をもつ住居跡である。時期は，出土土器から判断して4世紀中頃と考えられる。



第6図　第1号住居跡実測図



第7図　第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	高坏 土師器	B（2.7）	脚部の破片。脚部は中空で，ラッパ状に開く。	脚部外面縦位のヘラナデ，内面横位のハケ目調整。	砂粒・雲母，にぶい黄橙色，普通	第7図 5%
2	壺 土師器	A［20.0］ B（6.6）	口縁部の破片。口縁部は折り返し口縁で，外反気味に開く。	口縁端部外面横ナデ。口縁部外面縦位のヘラナデ後，縦位のヘラ磨き，内面横位のヘラナデ後，横位のヘラ磨き。	石英・長石・赤色粒子 にぶい褐色 普通	5%
TP1	甕 土師器	B（3.3）	口縁部の破片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部外面斜位のハケ目調整，内面横ナデ。	石英・長石 にぶい橙色，普通	5%

遺物番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	特徴	胎土・色調	備考
DP1	球状土錘	3.3	3.5	0.7	26.4	球体，ナデ，外面黒斑有	長石・赤色粒子 にぶい赤褐色	第7図　PL18　100%

第2号住居跡（第8・9図）

位置　調査区域の北西部，A7f5区。

重複関係　南西部から北西部の覆土の上部に第1号道路が構築されている。また，南東部を第12号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　北部が調査区域外へ延びているため，全容は不明である。北東－南西軸は5.92mで，北西－南東軸は4.70mだけが確認できた。南コーナーと東コーナーが直角であることから，方形または長方形と推定される。

主軸方向　N－25°－W

壁　壁高は18～35cmで，外傾して立ち上がる。

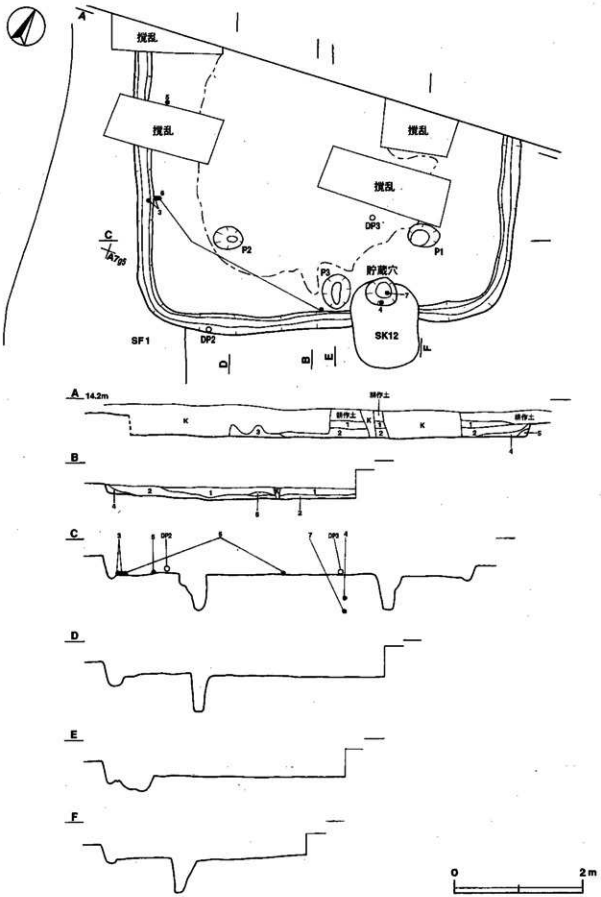
壁溝　確認された壁際を巡っている。上幅20～29cm，下幅7～14cm，深さ5～7cmで，断面形はU字形である。

床　全体的に平坦である。中央部がよく踏み固められている。

ピット　3か所（P1～P3）。P1は長径50cm，短径38cmの楕円形，深さ55cmで，P2は長径45cm，短径32cmの楕円形，深さ58cmである。規模と位置から主柱穴と考えられる。南東壁中央部の壁際にあるP3は，長径52cm，短径44cmの楕円形で，深さ24cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　南東壁際の北東寄りに付設されている。長径50cm，短径43cmの楕円形，深さ66cmで，断面形は逆台形をしている。長径方向は，住居の主軸方向と直交する。

覆土　6層からなる。レンズ状の堆積状況から，自然堆積と考えられる。

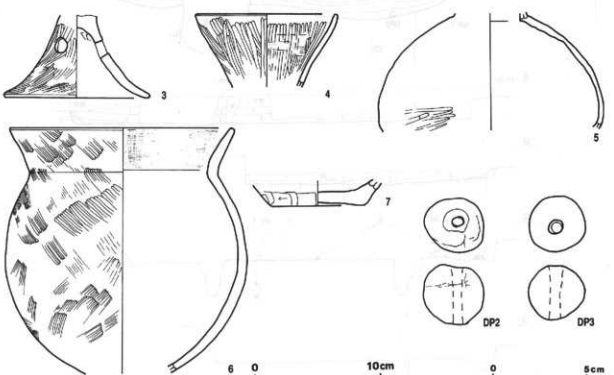


第8図　第2号住居跡実測図

土層解説
1 黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
2 極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
3 暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
4 暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5 褐　　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
6 暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

遺物　土師器片279点，土製品２点（球状土錘），撹乱により混入した須恵器片４点，陶磁器片８点が出土している。遺物の多くは壁際の覆土下層から出土しており，住居廃絶時に投棄された可能性が高い。P3 の土師器高坏の脚部片は，南西壁際の床面直上から出土している。P4 の土師器坩の口縁部片は貯蔵穴の覆土下層から，P5 の土師器坩の体部片は南西壁際の床面から，P6 の土師器甕は南東壁際の床面から土圧でつぶれた状態で，P7 の土師器甕の底部片は貯蔵穴の底面からそれぞれ出土している。DP2 及び DP3 は，球状土錘である。DP2 は南東壁際の覆土中層から，DP3 は中央部の床面からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，東西軸が約６m あり，当遺跡においては大形の住居跡である。時期は，出土土器から４世紀中頃と考えられる。



第９図　第２号住居跡出土遺物実測図

第２号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	高坏 土師器	B (6.7) D 11.6	脚部片。脚部はラッパ状に開き，中位に円形の透かし孔３か所が空く。	脚部外面縦位のヘラ磨き，内面ナデ。	砂粒・白色粒子にぶい赤褐色 普通	第９図 PL11 40%
4	坩 土師器	A [11.4] B (5.8)	口縁部の破片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面縦位のヘラ磨き。	石英・長石・雲母・赤色粒子 明赤褐色，普通	PL11 30%
5	坩 土師器	B (9.2)	体部の破片。体部は球状を呈する。	体部内・外面丁寧なナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子 明赤褐色，普通	PL11 40%

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
6	甕 土師器	A 17.0 B (19.2)	底部欠損。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外傾する。	口縁部外面斜位のハケ目調整，内面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整，内面ナデ。	砂粒・石英・白色粒子 明赤褐色，普通	PL11 70%
7	甕 土師器	B (2.0) C 7.2	底部から体部の破片。底部は中央がややくぼむ平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面横位のヘラ削り，内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 明赤褐色，普通	20%

遺物番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	特徴	胎土・色調	備考
DP2	球状土錘	3.2	3.2	0.7	26.6	球体，ナデ	長石・赤色粒子，にぶい赤褐色	第9図 PL18 100%
DP3	球状土錘	3.0	2.9	0.8	20.9	球体，ナデ	長石・赤色粒子，にぶい橙色	PL18 100%

第3号住居跡（第10・11図）

位置　調査区域の北西部，A7i7区。

規模と平面形　長軸4.55m，短軸4.24mの方形である。

主軸方向　N－34°－W

壁　壁高は11～14cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　北コーナー部を除き，壁際を巡っている。上幅10～21cm，下幅4～7cm，深さ5～7cmで，断面形はU字形である。

床　全体的に平坦である。中央部から北東壁寄りにかけて踏み固められている。貯蔵穴1を囲むように幅19～30cm，高さ5cmの馬蹄形の，貯蔵穴2を囲むように幅16～24cm，高さ4cmのL字状の高まりがあり，上面が硬化している。

炉　中央部北寄りに付設されている。径35cmの円形で，床面から5cmほど掘りくぼめられた地床炉である。炉床面は皿状をしており，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説
1　明赤褐色　焼土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　明赤褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量

ピット　2か所（P1・P2）。P1は，長径30cm，短径25cmの楕円形，深さ31cmで，住居のほぼ中央に位置し，主柱穴と考えられる。南東壁際中央部の北東寄りにあるP2は，径28cmの円形，深さ40cmで，南東壁から中央部に向かって斜めに掘り込まれていることや位置から，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　2か所。貯蔵穴1は，北コーナー部の壁際に付設されている。長径77cm，短径61cmの，長径方向を住居跡の主軸方向と同じくする楕円形である。深さは16cmで，断面は逆台形をしている。貯蔵穴2は，東コーナー部に付設されている。長径53cm，短径42cmの，長径方向を住居跡の主軸方向と直交する長方形である。深さは47cmで，断面は逆台形をしている。

貯蔵穴1土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

貯蔵穴2土層解説
1　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　黒褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
3　暗褐色　ローム粒子中量・ローム小ブロック少量
4　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量

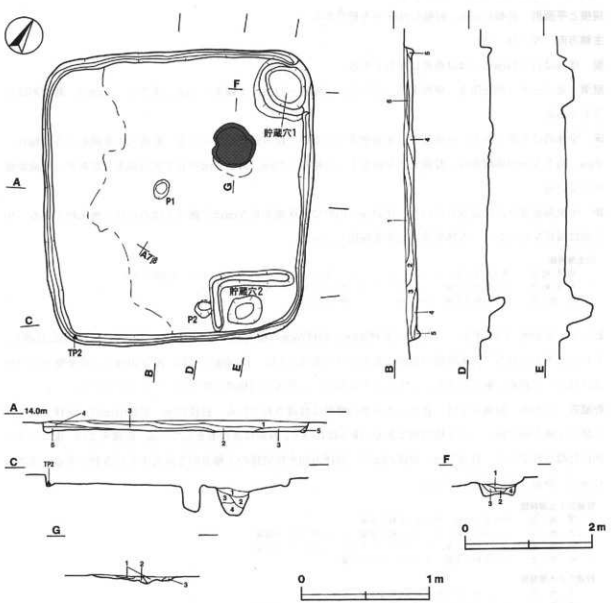
覆土　6層からなる。レンズ状の堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説

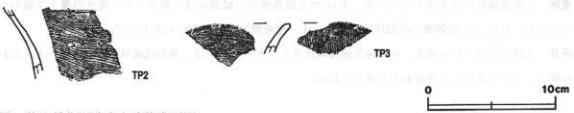
1	黒	褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2	暗	褐 色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3	黒	褐 色	ローム粒子少量
4	極暗褐色		ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量，焼土小ブロック微量
5	暗	褐 色	ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
6	褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

遺物　土師器片40点，陶器片4点が出土している。TP2の土師器甕の口縁部片は，南コーナー部の壁溝内から出土しており，住居廃絶時に投棄されたものと考えられる。TP3の土師器甕の体部片は，北部の覆土中から出土している。陶器片は，後世の撹乱により混入したものである。

所見　本跡は，炉や貯蔵穴，出入り口ピット，硬化面などが北東壁寄りに位置し，南西壁寄りの床が軟質であることから，生活空間を使い分けていた様子がうかがえる。また，柱穴と考えられるピットが住居の中心部に設けられており，他の住居跡とは異なった様相を呈している。時期は，出土土器から4世紀と考えられる。



第10図　第3号住居跡実測図



第11図　第３号住居跡出土遺物実測図

第３号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
TP2	甕 土師器	B（3.1）	口縁部の破片。口縁部は外反気味に開く。	口縁端内・外面横ナデ。口縁部内・外面斜位のハケ目調整。	砂粒・石英・長石にぶい赤褐色 普通	第11図 5%
TP3	甕 土師器	B（5.4）	体部の破片。内彎して立ち上がる。	体部外面斜位のハケ目調整，内面ナデ。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色，普通	5%

第５号住居跡（第12図）

位置　調査区域の北部，Ａ８ｅ４区。

重複関係　南コーナー部で第10号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　北部が調査区域外に延びているため，全容は不明である。北東－南西軸は5.87mで，北西－南東軸は2.26mだけが確認できた。南コーナーと東コーナーが直角であることから，方形または長方形と推定される。

主軸方向　本跡の南東壁はＮ－32°－Ｗを指している。

壁　壁高は８～16cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床　全体的に平坦である。特に踏み固められた部分は認められない。

ピット　３か所（Ｐ１～Ｐ３）。Ｐ１は長径40cm，短径30cmの楕円形で，深さ34cmである。Ｐ２は径43cmの円形で，深さ51cmである。それぞれ東コーナー・南コーナーに寄った位置で確認されている。規模と位置から主柱穴と考えられる。南東壁中央部の壁際にあるＰ３は，長径58cm，短径39cmの楕円形で，深さ12cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　南コーナー部に付設されている。長径77cm，短径32cmの，長径方向を住居跡の主軸方向と同じくする楕円形である。深さは38cmで，断面は逆台形をしている。

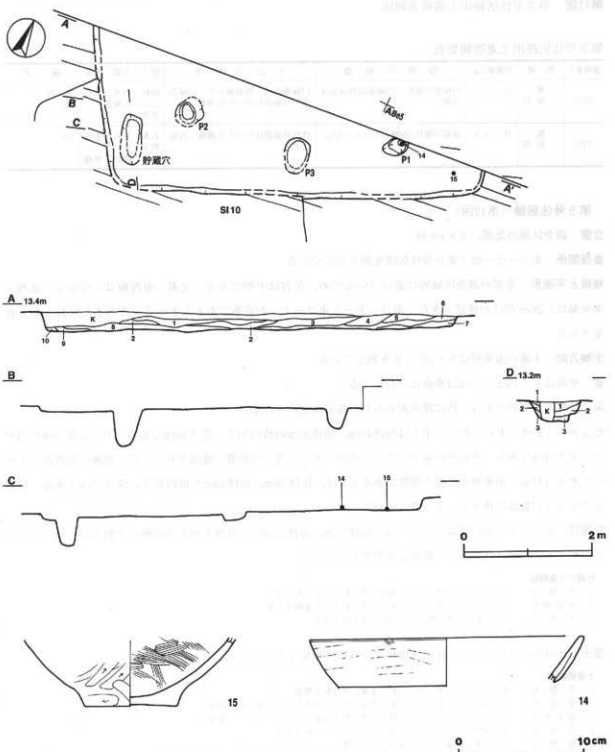
貯蔵穴土層解説
1　黒　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　極暗褐色　　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　　ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量

覆土　10層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック・焼土粒子微量
3　極暗褐色　　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量，ローム中ブロック微量
4　黒　褐　色　　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム中ブロック微量
7　褐　　色　　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
8　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
9　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
10　褐　　色　　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

遺物　土師器細片73点が出土している。P14の土師器甕の口縁部片は，東コーナー寄りの覆土下層から出土している。P15の土師器甕の底部片は，東コーナー部壁際の床面直上から出土している。

所見　本跡からは，炉や壁溝，床の硬化面は検出されなかった。炉は，調査区域外に存在すると考えられる。時期は，出土土器から5世紀前半と考えられる。



第12図　第5号住居跡・出土遺物実測図

第５号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
14	甕 土師器	A［21.5］ B（3.6）	口縁部の破片。口縁部は折り返し口縁で，内彎気味に外方に開く。	口縁端部外面横ナデ。口縁部内・外面ナデ。	砂粒・雲母，にぶい黄橙色，普通	第12図 5%
15	甕 土師器	B（5.2） C［7.4］	底部の破片。底部は突出する平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ削り，内面斜位のハケ目調整。	石英・長石・雲母，にぶい橙色 普通	PL11，5% 体部外面炭化物付着

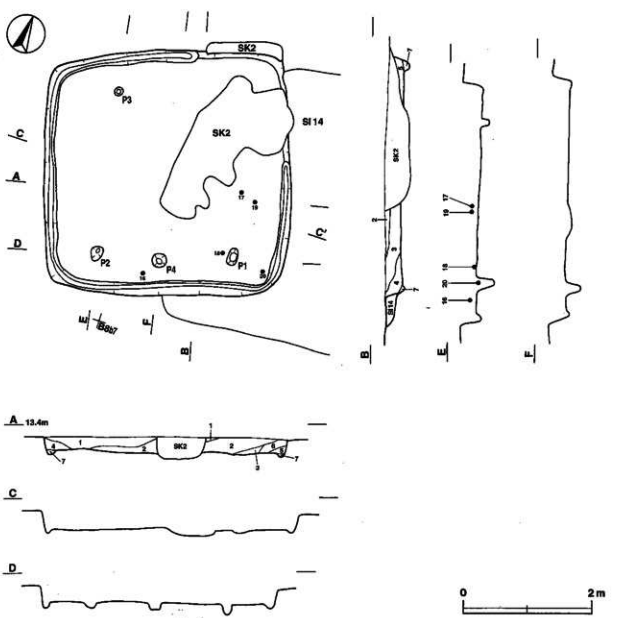
第６号住居跡（第13・14図）

位置　調査区域の中央部，Ｂ８ａ７区。

重複関係　東部で第14号住居跡を掘り込み，北東部を第２号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸3.82m，短軸3.76mの方形である。

主軸方向　Ｎ－19°－Ｗ



第13図　第６号住居跡実測図

壁　壁高は22～30cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　壁際を全周する。上幅11～15cm，下幅５～８cm，深さ５～10cmで，断面はU字形である。

床　全体的に平坦である。特に踏み固められた部分は認められない。

ピット　４か所（P1～P4）。P1は南東コーナー付近に位置し，長径26cm，短径15cmの楕円形で，深さ18cmである。P2は南西コーナー付近に位置し，長径23cm，短径18cmの楕円形で，深さ24cmである。P3は北西コーナー付近に位置し，径15cmの円形で，深さ15cmである。P1～P3は，位置から主柱穴と考えられる。北東コーナー付近に存在したと思われる主柱穴は，確認できなかった。第２号土坑に掘り込まれたと考えられる。P4は径23cmの円形で，深さ24cmである。南壁中央部の壁際に位置していることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

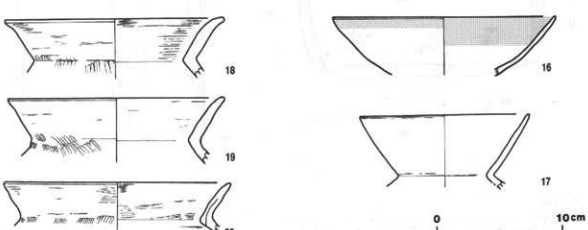
覆土　７層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2	暗　褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム中ブロック微量
4	黒　褐　色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
5	暗　褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
6	暗　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
7	黒　褐　色	ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　土師器片81点，撹乱により混入した陶器片１点が出土している。遺物は，南東コーナー寄りの覆土中層から下層にかけて集中して出土しており，住居廃絶時に投棄された可能性がある。P16の高坏の坏部片は，南壁寄りの覆土下層から出土している。P17の坩の口縁部片，P18の甕の口縁部片，P19の甕の口縁部片は，いずれも南東コーナー寄りの覆土下層から出土している。P20の甕の口縁部片は，南東コーナー部の覆土下層から出土している。

所見　本跡からは，炉や床の硬化面は検出されなかった。時期は，出土土器から４世紀中頃と考えられる。



第14図　第６号住居跡出土遺物実測図

第６号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
16	高　坏 土師器	A［17.6］ B（ 4.6）	坏部の破片。坏部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部内・外面ナデ。口縁部外面及び坏部内面上半部赤彩。	石英・長石 にぶい橙色 普通	第14図 PL11 5%
17	坩 土師器	A［13.4］ B（ 5.7）	頸部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面丁寧なナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい黄橙色 普通	5%

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
18	甕 土師器	A [17.4] B (4.7)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横位のハケ目調整後，横ナデ。	石英・長石 にぶい橙色 普通	第14図 5%
19	甕 土師器	A [17.0] B (5.0)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整，内面ナデ。	石英・長石 橙色 普通	5%
20	甕 土師器	A [17.8] B (4.1)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は器厚を減じながら，外傾する。	口縁部内・外面横位のハケ目調整後，横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整，内面ナデ。頸部内面に輪積み痕を残す。	石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	5%

第7号住居跡（第15図）

位置　調査区域の北部，A 8 h4 区。

規模と平面形　長軸3.53m，短軸2.74～3.05m の台形である。

主軸方向　N－15°－W

壁　壁高は6～14cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　壁際を全周している。上幅14～23cm，下幅5～12cm，深さ5～9cmで，断面はU字形である。

床　ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。貯蔵穴を囲むように幅30cm，高さ3cmのL字状の高まりがあり，上面が硬化している。

炉　中央部東寄りに付設されており，長径65cm，短径48cmの楕円形，深さ5cmの地床炉である。長径方向は，住居跡の主軸方向と直交する。炉床面は皿状をしており，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説
1　黒　褐　色　　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，焼土小ブロック・炭化物微量
2　明赤褐色　　ローム粒子少量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量

ピット　1か所。南壁中央部やや東寄りの壁際に位置し，長径34cm，短径28cmの楕円形，深さ20cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説
1　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　暗　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子中量
3　黒　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
4　黒　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子少量

貯蔵穴　南東コーナー部に位置し，長径59cm，短径41cmの，長径方向が主軸方向と直交する楕円形である。深さは19cmで，断面は逆台形である。

貯蔵穴土層解説
1　黒　褐　色　　ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・炭化粒子微量

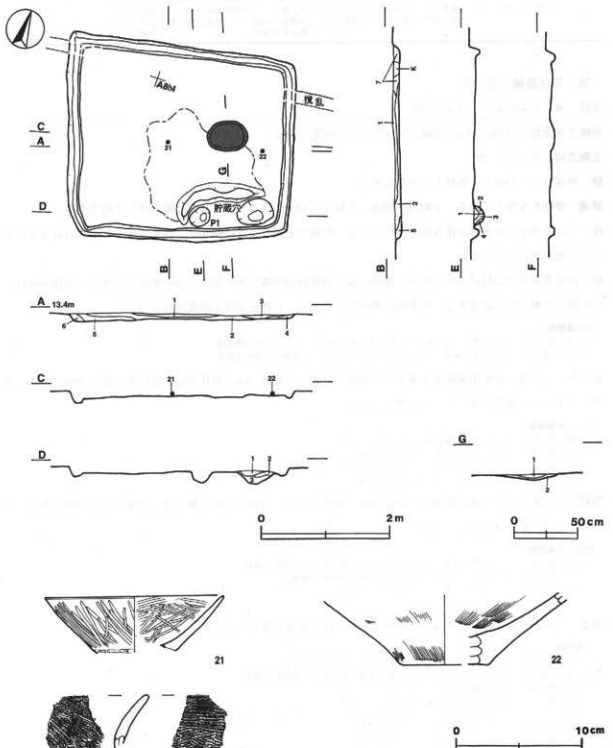
覆土　7層からなる。レンズ状の堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　極暗褐色　　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　　ローム粒子少量
4　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
6　暗　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子中量
7　黒　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物　土師器片47点が全体から出土している。P21 の高坏の口縁部片は，中央部の覆土下層から出土している。P22 の甕の底部片は，中央部東寄りの覆土下層から出土している。TP4 の甕の口縁部片は，南東コーナー

付近の覆土下層から出土している。

所見　本跡は，炉や硬化面，貯蔵穴，出入り口ピットなどの内部施設が東壁寄りに付設され，西壁寄りの床面が軟質であることから，生活空間を使い分けていた様子がうかがえる。時期は，出土土器から５世紀前半と考えられる。



第15図　第７号住居跡・出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
21	高坏 土師器	A [14.0] B (4.3)	坏部の破片。坏部は外傾して直線的に立ち上がり，口縁部に至る。	坏部外面縦位のヘラ磨き，内面放射状のヘラ磨き。	石英・長石・赤色粒子にぶい赤褐色 普通，内面黒斑有	第15図 PL11 10%
22	甕 土師器	B (5.5) C [6.8]	底部の破片。底部は突出する平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	体部内・外面縦位のハケ目調整。	石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい橙色，普通	5%
TP4	甕 土師器	B (4.2)	口縁部の破片。口縁部は外反気味に開く。	口縁端部内・外面横ナデ。口縁部内・外面斜位のハケ目調整。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色，普通	5%

第8号住居跡（第16～18図）

位置　調査区域の北部，A 8 j 4 区。

重複関係　北東部で第20号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸3.76m，短軸3.65m の方形である。

主軸方向　N－6°－E

壁　壁高は27～29cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　壁際を全周している。上幅 9 ～13cm，下幅 6 ～ 9 cm，深さ 5 ～ 8 cmで，断面はU字形である。

床　ほぼ平坦である。特に踏み固められた部分は認められない。

炉　2か所。炉1は，中央部に位置し，長径73cm，短径50cmの不整楕円形で，深さ 8 cmの地床炉である。長径方向は住居跡の主軸方向と直交する。第3層の下面が赤変硬化していることから，炉床面と考えられる。炉2は，炉1の北西側に隣接して設けられており，長径68cm，短径46cmの不整楕円形で，深さ 6 cmの地床炉である。長径方向は，住居跡の主軸方向と一致する。炉床面は，火熱を受けて赤変し，わずかに硬化している。

炉1土層解説

1	暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子中量，ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子少量
2	黒褐色	炭化粒子中量，ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物少量
3	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
4	極暗赤褐色	ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量

貯蔵穴　南西コーナー部に位置し，長径53cm，短径46cmの，長径方向が南壁に平行する楕円形である。深さは42cmで，断面は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
3	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量，ローム大ブロック・焼土粒子微量
4	黒褐色	ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子少量

覆土　9層からなる。下層（5～9層）は焼土及び炭化物の含有状況から，人為堆積と考えられる。上層（1～4層）はレンズ状の堆積状況から，自然堆積と考えられる。

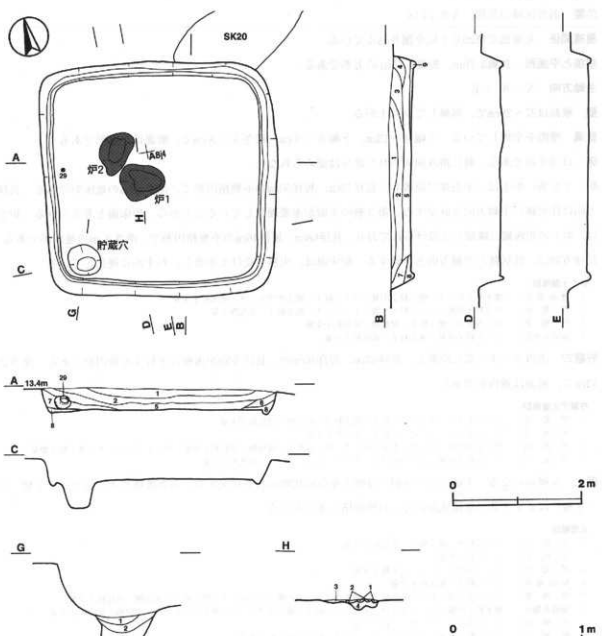
土層解説

1	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2	黒褐色	ローム粒子少量
3	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
4	極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
5	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
6	極暗赤褐色	焼土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
7	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
8	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
9	黒褐色	炭化粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量

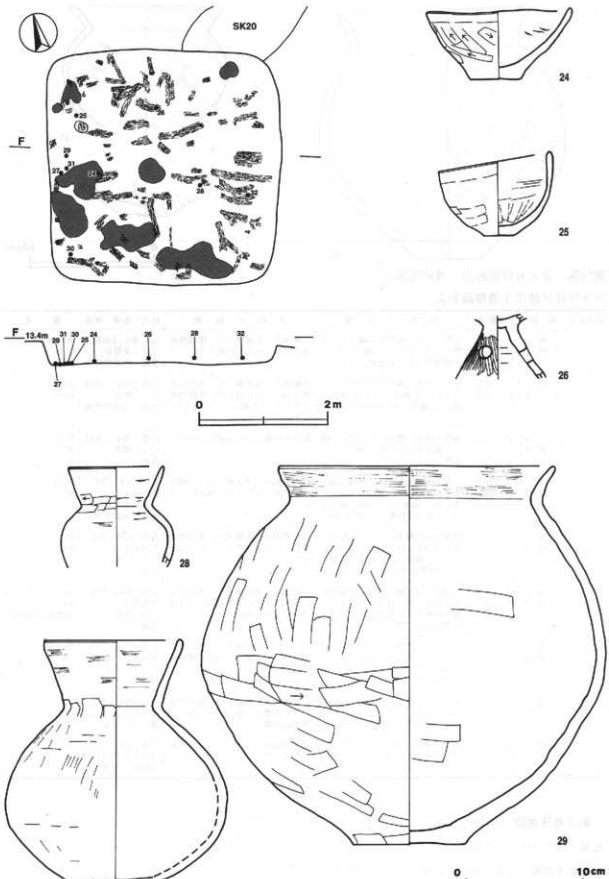
遺物　土師器片228点，炭化材が出土している。図示した遺物はいずれも焼土塊内や焼土塊上部からの出土で，住居が焼失した時の遺物と考えられる。P24・25 は，完形の椀である。P24 は中央部西寄りの床面から逆位

で，P25 は北西コーナー付近の床面から逆位でそれぞれ出土している。P26 の高坏の脚部片は，中央部北寄りの床面から出土している。P27 の坩は西壁際の床面から斜位の状態で，P28 の坩は中央部の覆土下層から破片の状態でそれぞれ出土している。P29 の甕は，西壁際の床面から斜位の状態で出土しており，外面に火熱を受けた痕跡がある。P30 の甕は南西コーナー部の床面から口縁部を西に向けた斜位の状態で，P31 の甕は西壁際の床面から口縁部を南に向けた横位の状態で，P32 の甕の底部片は中央部東寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。垂木と考えられる炭化材は，焼土の下部から放射状に検出されている。

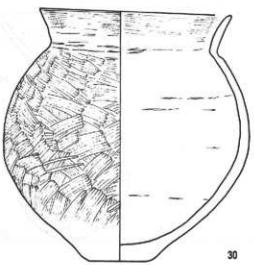
所見　本跡は，炭化材や焼土塊の広がりから，焼失住居と考えられる。時期は，出土土器から 4 世紀中頃と考えられる。

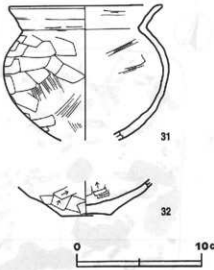


第16図　第 8 号住居跡実測図



第17図　第８号住居跡・出土遺物実測図





第18図　第８号住居跡出土遺物実測図

第８号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
24	椀 土師器	A 11.5 B 5.5 C 3.8	完形。平底。底部から緩やかに内湾して立ち上がり，口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り，内面ナデ。	石英・長石・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通，内面黒斑有	第17図 PL11 100%
25	椀 土師器	A 8.9 B 6.5 C 2.2	完形。平底。底部から内湾して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は直立し，端部は丸くおさめている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り後ナデ。体部内面上半ナデ，下半縦位のヘラ削り後，ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通，内面黒斑有	PL11 100%
26	高　坏 土師器	B (5.0)	脚部の破片。脚部はハの字状に開く。脚部中位に円形の透かし孔３か所が望く。	脚部外面縦位のヘラ磨き，内面ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	PL11 20%
27	坩 土師器	A [10.9] B 19.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は扁平な球形を呈し，最大径を中位やや下方にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁端部内・外面横ナデ。口縁部内・外面丁寧なナデ。体部内・外面ナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通，外面黒斑有	PL11 80%
28	坩 土師器	A [7.4] B (7.8)	体部から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面横位のヘラナデ。体部内・外面ナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	PL11 30%
29	甕 土師器	A 21.5 B 29.7 C 8.6	口縁部一部欠損。平底。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部は緩やかに屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上半ヘラナデ，下半縦位のヘラ削り。体部内面横位のヘラナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	PL11 90% 外面炭化物付着
30	甕 土師器	A 15.2 B 20.1 C 4.7	口縁部一部欠損。平底。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整，内面輪積み痕を残すナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	第18図 PL12 95%
31	甕 土師器	A 12.1 B (10.6)	底部欠損。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ハケ目調整後，横位のヘラ削り。体部内面横位のヘラナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子，にぶい黄橙色，普通	PL12 75%
32	甕 土師器	B (2.7) C 3.9	底部の破片。底部は中央がややくぼむ平底。体部は内湾しながら立ち上がる。	体部外面斜位のヘラ削り，内面縦位のヘラナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子，にぶい赤褐色，普通	5%

第９号住居跡（第19～22図）

位置　調査区域の中央部，Ｂ８ｂ５区。

規模と平面形　長軸4.80m，短軸4.50mの方形である。

主軸方向　Ｎ－０°

壁　壁高は28～39cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦である。特に踏み固められた部分は認められない。壁際10cmほどを除く床全体がローム土を用いた貼床で，5～14cmの厚さで貼られている。壁際は地山を床として利用している。掘り方は，全体に著しい凹凸を呈する。

貼床土層解説

1　褐　　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量
2　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大ブロック・炭化物少量
3　暗 褐 色　ローム粒子・炭化粒子中量，ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
4　暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム大ブロック・炭化物少量
5　褐　　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，焼土小ブロック・炭化物少量

貯蔵穴　南壁東寄りの壁際に位置し，長径54cm，短径41cmの，長径方向を住居跡の主軸方向と同じくする楕円形である。深さは20cmで，断面は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

1　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット　5か所(P1～P5)。P1～P4は，径35～46cmのほぼ円形で，深さ25～56cmである。いずれも各コーナー寄りに位置しており，規模と位置から主柱穴と考えられる。P5は，径27cmの円形，深さ33cmで，南壁中央部の東寄りに位置し，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説

1　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
2　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
4　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
5　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

覆土　6層からなる。レンズ状の堆積状況から，自然堆積と考えられる。

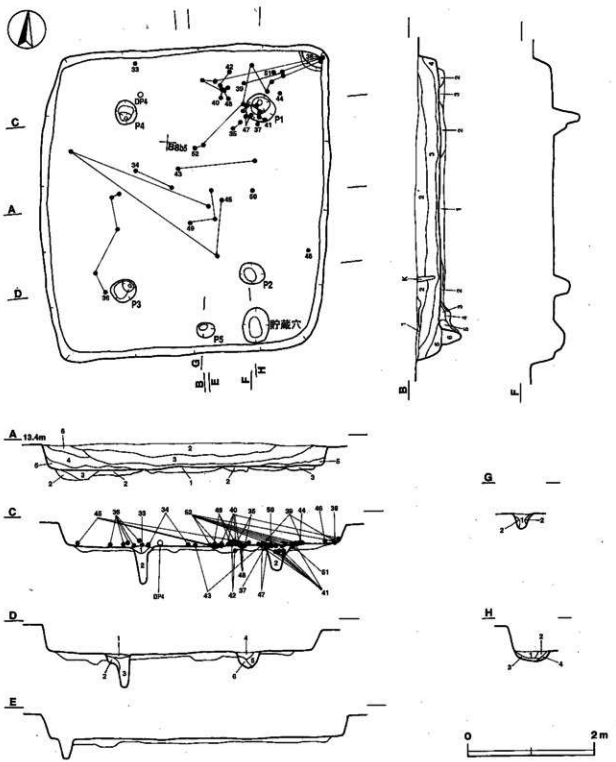
土層解説

1　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3　黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
4　黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
6　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量

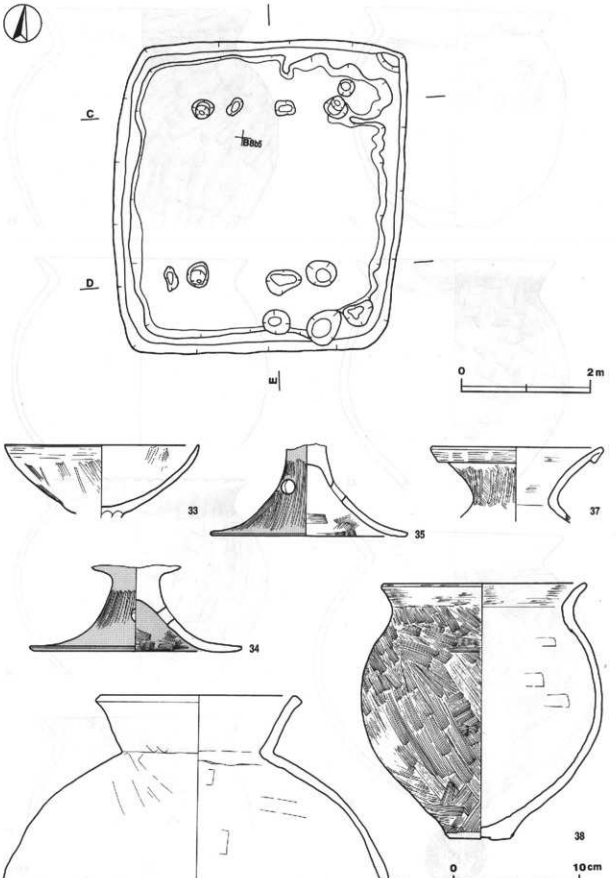
遺物　土師器片740点，土製品1点（球状土錘），撹乱により混入した陶磁器片2点が出土している。各壁際の覆土下層や床面から良好な状態で遺物が出土しており，それらは住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。図示した土器はいずれも土師器である。P33の高坏は北壁際の床面から斜位で，P34の高坏は中央部の床面から，P35の高坏は中央部北東寄りの床面からそれぞれ出土している。P36の壺は南西コーナー寄りの覆土下層と中央部西側の覆土下層から出土した破片が接合したものである。P37の壺の口縁部片は北東コーナー寄りの床面から出土している。P38の甕は北東コーナー部壁際の床面から正位で，P39の甕は北壁際やや東寄りの床面から斜位で，P42の甕は中央部北寄りの床面から正位で，P44の甕は北東コーナー付近の床面から破片の状態で，P46の甕は東壁際南寄りの床面から破片の状態で，P47・P48の甕は北東コーナー付近の床面から破片の状態で，P50の小形甕は中央部東寄りの床面から正位で，P51の甕は北東コーナー付近の床面から破片の状態でそれぞれ出土している。P40の甕は北東コーナー付近の覆土下層と北壁寄りの床面から，P41の甕は北東コーナー付近の床面とピット1内から，P43の甕は中央部と中央部東寄りの床面から，P45の甕は西壁際の覆土下層と中央部の床面から，P49の甕は中央部の覆土下層と床面からそれぞれ出土した破片が接合したものである。P38・P40・P41・P46の甕の外面には煤が付着し，火熱を受けた痕跡がある。P52の台付甕は北東コーナー付近の床面から横位で出土した底部と北壁際東寄りの覆土下層から出土した口

縁部片，中央部と北東コーナー部壁際の床面から出土した体部片が接合したものである。DP4 の球状土錘は，中央部北寄りの床面から出土している。

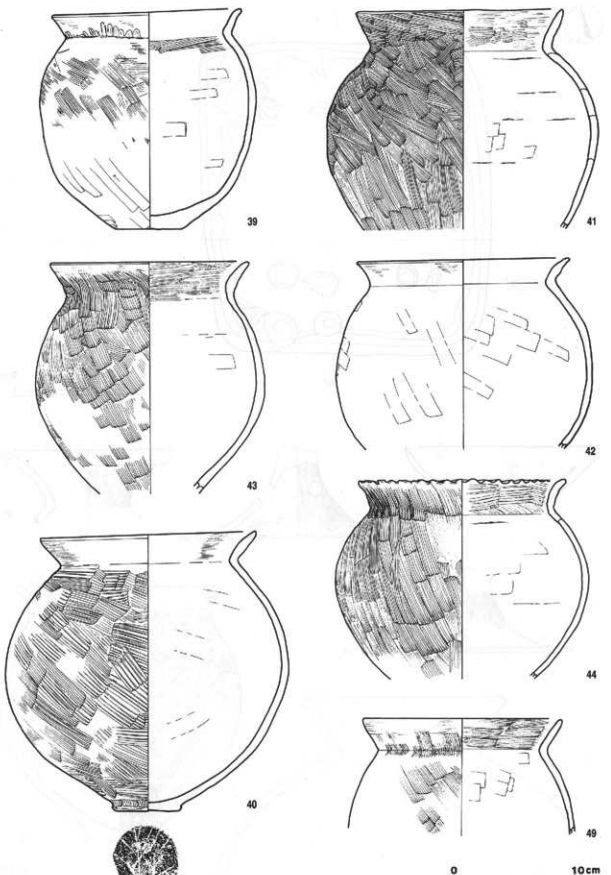
所見　本跡の掘り方の壁際には，幅10cmほどの高い部分が巡っていることが確認された。また，本跡から炉が検出されずに煤の付着した甕４点が出土していることから，本跡とは別に煮炊きをする住居あるいは施設が存在した可能性が考えられる。時期は，出土土器から４世紀中頃と考えられる。



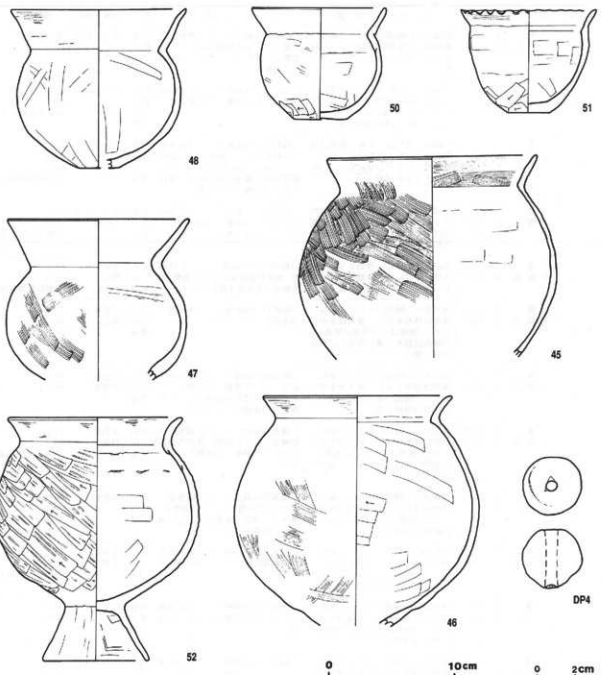
第19図　第９号住居跡実測図



第20図　第９号住居跡掘り方・出土遺物実測図



第21図　第９号住居跡出土遺物実測図(1)



第22図　第９号住居跡出土遺物実測図(2)

第９号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
33	高坏 土師器	A 15.8 B (5.5)	脚部欠損。坏部は下位に段をもち，内彎して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面縦位のヘラ磨き，内面放射状のヘラ磨き。	石英・長石・雲母・赤色粒子 橙色，普通	第20図 PL12 40%
34	高坏 土師器	B (6.6) D [16.8]	脚部の破片。脚部はラッパ状に開く。脚部中位に円形の透かし孔３か所が空く。	脚部外面縦位のヘラ磨き，内面ナデ。脚部外面ナデ，内面横位のハケ目調整。内・外面赤彩。	長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	PL13 20%
35	高坏 土師器	B (7.3) D 15.5	脚部の破片。脚部はラッパ状に開く。脚部中位に円形の透かし孔３か所が空く。	脚部外面縦位のヘラ磨き，内面横位のハケ目調整。外面赤彩。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色，普通	PL12 30%
36	壺 土師器	A [15.2] B (14.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は球形と推定される。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラナデ，内面横位のヘラナデ。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	PL12 10%

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
37	壺 土師器	A [13.2] B (5.8)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は折り返し口縁で，外反気味に開く。	口縁部外面横位のハケ目調整，内面横ナデ。頸部外面斜位のハケ目調整後，縦位のヘラ磨き。内面ハケ目調整後，ナデ。	石英・長石・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	第20図 PL12 5 %
38	甕 土師器	A 16.0 B 20.0 C 4.7	口縁部一部欠損。底部はやや突出する平底。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部は緩やかに屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整，内面横位のヘラナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	PL13 95% 外面炭化物付着
39	甕 土師器	A 14.9 B 17.4 C 5.1	口縁部一部欠損。半底。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上半斜位のハケ目調整，下半斜位のヘラ削り，内面横位のヘラナデ。頸部外面に輪積み痕を残し，棒状工具による縦位の圧痕有。	石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	第21図 PL13 90% 外面炭化物付着
40	甕 土師器	A 17.1 B 22.0 C 5.0	体部一部欠損。平底。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整，内面横位のヘラナデ。底部木葉痕。	石英・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	PL13 75% 外面炭化物付着
41	甕 土師器	A 16.2 B (17.2)	底部欠損。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横位のハケ目調整。体部外面斜位のハケ目調整，内面輪積み痕を残す横位のヘラナデ。	長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	PL12 50% 外面炭化物付着
42	甕 土師器	A 16.8 B (14.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は器厚を減じながら，外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面斜位のヘラナデ。	長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	PL12 40%
43	甕 土師器	A 15.6 B (18.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部は緩やかに屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁端部外面横ナデ。口縁部外面斜位のハケ目調整，内面横位のハケ目調整。体部外面斜位のハケ目調整，内面横位のヘラナデ。	長石・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	PL12 40%
44	甕 土師器	A [16.4] B (15.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外反気味に開く。端部は波状を呈する。	口縁部外面斜位のハケ目調整，内面横位のハケ目調整。体部外面斜位のハケ目調整，内面横位のヘラナデ。	長石・赤色粒子 にぶい褐色 普通	PL12 30% 外面炭化物付着
45	甕 土師器	A [16.2] B (15.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部外面縦位のハケ目調整後，横ナデ，内面横位のハケ目調整後，横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整，内面横位のヘラナデ。	長石・赤色粒子 灰褐色 普通	第22図，PL12 40% 外面炭化物付着
46	甕 土師器	A [14.8] B (18.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ハケ目調整後，ナデ，内面横位のヘラナデ。	長石・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	PL13 30% 外面炭化物付着
47	甕 土師器	A [14.4] B (12.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整後，ナデ，内面横位のヘラナデ。	石英・長石・雲母 橙色 普通	PL13 65%
48	甕 土師器	A [13.8] B 12.9 C 3.2	底部から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ，下端縦位のヘラ削り，内面ヘラナデ。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	PL13 40%
49	甕 土師器	A [15.7] B (9.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がる。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ，内面横位のハケ目調整。体部外面斜位のハケ目調整，内面横位のヘラナデ。	長石・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	第21図 5 %
50	小形甕 土師器	A 10.4 B 8.8 C 4.1	口縁部一部欠損。平底。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ，下端横位のヘラ削り，内面横位のヘラナデ。	長石・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	第22図 PL13 90%
51	小形甕 土師器	A [10.6] B 8.0 C 3.3	口縁部・体部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり，頸部でくびれ，口縁部は外傾する。端部にキザミ目をもつ。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラナデ，下端斜位のヘラ削り，内面横位のヘラナデ。	砂粒・赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	PL13 50%
52	台付甕 土師器	A 13.4 B 19.0 D 8.3	口縁部・体部一部欠損。脚部はハの字状に開く。体部は球形を呈し，中位に最大径をもつ。頸部は緩やかに屈曲し，口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のヘラ削り，内面横位のヘラナデ。脚台部外面縦位のヘラナデ，内面横位のヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	PL13 85%

遺物番号	器種	計測値				特徴	胎土・色調	備考
		径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
DP4	球状土錘	3.1	3.1	0.6	24.9	球体，ナデ，黒斑有	石英・長石・赤色粒子，にぶい橙色	第22図 PL18 100%

第10号住居跡（第23～25図）

位置 調査区域の北部，A 8 e4 区。

重複関係 北部を第５号住居に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸4.03m，短軸3.90m の方形である。

主軸方向 N－50°－E

壁 壁高は16～30cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 壁際を全周している。上幅11～15cm，下幅６～10cm，深さ５～８cmで，断面はU字形である。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。貯蔵穴を囲むように幅24～31cm，高さ５cmの半円状の高まりがあり，全面が硬化している。

炉 中央部東寄りに付設されている。長径69cm，短径25cmの，長径方向を住居跡の主軸方向と同じくする楕円形，深さ５cmの地床炉である。炉床面は皿状をしており，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗赤褐色 焼土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量
3 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量

ピット １か所。南東壁中央部北東寄りの壁際に位置し，径24cmの円形で，深さは８cmである。位置や規模から主柱穴とは考えられず，性格は不明である。

貯蔵穴 南コーナー部に位置し，長径80cm，短径62cmの，長径方向が住居跡の主軸方向と直交する楕円形である。深さは41cmで，断面は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

1 黒 褐 色 ローム小ブロック少量，ローム粒子微量
2 黒 褐 色 ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
3 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
4 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
5 黒 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム大ブロック少量

覆土 10層からなる。レンズ状の堆積状況から，自然堆積と考えられる。

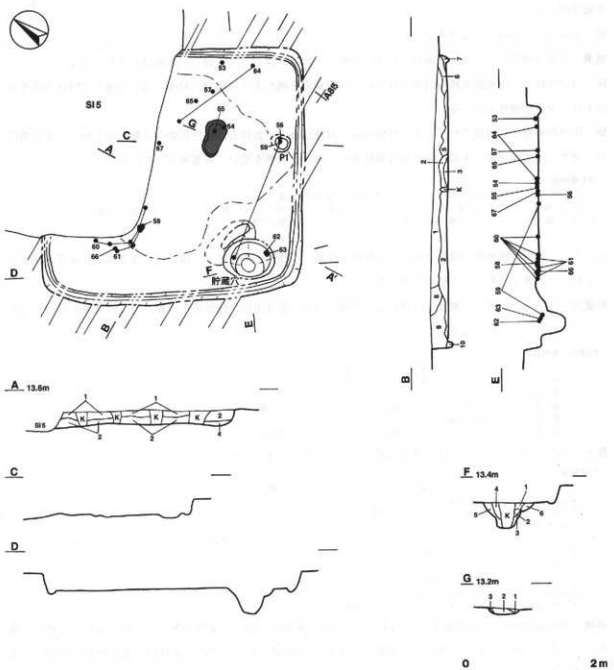
土層解説

1 黒 褐 色 ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・ローム粒子微量
2 極暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
4 極暗褐色 ローム粒子少量
5 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック微量
6 黒 褐 色 ローム小ブロック少量
7 暗 褐 色 ローム粒子中量
8 黒 褐 色 ローム小ブロック微量
9 極暗褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
10 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

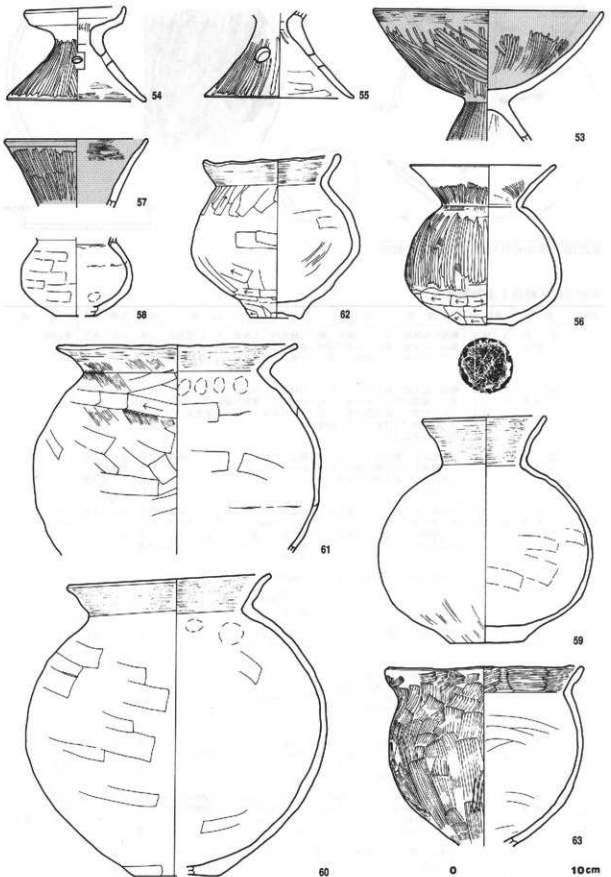
遺物 土師器片308点，須恵器片７点が出土している。床面直上出土の遺物が多く，それらは住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。図示した遺物はいずれも土師器である。P53 の高坏は，北東壁際の床面と中央部の覆土中から出土した破片が接合したものである。P54 とP55 の器台は中央部の床面から逆位で，P56 の坩は南東壁際の床面から逆位で，P57 の坩の口縁部片は北東壁寄りの床面から，P58 の坩の体部片は中央部西寄りの床面から，それぞれ出土している。P59 の壺は南東部と南西部の床面から出土した破片が接合した

ものである。P60とP61の甕は，中央部西寄りの床面からいずれも土圧でつぶれた状態で出土している。P60の甕の外面には煤が付着し，火熱を受けた痕跡がある。P62の甕は南コーナー付近の床面から，P63の甕は貯蔵穴の覆土上層と中央部南寄りの覆土下層から，P64の甕は東コーナー付近と中央部の床面から出土した破片が接合したものである。P65の甕の体部片は中央部東寄りの床面から，P66の甕の底部片は中央部西寄りの床面からそれぞれ出土している。P67の手捏土器は，中央部の覆土下層から破片の状態で出土している。須恵器片は，撹乱により混入したものと考えられる。

所見　本跡からは，柱穴が検出されなかった。時期は，出土土器から4世紀中頃と考えられる。



第23図　第10号住居跡実測図



第24図　第10号住居跡出土遺物実測図(1)

第25図　第10号住居跡出土遺物実測図(2)

第10号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
53	高坏 土師器	A［18.2］ B (10.3)	脚部から坏部にかけての破片。脚部はハの字状に開く。坏部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面縦位のヘラ磨き，内面放射状のヘラ磨き。脚部外面ヘラナデ，内面ナデ。内・外面赤彩。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	第24図 PL13 30%
54	器台 土師器	A　8.0 B　7.4 D　11.1	脚部一部欠損。脚部はラッパ状に開く。脚部中位に円形の透かし孔4か所が空く。器受部は垂直に開き，口縁部はほぼ直立する。器受部中央は穿孔されている。	口縁部内・外面横ナデ。器受部内・外面ナデ。脚部外面縦位のヘラ磨き，内面横位のヘラ目調整後，ナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	PL13 95%
55	器台 土師器	B (6.8) D　11.9	器受部欠損。脚部はラッパ状に開く。脚部中位に円形の透かし孔3か所が空く。器受部中央は穿孔されている。	脚部外面縦位のヘラ磨き，内面横位のヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子，明黄褐色 普通，内・外面黒斑有	PL13 50%
56	壺 土師器	A［11.5］ B　12.6 C　4.0	口縁部一部欠損。平底。体部は下膨れ状を呈し，最大径を下位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外反して立ち上がる。	口縁端部内・外面横ナデ。口縁部内・外面縦位のヘラ磨き。体部外面中位以上縦位のヘラ磨き，下位横位のヘラ削り，内面ナデ。底部木葉痕。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	PL14 80%
57	壺 土師器	A［11.4］ B (5.5)	口縁部の破片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁端部内・外面横ナデ。口縁部外面縦位のヘラ磨き，内面横位のハケ目調整後，ナデ。口縁部内・外面赤彩。	長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	10%
58	壺 土師器	B (6.1) C［3.0］	体部の破片。平底。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。	体部外面横位のヘラ削り後，ナデ，内面指頭による押さえ痕を残すナデ。	石英・雲母・赤色粒子，にぶい赤褐色，普通	25%
59	壺 土師器	A［9.6］ B　17.9 C　3.7	口縁部・体部一部欠損。底部はやや突出する平底。体部は扁平な球形を呈し，最大径を下位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。下端縦位のヘラ削り後，ナデ，内面横位のヘラナデ。	赤色粒子 にぶい黄橙色 普通	PL14 60%
60	甕 土師器	A　15.8 B　24.7 C［6.6］	底部・体部・口縁部一部欠損。平底。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，内面指頭痕を残すヘラナデ。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	PL14 60% 外面炭化物付着
61	甕 土師器	A［18.8］ B (16.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外反する。	口縁部内・外面ハケ目調整後，横ナデ。体部外面ハケ目調整後，横位のヘラ削り，内面指頭痕を残す横位のヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	PL14 30% 外面炭化物付着
62	小形甕 土師器	A　10.8 B　12.8 C　4.0	口縁部・体部一部欠損。底部は突出する平底。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ削り，内面横位のヘラナデ。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	PL14 75%

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
63	甕 土師器	A 15.2 B (14.1)	底部欠損。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部は緩やかに屈曲し，口縁部は若干内傾しながら外上方に開く。	口縁部内・外面横位のハケ目調整。体部外面縦位のハケ目調整，内面横位のヘラナデ。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	第24図 PL14 70%
64	甕 土師器	A [14.4] B (8.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾しながら立ち上がる。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ハケ目調整後ナデ，内面横位のヘラナデ。	長石・雲母 灰黄褐色 普通	第25図 PL14 25%
65	甕 土師器	B (11.2)	体部の破片。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつと推定される。	体部外面縦位のハケ目調整，内面横位のヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子，にぶい黄橙色，普通	20% 外面炭化物付着
66	甕 土師器	B (4.6) C [6.2]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内傾しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ，下端横位のヘラ削り，内面横位のハケ目調整。	石英・長石 にぶい橙色 普通	5%
67	手捏土器 土師器	A [4.9] B 5.8	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内傾して立ち上がり，口縁部は若干内傾する。	口縁部，体部内・外面指ナデ。	石英・長石 橙色 普通	PL13 55%

第12号住居跡（第26図）

位置　調査区域の北部，A 8 f 5 区。

重複関係　東部を第13号住居に掘り込まれている。

規模と平面形　東部が掘り込まれているため，全容は不明である。南北軸は4.32m で，確認できた東西軸は3.37m である。南西コーナーと北西コーナーが直角であることから，方形または長方形と推測される。

主軸方向　N－7°－W

壁　壁高は18～25cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　南西コーナー付近を除いて，壁際を巡っている。上幅12～16cm，下幅７～９cm，深さ５～６cmで，断面はU字形である。

床　ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

ピット　１か所。南壁際の，西壁から2.55m の位置に設けられている。径32cmの円形，深さは42cmで，位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

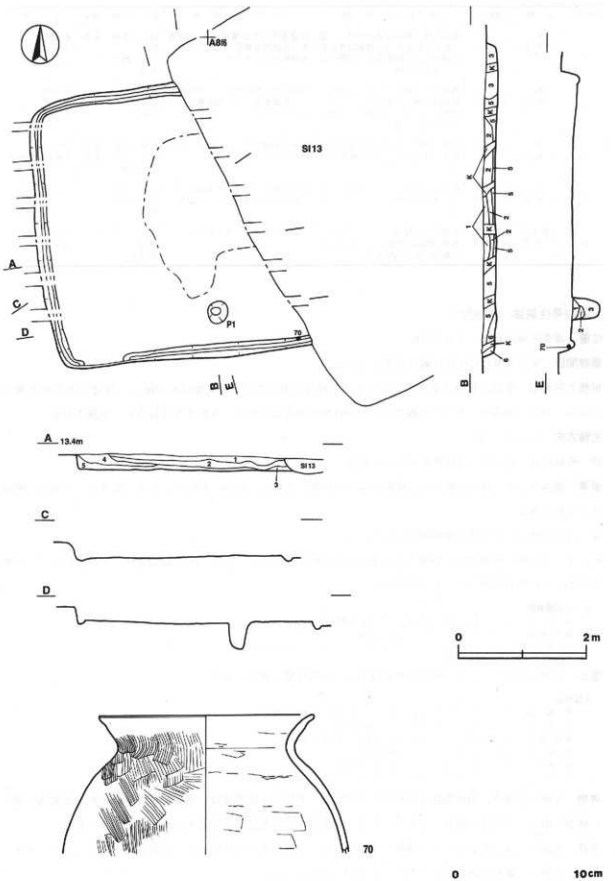
ピット土層解説
1　黒　褐　色　　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　極暗褐色　　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

覆土　６層からなる。レンズ状の堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　黒　褐　色　　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
3　極暗褐色　　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　黒　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6　暗　褐　色　　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量

遺物　土師器片38点，須恵器片１点が出土している。P70の土師器甕は，南壁際東寄りの床面と南東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。須恵器片は，撹乱により混入したものと考えられる。

所見　本跡からは，炉や主柱穴が検出されなかった。炉は，第13号住居によって掘り込まれた可能性も考えられる。時期は，重複関係や出土土器から４世紀と考えられる。



第26図　第12号住居跡・出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
70	甕 土師器	A [16.9] B (10.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がる。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整，内面輪積み痕を残す横位のヘラナデ。	砂粒・長石・石英にぶい黄橙色 普通	第26図 PL14 20%

第13号住居跡（第27・28図）

位置　調査区域の北部，A８f６区。

重複関係　南西部で第12号住居跡を掘り込み，北部を第３号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸6.60m，短軸6.28mの方形である。

主軸方向　N－28°－W

壁　壁高は９～16cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝　北コーナーと南コーナー付近を除いて，壁際を巡っている。上幅10～12cm，下幅４～７cm，深さ４～６cmで，断面はU字形である。

床　ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

炉　中央部北西寄りのP１とP４を結ぶライン上に設けられている。長径89cm，短径54cmの，長径方向を住居跡の主軸方向と同じくする不整楕円形の地床炉である。炉床面は床面から13cmほど掘りくぼめられて皿状を呈し，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
2　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
3　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量

ピット　５か所（P１～P５）。P１～P３は，径31～48cmの円形で，深さ39～46cmである。P４は，長径57cm，短径45cmの楕円形で，深さ39cmである。いずれも各コーナー寄りに位置し，規模と位置から主柱穴と考えられる。P５は，径28cmの円形，深さ11cmで，南東壁中央部の壁際に位置し，規模と位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

貯蔵穴　南コーナー部に設けられている。長径78cm，短径33cmの，長径方向を住居跡の軸と同じくする隅丸長方形である。深さは43cmで，断面は逆台形である。

貯蔵穴土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・白色粘土粒子少量
2　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

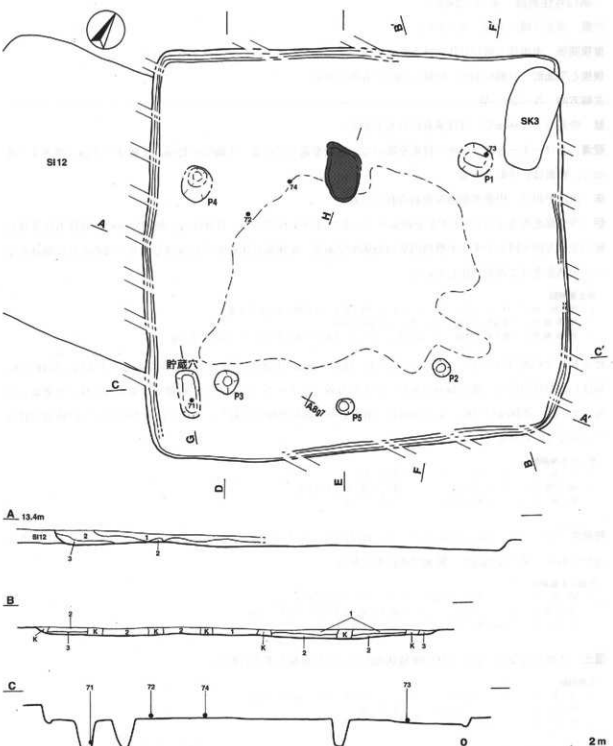
覆土　３層からなる。レンズ状の堆積状況から，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

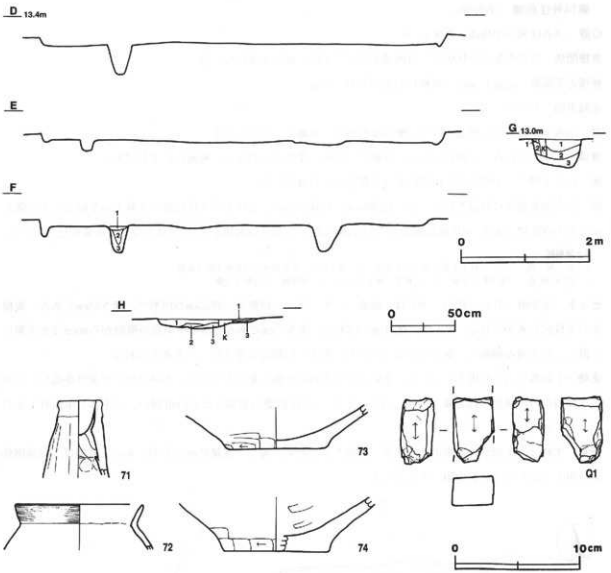
遺物　土師器片230点，石器１点（砥石）が全体から出土している。また，撹乱により混入したと考えられる須恵器片４点が出土している。図示した土器はいずれも土師器である。P71の高坏の脚部片は，貯蔵穴内の

覆土下層から出土している。P72の甕の口縁部片は中央部西寄りの覆土下層から，P73の甕の底部片は北コーナー寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。P74の甕の底部片は炉の西側の床面から出土している。Q1の砥石は，東部の覆土中から出土している。

所見　本跡は，1辺が6m以上の，当遺跡においては大形の住居跡である。時期は，出土土器から，5世紀前半と考えられる。



第27図　第13号住居跡実測図



第28図　第13号住居跡・出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
71	高坏 土師器	B（6.0）	脚部の破片。脚部は中空で、わずかにハの字状に開く。脚部と坏部の接合部はソケット状を呈する。	脚部外面縦位のヘラナデ、内面指圧痕を残すナデ。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色、普通	第28図 20%
72	小形甕 土師器	A［10.0］ B（3.6）	頸部から口縁部にかけての破片。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・赤色粒子 橙色、普通	10%
73	甕 土師器	B（3.3） C　7.9	底部から体部にかけての破片。底部はわずかに突出する平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面横位のヘラナデ、下端横位のヘラ削り、内面横位のヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 橙色、普通	5%
74	甕 土師器	B（4.3） C［8.2］	底部から体部にかけての破片。底部は突出する平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面横位のヘラナデ、下端横位のヘラ削り、内面横位のヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 浅黄橙色、普通	5%

遺物番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	特徴	備考
Q1	砥石	（5.2）	3.2	2.2	(64.8)	頁岩	直方体、側面4面を砥面とする。	第28図　PL19

第14号住居跡（第29図）

位置　調査区域の中央部，Ｂ８ａ７区。

重複関係　西部を第６号住居に，南西部を第１号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.58m，短軸4.33mの方形である。

主軸方向　Ｎ－８°－Ｗ

壁　南西コーナー部で確認できた。壁高は12cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　全周している。上幅14～28cm，下幅７～17cm，深さ６～12cmで，断面はＵ字形である。

床　ほぼ平坦で，中央部から西部にかけて踏み固められている。

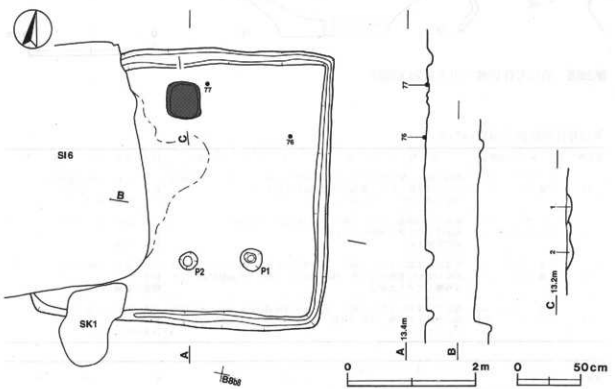
炉　中央部北寄りに付設されている。長径68cm，短径54cmの，長径方向を住居跡の主軸方向と同じくする隅丸長方形の地床炉である。炉床面は床面から約５cmの深さで，若干の起伏があり，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説
1　灰　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・白色粘土粒子少量
2　暗 赤 褐 色　　焼土粒子中量，ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量

ピット　２か所（Ｐ１・Ｐ２）。Ｐ１は，南東コーナー寄りに位置し，径35cmの円形で，深さ52cmである。規模から主柱穴と考えられる。Ｐ２は，径31cmの円形で，深さ15cmである。南壁中央部の壁際から80cmほど内側に位置し，炉を通る軸線上に並んでいることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物　土師器片34点が出土している。遺物は炉の周辺の床面に集中しており，本跡に伴う可能性が高い。Ｐ76の土師器坩の口縁部片は北東コーナー寄り，Ｐ77の土師器甕の底部片は炉の東側の，いずれも床面直上から出土している。

所見　本跡は，床面がほぼ露出した状態で検出されたため，覆土の堆積状況は不明である。時期は，重複関係及び出土土器から４世紀中頃と考えられる。



第29図　第14号住居跡実測図

第30図　第14号住居跡出土遺物実測図

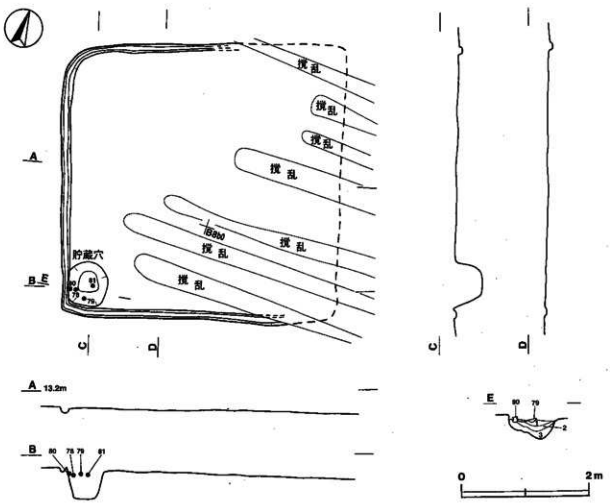
第14号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
76	坩 土師器	A [10.2] B (4.9)	口縁部の破片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁端部内・外面横ナデ。口縁部内・外面縦位のヘラ磨き。	石英・長石 にぶい橙色，普通	第30図 10%
77	甕 土師器	B (2.4) C 5.8	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部下端横位のヘラ削り，内面ヘラナデ。	石英・長石 にぶい橙色，普通	5% 内面炭化物付着

第15号住居跡（第31・32図）

位置　調査区域の中央部，Ｂ８ａ９区。

規模と平面形　本跡は，床面が露出した状態で検出されており，壁の立ち上がりを確認できなかったため，壁溝や床の範囲から規模と平面形を推定した。長軸4.38m，短軸4.26mの方形と推測される。



第31図　第14号住居跡実測図

主軸方向　炉も出入り口施設に関するピットも検出されなかったため，同時期に存在したと考えられる第13号住居の主軸方向から判断し，N－18°－Wの軸線を主軸とした。

壁溝　本跡の北部際中央から西部際，南部際中央にかけて確認された。上幅11～16cm，下幅５～９cm，深さ４～８cmで，断面は逆台形である。

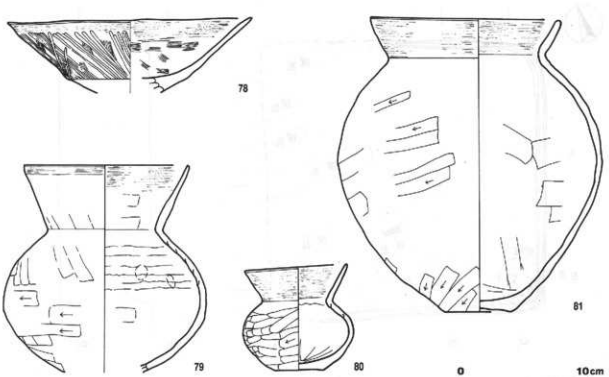
床　ほぼ平坦である。暗褐色を帯びており，特に踏み固められた部分は認められない。硬化面が間平されている可能性も考えられる。

貯蔵穴　南西コーナー部に設けられている。長径69cm，短径53cmの南北に長い楕円形である。深さは44cmで，断面は逆台形である。

貯蔵穴土層解説
1　黒　褐　色　　ローム小ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

遺物　土師器片32点が出土している。P78～81は，いずれも貯蔵穴内から出土しており，住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。P80の坩は，貯蔵穴西壁寄りの覆土上層から，P78の高坏に重なるように出土している。P81の甕は中央部の覆土上層から口縁部を東に向けた横位の状態で，P79の坩はP81の甕の南部に接するように出土している。

所見　本跡からは，炉やピットが検出されなかった。時期は，出土土器から５世紀前半と考えられる。



第32図　第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
78	高　坏 土師器	A　19.2 B（5.8）	脚部欠損。坏部下位に稜をもつ。中位以上は外傾して直線的に立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。坏部外面屈位のハケ目調整後，縦位のヘラ磨き，下端ナデ，内面横位のハケ目調整後，横位のヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	第32図 PL13 50%

遺物番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
79	壺 土師器	A 13.0 B (16.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部はやや扁平な球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾して直線的に立ち上がる。	口縁端部内・外面横ナデ。口縁部内・外面横位のヘラナデ。体部外面上半縦位のヘラナデ，中位以下横位のヘラ削り。体部内面上半輪積み痕を残すナデ，下半ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	第32図 PL14 60% 外面炭化物付着
80	壺 土師器	A 7.9 B 8.3 C 3.6	口縁部一部欠損。平底。体部は算盤玉状を呈する。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾して直線的に開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り。体部内面上半ナデ，下半ヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 にぶい褐色 普通	PL14 95%
81	甕 土師器	A 15.0 B 23.2 C 5.3	体部一部欠損。平底。体部はやや縦長の球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り，下端斜位のヘラ削り。内面横位のヘラナデ。	長石・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	PL14 80% 外面炭化物付着

第17号住居跡（第33～35図）

位置　調査区域の北東部，Ａ８ｅ0 区。

規模と平面形　長軸5.85m，短軸3.90mの長方形である。

主軸方向　Ｎ－22°－Ｗ

壁　壁高は23～33cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　竈部分を除き，壁際を巡っている。上幅10～12cm，下幅５～８cm，深さ５cmで，断面はＵ字形である。

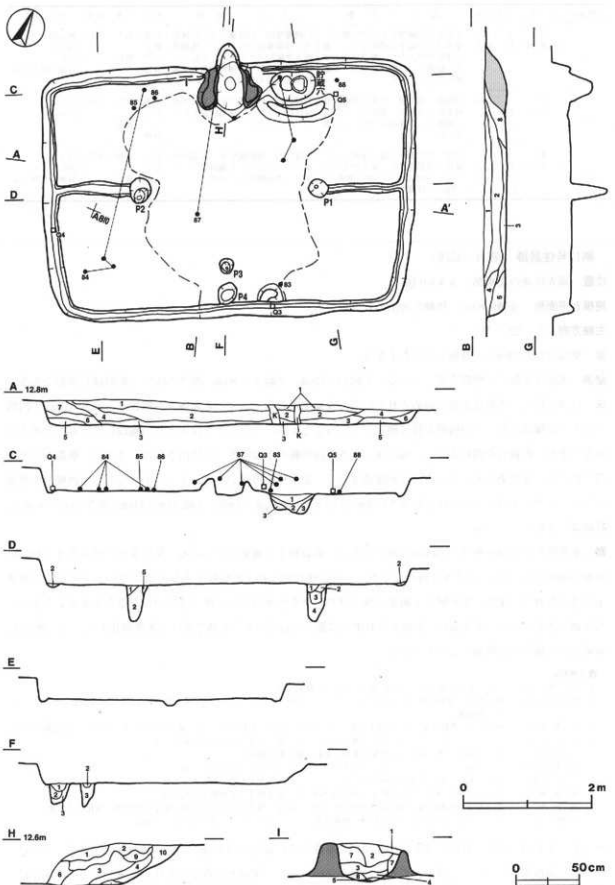
床　ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。南東壁際のピット４の北東側から幅40cm，高さ６cmの半円状の高まりが確認され，この周囲が特に硬化していることから，この高まりは出入り口施設に伴うものと考えられる。また，貯蔵穴を囲むように，幅30cm，高さ５cmの緩やかな高まりが検出された。さらに，壁際から中央部にかけて，溝２条が走っていることが確認された。北東壁中央部からピット１にかけてと，南西壁の中央部からピット２にかけてで，それぞれ長さ110cmと112cm，上幅11cmと19cm，下幅４cmと11cm，深さ５cmと８cmで，断面はＵ字形をしている。

竈　北西壁の中央部を壁外へ30cmほど掘り込んで，砂質粘土で構築されている。焚口部から煙道部まで105cm，両袖部幅102cmである。天井部は崩落しており，第３層が粘土粒子や砂粒を多量に含んでいることから，崩落土と考えられる。また，第８層の下面から焼土ブロックや灰が出土し，硬くざらついた感じがあることから，火床面と考えられる。火床面は，床面からわずかに掘りくぼめられ，火熱を受けて赤変硬化している。煙道は，火床部から緩やかに外傾して立ち上がる。

竈土層解説

1	黒　褐　色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂粒少量
2	暗 赤 褐 色	粘土粒子・砂粒中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，焼土中ブロック・炭化物微量
3	暗 赤 褐 色	粘土粒子・砂粒多量，ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4	暗 赤 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
5	暗 赤 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，砂粒・粘土粒子微量
6	暗 赤 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
7	にぶい赤褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
8	暗 赤 褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・灰少量
9	暗 赤 褐 色	粘土粒子・砂粒中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
10	極暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量，ローム小ブロック・焼土小ブロック微量

ピット　４か所（Ｐ１～Ｐ４）。Ｐ１は中央部の北東寄りに位置し，径30cmの円形，深さ59cmである。Ｐ２は，中央部の南西寄りに位置し，径34cmの円形，深さ56cmである。規模と位置から主柱穴と考えられる。Ｐ３は，径20cmの円形，深さ39cm，Ｐ４は，径31cmの円形，深さ33cmである。いずれも南東壁中央部の壁際に位置し，竈に対して一直線上に並ぶことから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第33図　第17号住居跡実測図

ピット土層解説
1 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム中ブロック微量
3 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
4 褐 色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
5 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

貯蔵穴 竈の北東袖脇に設けられている。長径68cm，短径47cmの東西に長い楕円形，深さ34cmで，断面は逆台形である。

貯蔵穴土層解説
1 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，炭化物微量
2 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，焼土中ブロック微量
3 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

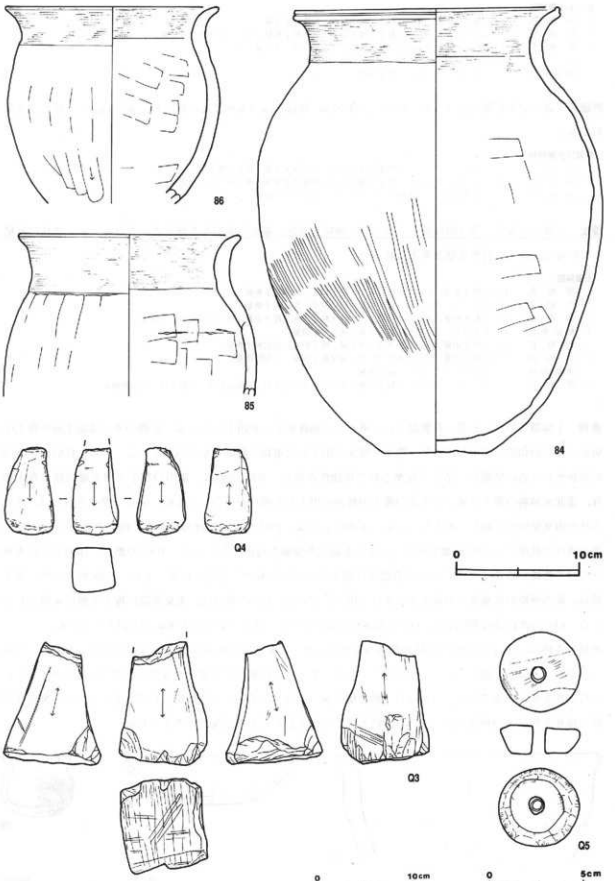
覆土 8層からなる。第8層は焼土ブロックや砂粒を含み，竈から流出した層と考えられる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1 黒 褐 色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム中ブロック微量
4 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
5 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量，炭化物微量
7 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
8 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量，炭化物微量

遺物 土師器片75点，石器・石製品3点（砥石2，紡錘車1）が出土している。遺物の多くは竈手前の覆土中層から細片の状態で出土しており，覆土下層から出土した遺物と時期差がみられないことから，住居廃絶と同時期かそれと近い時期に一括して投棄された可能性が高い。P87の甑は，竈内の覆土上層と竈南側の覆土中層，竈北東袖脇の覆土上層，中央部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。覆土下層では，P83の坏が南東壁際から横位で出土している。床面直上では，P84の甕が口縁部を北東に向けた横位で，P85の甕が破片の状態で，P86の甕が逆位でいずれも竈南西袖脇から出土している。P84の甕は，体部下半に火熱を受けた痕跡があることから，竈で煮炊きに使用されていたものと考えられる。また，P88のミニチュア土器は，北西壁際の北東寄りの床面から正位で出土している。Q3の砥石は，南東壁際の覆土中層から出土している。Q4の砥石は南西壁際の，Q5の紡錘車は北東コーナー寄りのいずれも床面から出土している。

所見 本跡は，長辺が短辺の1.5倍の横長の住居跡であり，拡張した痕跡が検出されなかったことから，当初から横長を意識して構築されたものと考えられる。また，南西壁の中央部と北東壁の中央部を結ぶライン上に主柱穴2か所が並ぶことや，いわゆる「間仕切り溝」が同じライン上から検出されていることなど，他の住居跡と様相を異にする特徴を持っている。時期は，出土土器から7世紀後半と考えられる。

第34図 第17号住居跡出土遺物実測図(1)



第35図　第17号住居跡出土遺物実測図(2)

第17号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
83	坏 土師器	A [12.8] B 3.9	底部・口縁部一部欠損。丸底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面及び底部ヘラ削り，内面ナデ。	石英・長石・雲母にぶい褐色 普通	第34図 PL14 60%
84	甕 土師器	A 20.9 B 35.2 C 8.4	体部一部欠損。平底。体部は倒卵形を呈し，頸部はゆるやかにくびれ，口縁部は外反する。口縁部外面に沈線1条が巡る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上位ナデ，中位横位のヘラ磨き。内面横位のヘラナデ。体部外面下位及び底面は，器面が荒れているために調整不明。	砂粒・石英・長石・雲母にぶい褐色 普通	第35図 PL15 90%
85	甕 土師器	A 17.3 B (12.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部はゆるやかにくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラナデ，内面横位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母にぶい黄橙色 普通	PL15 50%
86	甕 土師器	A 16.6 B (15.5)	底部・体部・口縁部一部欠損。体部は倒卵形を呈し，頸部はゆるやかにくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上半ヘラナデ，下半縦位のヘラ削り。内面横位のヘラナデ。	石英・長石・雲母にぶい橙色 普通	PL15 60%
87	鉢 土師器	A [21.0] B (8.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラナデ。内面輪積み痕を残す横位のヘラナデ。	石英・長石・雲母・赤色粒子にぶい橙色　普通	第34図 5%
88	ミニチュア土器 土師器	A 5.3 B 4.8	完形。丸底。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はゆるやかにくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ磨き，内面ナデ。	砂粒・雲母にぶい赤褐色 普通	PL15 100%

遺物番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q3	砥石	(12.9)	9.9	9.2	(1240.0)	粘板岩	砥面4面，中央部が薄くなっている。	第38図，PL19
Q4	砥石	(6.9)	3.6	3.6	(130.2)	凝灰岩	砥面4面，中央部が薄くなっている。	PL19

遺物番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		最大径(cm)	最小径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
Q5	紡錘車	4.4	2.9	1.6	0.9	29.8	泥岩	無文，ていねいに研磨されている。	第38図，PL19

第22号住居跡（第36・37図）

位置　調査区域の北西部，A 8 j 2 区。

規模と平面形　長軸3.75m，短軸3.30mの長方形である。

主軸方向　N－35°－W

壁　壁高は4～12cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦である。特に踏み固められた部分は認められない。

炉　中央部やや北西寄りに付設されている。長径48cm，短径41cmの，長径方向を住居跡の主軸方向と同じくする隅丸長方形の地床炉である。炉床面は，床面から5cmほど掘りくぼめられ，皿状を呈しており，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量
2　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量，焼土中ブロック微量
3　暗赤褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

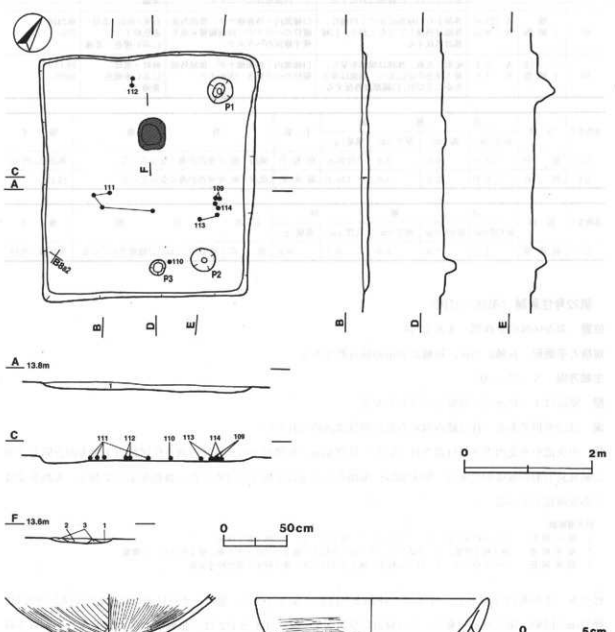
ピット　3か所（P1～P3）。P1は，径29cmの円形，深さ27cmで，北コーナー付近に位置している。P2は，径31cmの円形，深さ21cmで東コーナー付近に位置している。P1とP2は，北東壁と平行に並ぶことから主柱穴と考えられる。P1，P2と対角の位置からは，ピットは検出されなかった。P3は，南東壁中央部の壁際に位置し，径25cmの円形で，深さは18cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　単一層である。自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。

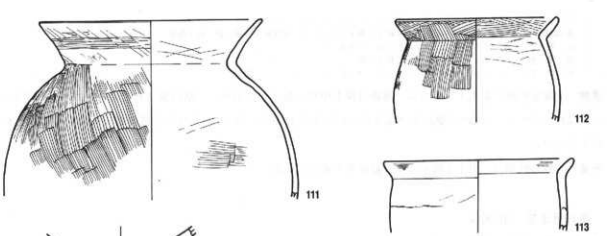
土層解説
1 黒 褐 色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物　土師器片226点が全体的に出土している。遺物に時期差がないことから，住居廃絶と同時期かそれと近い時期に投棄されたものと考えられる。P109の高坏は，中央部北東寄りの床面と東部の覆土中から出土した破片が接合したものである。P110の壺の口縁部片は，南東壁寄りの床面から出土している。P111の甕は，南西壁寄りの床面と中央部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。P112の甕は北西壁際の床面から，P113の甕は中央部東寄りの覆土下層から，P114の甕は中央部北東寄りの床面からいずれも破片の状態で出土している。

所見　時期は，出土土器から4世紀中頃と考えられる。



第36図　第22号住居跡・出土遺物実測図



第37図　第22号住居跡出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
109	高坏 土師器	B（4.3）	坏部の破片。坏部は下端に稜をもち，内彎しながら立ち上がる。	坏部外面縦位のヘラ磨き。内面放射状のヘラ磨き。	石英・長石・雲母にぶい褐色 普通	第36図 PL.15 20%
110	壺 土師器	A［18.3］ B（3.6）	口縁部の破片。口縁部は折り返し口縁で，外傾する。	口縁端部内・外面横ナデ。口縁部外面横位のハケ目調整，内面横ナデ。	長石・雲母・赤色粒子，にぶい黄橙色，普通	5%
111	甕 土師器	A［17.6］ B（14.0）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がる。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面ハケ目調整後，横ナデ，体部外面斜位のハケ目調整，内面横位のハケ目調整後，ナデ。	長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	第37図 PL.15 15%
112	甕 土師器	A　12.5 B（8.1）	体部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎して立ち上がる。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横位のハケ目調整。体部外面縦位のハケ目調整，内面横位のヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 赤褐色 普通	PL.15 30%
113	甕 土師器	A［14.9］ B（5.7）	体部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎して立ち上がる。頸部はゆるやかに屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面輪積み痕を残す横位のヘラナデ，内面ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	10% 外面炭化物付着
114	甕 土師器	B（3.0） C　5.1	底部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ削り，内面横位のヘラナデ。	石英・長石・雲母 明赤褐色，普通	10%

(2)　土　坑

第15号土坑（第38・39図）

位置　調査区域の北西部，A 7 g7 区。

重複関係　南部で第19号土坑を掘り込み，北部を第14号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長径2.41m，短径1.68m の隅丸長方形で，深さ61cmである。

長径方向　N－88°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　凸凹である。

覆土　7層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　極暗褐色　　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量

3 黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
4 暗褐褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
5 暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6 黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
7 暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量

遺物　土師器片88点が出土している。遺物は覆土中層に集中しており，一括投棄された可能性が高い。P129の壺は覆土中から，P130の甕は中央部東寄りの覆土中層から，TP31の壺は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見　本跡の時期は，出土土器から4世紀後半と考えられる。

第19号土坑（第38図）

位置　調査区域の北西部，A 7 h8 区。

重複関係　北部を第15号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　北部が掘り込まれているため，確認できた南北径は0.68mで，東西径は0.78m，深さは17cmである。南東コーナーと南西コーナーが丸みを帯びた直角であることから，隅丸長方形と推測される。

長径方向　N－7°－W

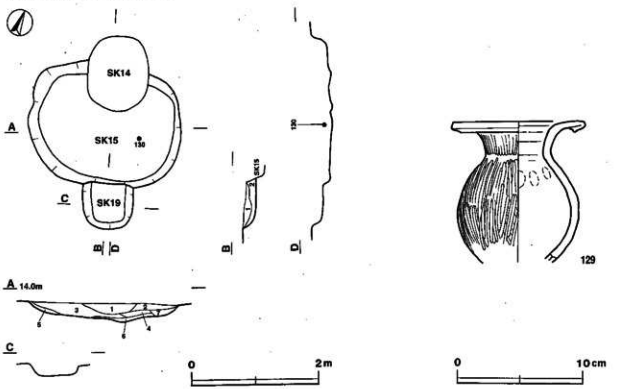
壁面　外傾して立ち上がる。

底面　平坦である。

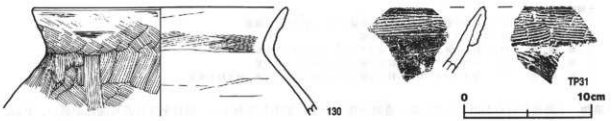
覆土　2層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1 黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

所見　本跡は，遺物が出土していないため，詳細な時期や性格は不明である。重複関係から判断して前期，もしくはそれ以前と考えられる。



第38図　第15・19号土坑・出土遺物実測図



第39図　第15号土坑出土遺物実測図

第15号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
129	壺 土 師 器	A　10.3 B　(11.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はゆるやかにくびれ，口縁部は折り返し口縁で，外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ磨き，内面指頭による押さえ痕を残すナデ。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通，外面黒斑有	第38図 PL15 60%
130	甕 土 師 器	A　[20.2] B　(8.5)	頸部から口縁部にかけての破片。頸部は緩やかに屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目調整，内面横位のヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色，普通	第38図 PL15 10%
TP31	壺 土 師 器	B　(5.3)	口縁部の破片。口縁部は折り返し口縁で，外傾する。	口縁部内・外面横位のハケ目調整。	砂粒・赤色粒子 にぶい橙色，普通	5%

第17号土坑（第40図）

位置　調査区域の北西部，A 7 f 8 区。

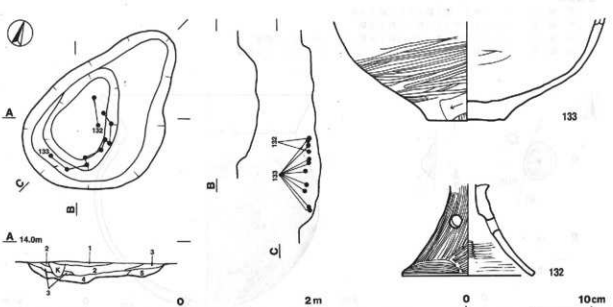
規模と平面形　長径2.93m，短径1.95m の不整楕円形で，深さ33cmである。

長径方向　N－30°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　凸凹である。

覆土　5 層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。



第40図　第17号土坑・出土遺物実測図

土層解説
1 黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック微量
2 黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3 暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
4 暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
5 暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量

遺物　土師器片41点が出土している。遺物は覆土中層に集中しており，一括投棄された可能性が高い。P132の器台は，中央部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。P133の甕は，中央部及び南部の覆土中層から出土した破片10点が接合したものである。

所見　時期は，出土土器から4世紀後半と考えられる。

第17号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
132	器台 土師器	B（7.2） D 10.3	器受部欠損。脚部はハの字状に開き，裾部は外反気味に広がる。脚部中位に円形の透かし孔3か所が空く。器受部中央は穿孔されている。	脚部外面縦位のヘラ磨き，内面横位のハケ目調整後，ナデ。裾部外面横位のヘラ磨き。	石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい橙色 普通	第40図 PL15 50%
133	甕 土師器	B（7.8） C 5.9	底部から体部にかけての破片。底部はわずかに突出する平底。体部は内湾しながら立ち上がる。	体部外面横位のヘラ磨き，下端横位のヘラ削り，内面横位のヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 橙色，普通	PL15 30%

第56号土坑（第41図）

位置　調査区域の南西部，C8c2区。

規模と平面形　長径0.57m，短径0.50mの楕円形で，深さ20cmである。

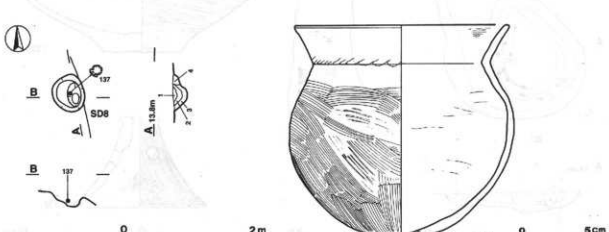
長径方向　N－9°－W

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　凸凹である。

覆土　4層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1 黒 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2 黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3 黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
4 暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量



第41図　第56号土坑・出土遺物実測図

遺物　土師器片７点が出土している。P137の甕は，中央部の覆土下層から口縁部を南西に向けた横位の状態で出土している。

所見　時期は，出土土器から判断して４世紀後半と考えられる。

第56号土坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
137	甕 土師器	A [16.8] B (16.9)	底部・体部・口縁部一部欠損。体部は球形を呈し，最大径を中位にもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面指頭によるナデ。体部外面斜位のハケ目調整，内面横位のヘラナデ。	石英・長石・赤色粒子 にぶい橙色 普通	第41図 PL15 60%

3　奈良時代の遺構と遺物

今回の調査で，奈良時代の竪穴住居跡８軒，粘土採掘坑１基，井戸跡１基，遺物包含層１か所を確認した。以下，確認した遺構と出土した遺物について記載する。

(1)　竪穴住居跡

第４号住居跡（第42・43図）

位置　調査区域の西部，Ｂ７ｄ９区。第23号住居跡から南東へ15.0ｍの距離に位置する。

規模と平面形　長軸4.50ｍ，短軸4.25ｍの方形である。

主軸方向　Ｎ－16°－Ｗ

壁　壁高は２～13㎝で，外傾して立ち上がる。

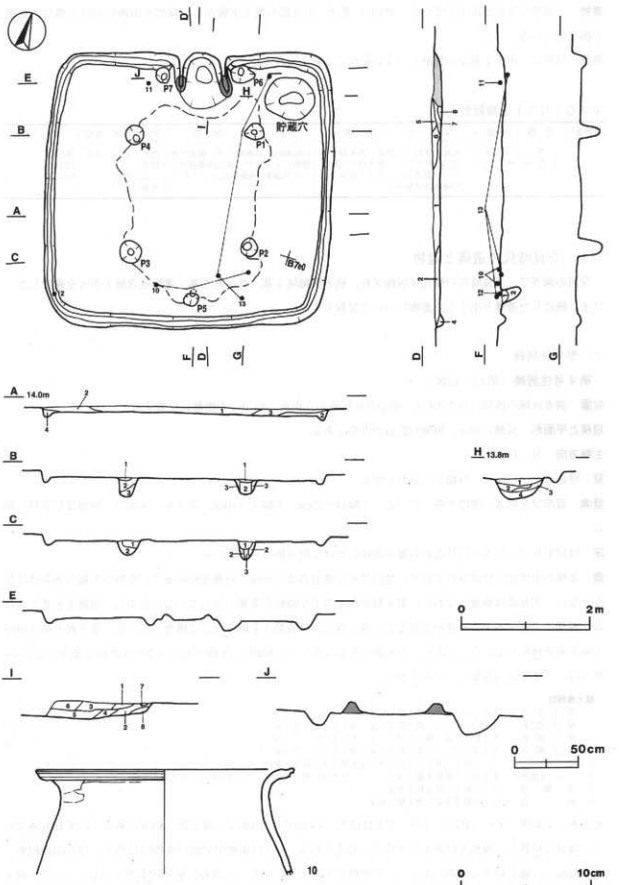
壁溝　竈部分を除き，壁際を巡っている。上幅14～25㎝，下幅４～10㎝，深さ６～９㎝で，断面はＵ字形である。

床　ほぼ平坦で，出入り口付近から竈の前面にかけて踏み固められている。

竈　北壁の中央部に付設されており，焚口部から煙道部まで80㎝，両袖部幅86㎝で，壁外への掘り込みはほとんどない。天井部は崩落しており，第６層が粘土粒子や砂粒を多量に含んでいることから，崩落土と考えられる。袖部は，ローム土を袖部の芯材として掘り残し，砂質粘土を貼り付けて構築している。第２層と第４層の下面が赤変硬化していることから，火床面と考えられる。火床面は，床面と同じ高さの平坦面を使用している。煙道は，火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説
1　暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土粒子中量
2　暗赤褐色　焼土中ブロック・焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
3　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土中ブロック・焼土小ブロック少量
4　暗赤褐色　焼土小ブロック・焼土粒子中量，焼土中ブロック少量
5　暗　褐　色　ローム粒子・焼土中ブロック・炭化物・炭化粒子少量
6　にぶい赤褐色　粘土粒子・砂粒多量，焼土小ブロック中量，焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
7　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
8　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量

ピット　７か所（Ｐ１～Ｐ７）。Ｐ１～Ｐ４は径30～35㎝のほぼ円形で，深さ32～43㎝である。いずれも各コーナー寄りに位置し，規模と位置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は南壁中央部の壁際に位置し，径25㎝の円形，深さ32㎝で，竈と対する位置にあることや南壁から中央部に向かって斜めに掘り込まれていることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ６は長径39㎝，短径28㎝の楕円形，深さ18㎝，Ｐ７は径23㎝の円形，深さ11㎝である。竈の袖を挟むように位置することから，竈施設に伴う柱穴の可能性が考えられる。



第42図　第４号住居跡・出土遺物実測図

ピット土層解説

P 1	1	黒	褐 色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
	2	暗	褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子中量
	3	褐	色	ローム粒子中量
P 2	1	暗	褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
	2	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
	3	暗	褐 色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
P 3	1	黒	褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
	2	暗	褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
P 4	1	黒	褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
	2	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
	3	暗	褐 色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
P 5	1	黒	褐 色	ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
	2	暗	褐 色	ローム小ブロック・ローム粒子少量

貯蔵穴　北東コーナー部の壁際に付設されている。長径78cm，短径67cmの東西に長い楕円形である。深さは35cmで，断面は逆台形である。

貯蔵穴土層解説

1	暗	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2	暗	赤	褐色	ローム粒子・焼土粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量
3	暗	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子少量
4	暗	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量

覆土　8層からなる。レンズ状に堆積しており，自然堆積と考えられる。第7・8層は焼土や炭化物・砂粒を含むことから，竈から流出した土層と考えられる。

土層解説

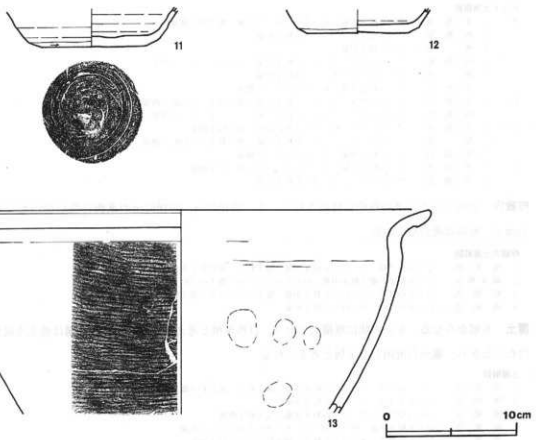
1	黒	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
3	暗	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
4	暗	褐	色	ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
5	黒	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
6	黒	褐	色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
7	暗	赤	褐色	ローム粒子・焼土粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・砂粒少量
8	暗	赤	褐色	焼土粒子中量，ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・砂粒少量

遺物　土師器片64点，須恵器片4点，陶器片1点が出土している。P10の土師器甕は，南壁寄りの覆土下層から出土した破片2点が接合したものである。P11の須恵器坏は，竈西袖脇の床面から破片の状態で出土している。P12の須恵器坏の底部片は，西壁際の覆土下層から出土している。P13の須恵器鉢は，南壁寄りの覆土下層と竈東袖脇の床面から出土した破片が接合したものである。P10～13の遺物は覆土下層や床面からの出土であり，本跡に伴うものと考えられる。陶器片は，撹乱により混入したものと考えられる。

所見　本跡は，住居の主軸方向や規模・内部施設など，8世紀代における当遺跡の典型的な住居形態をとっている。時期は，出土土器から8世紀中頃と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
10	甕 土師器	A [20.4) B (8.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部で強く屈曲し，口縁部は外方へ開く。端部はつまみあげられ，外面に沈線1条を巡らす。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	石英・長石・雲母にぶい黄橙色 普通	第42図 5%
11	坏 須恵器	B (3.0) C 7.9	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	第43図 50%
12	坏 須恵器	B (1.9) C [8.0]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部手持ちヘラ削り後，1方向のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色，普通	20%
13	鉢 須恵器	A [39.0] B (15.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は強く屈曲して，外方へ短く開く。口縁部は軽く面取りされている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面横位の平行叩き，内面ナデ。内面に指頭による押さえ痕を残す。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色 普通	PL16 25%



第43図　第４号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡（第44図）

位置　調査区域の北部，Ａ８ｅ６区。第16号住居跡から北西へ20.0m，第23号住居跡から北東へ42.0mの距離に位置する。

規模と平面形　北部が調査区域外へ延びているため，全容は不明である。東西軸は4.56mで，南北軸は2.75mだけが確認できた。南東及び南西コーナーが直角であることから，方形または長方形と推定される。

主軸方向　調査区域外に竈の存在が推測されることから，Ｎ－15°－Ｗの軸線を主軸とした。

壁　壁高は６～９cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　壁際を全周している。上幅12～15cm，下幅７～10cm，深さ４～７cmで，断面はＵ字形である。

床　ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

ピット　３か所（Ｐ１～Ｐ３）。Ｐ１は南東コーナー付近に位置し，径37cmの円形で，深さ16cmである。Ｐ２は南西コーナー付近に位置し，長径49cm，短径26cmの楕円形で，深さ44cmである。いずれも規模と位置から主柱穴と考えられる。Ｐ３は南壁中央部の壁際に位置し，長径53cm，短径33cmの不整楕円形で，深さは10cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

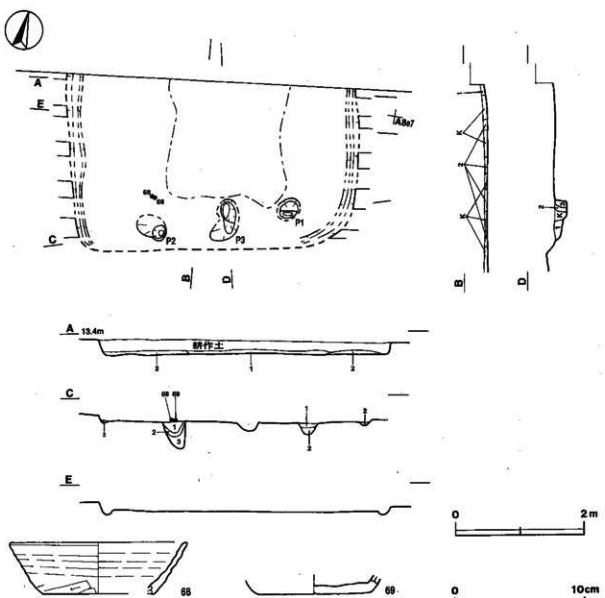
ピット土層解説
1　黒　褐　色　　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

覆土　２層からなる。レンズ状に堆積しており，自然堆積と考えられる。第１層は粘土粒子や砂粒を含むことから，竈から流出した土層と考えられる。

土層解説
1　暗赤褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
2　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量

遺物　土師器片43点，須恵器片6点が出土している。P68の須恵器坏は正位の状態で，P69の須恵器坏は破片の状態で，いずれも南西コーナー寄りの床面から出土している。

所見　竈は今回の調査では検出されなかったが，覆土に粘土粒子や砂粒が含まれることから，調査区域外に存在しているものと推測される。本跡の時期は，出土土器から8世紀後半と考えられる。



第44図　第11号住居跡・出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
68	坏 須恵器	A 13.8 B 4.0 C 8.8	底部欠損。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	第44図 PL16 60%

遺物番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
69	坏 須恵器	B〔1.4) C〔8.8〕	底部の破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色，普通	第44図 5%

第16号住居跡（第45・46図）

位置　調査区域の中央部，A８ｉ０区。第11号住居跡から南東へ20.0m，第19号住居跡から西へ10.0mの距離に位置する。

規模と平面形　長軸4.08m，短軸3.83mの方形である。

主軸方向　N－17°－W

壁　壁高は５～17cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　竈部分を除き，壁際を巡っている。上幅11～20cm，下幅６～15cm，深さ５～７cmで，断面は逆台形である。

床　全体的に平坦である。床面全体が硬く締まった貼床で，ローム土を用い，12～19cmの厚さで貼られている。掘り方は，中央部を不整楕円形状に深く掘り込んでいる。

貼床土層解説
1　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
3　褐　　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム大ブロック少量
4　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されている。規模は，焚口部から煙道部まで75cm，両袖部幅100cmであり，壁外への掘り込みはほとんどない。天井部は崩落しており，第２層と第９層が粘土粒子や砂粒を多量に含むことから崩落土と考えられる。両袖部の内側は，火熱を受けて赤変硬化している。土層断面中，第12～15層が袖部の土層である。また，第５層と第６層の下面が赤変硬化していることから，火床面と考えられる。火床面は，床面と同じ高さの平坦面を使用している。煙道は，火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説
1　極暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
2　灰　褐　色　粘土粒子・砂粒多量，焼土粒子中量，ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
3　灰　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
4　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック・炭化粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量，焼土中ブロック微量
5　にぶい赤褐色　炭化粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
6　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子少量
7　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
8　暗赤褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量，粘土粒子微量
9　灰　褐　色　粘土粒子・砂粒多量，ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
10　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
11　にぶい赤褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
12　灰　褐　色　粘土粒子・砂粒多量，焼土粒子微量
13　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量
14　灰　褐　色　粘土粒子・砂粒多量，ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
15　灰　褐　色　粘土粒子・砂粒中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット　５か所（Ｐ１～Ｐ５）。Ｐ１は長径39cm，短径28cmの楕円形，深さ40cmである。Ｐ２～Ｐ４は径34～36cmの円形，深さ50～56cmである。いずれも各コーナー寄りに位置し，規模と位置から主柱穴と考えられる。Ｐ５は南壁中央部の壁際に位置し，長径43cm，短径30cmの楕円形，深さ28cmで，竈と対する位置にあることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説
Ｐ１　1　黒　褐　色　ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量
　　2　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子少量
Ｐ２　1　黒　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
　　2　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量
Ｐ３　1　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
　　2　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

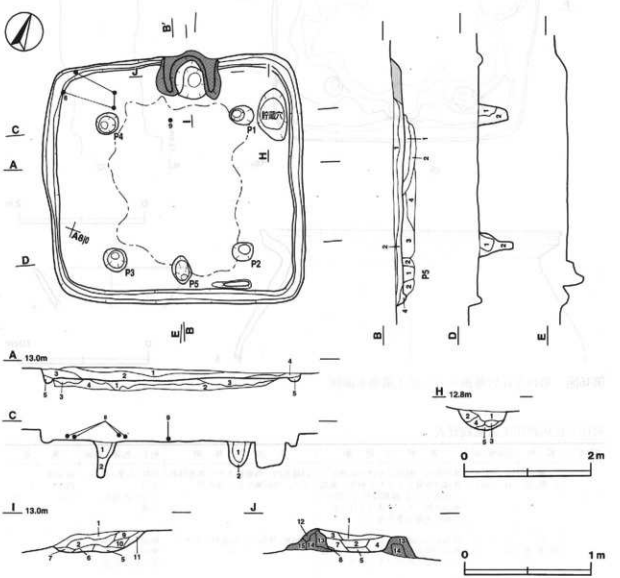
P4　1　黒　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量
　　2　暗 暗 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
P5　1　暗 暗 褐 色　ローム粒子少量
　　2　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，ローム大ブロック微量

貯蔵穴　北東コーナー部に設けられている。長径81cm，短径47cmの，南北に長い楕円形である。深さは30cmで，断面は逆台形である。

貯蔵穴土層解説
1　暗 赤 褐 色　焼土小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム大ブロック・炭化物微量
2　暗 赤 褐 色　ローム小ブロック中量，ローム大ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，焼土中ブロック微量
3　暗 赤 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
4　にぶい赤褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

覆土　5層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

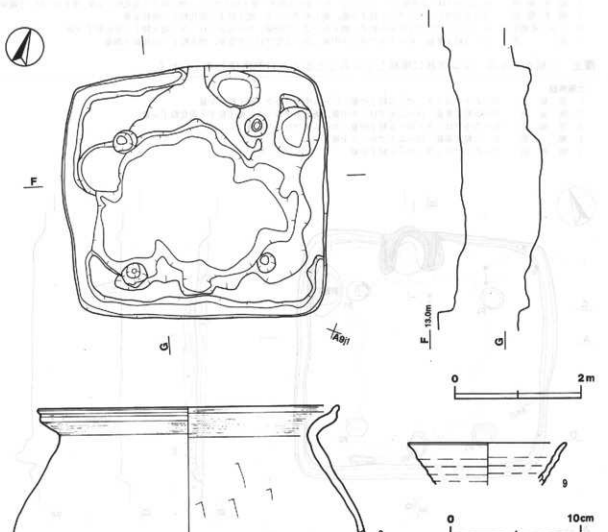
土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・焼土粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
4　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
5　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量



第45図　第16号住居跡実測図

遺物　土師器片65点，須恵器片２点が出土している。図示した土器は，床面直上及び覆土下層から出土したものであり，本跡に伴うものと考えられる。P８の土師器甕は，北壁際西寄りの覆土下層と北西コーナー部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。外面には煤が付着し，火熱を受けた痕跡がある。P９の須恵器坏の口縁部片は，竈手前の床面から出土している。

所見　時期は，第４・11号住居跡と住居の形態が近似し，主軸方向がほぼ一致することや，出土した坏の形状から，８世紀後半と考えられる。



第46図　第16号住居跡掘り方・出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
8	甕 土師器	A [23.6] B (10.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部で屈曲して，口縁部は外方へ開く。端部は外上方へつまみ上げられ，外面に沈線１条を巡らす。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ，内面横位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	第46図 PL16 5%
9	坏 須恵器	A [12.4] B (3.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。端部は丸くおさめている。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	5%

第19号住居跡（第47・48図）

位置　調査区域の北東部，Ａ９h3 区。第16号住居跡から東へ10.0m，第20Ａ・Ｂ号住居跡から北へ4.0m の距離に位置する。

重複関係　南部で第24号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形　長軸4.25m，短軸3.55mの長方形である。

主軸方向　Ｎ－16°－Ｗ

壁　壁高は25～36cmで，ほぼ直立する。

壁溝　竈部分を除き，壁際を巡っている。上幅12～15cm，下幅８cm，深さ４～６cmで，断面はＵ字形である。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。中央部は地山をそのまま床面としており，周縁部はローム土と黒色土を用いて，10～13cmの厚さで貼床されている。

貼床土層解説
1　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，ローム大ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量

竈　北壁中央部を壁外へ25cmほど掘り込んで，砂質粘土で構築されている。焚口部から煙道部まで86cm，両袖部幅114cmである。天井部は崩落しており，第１・３層が粘土粒子や砂粒を多量に含んでいることから，崩落土と考えられる。西袖の内側は，火熱を受けて赤変硬化している。土層断面図中，第７～11層が袖部の土層である。火床部と考えられる位置から赤変硬化した面は検出されていない。煙道は，火床部から緩やかに外傾して立ち上がる。

竈土層解説
1　暗 赤 褐 色　粘土粒子・砂粒多量，ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量
2　褐　　色　ローム粒子・砂粒多量，ローム小ブロック中量，焼土小ブロック少量
3　暗 赤 褐 色　粘土粒子・砂粒多量，ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物少量
4　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
5　明 赤 褐 色　砂粒中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック少量
6　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量
7　灰 黄 褐 色　粘土粒子・砂粒多量，ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　暗　褐　色　粘土粒子・砂粒多量，ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
9　灰　褐　色　粘土粒子・砂粒中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
10　暗 赤 褐 色　焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子少量
11　暗 赤 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット　１か所。南壁中央部の壁際に位置し，長径50cm，短径36cmの楕円形，深さ48cmである。竈と対する位置にあることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

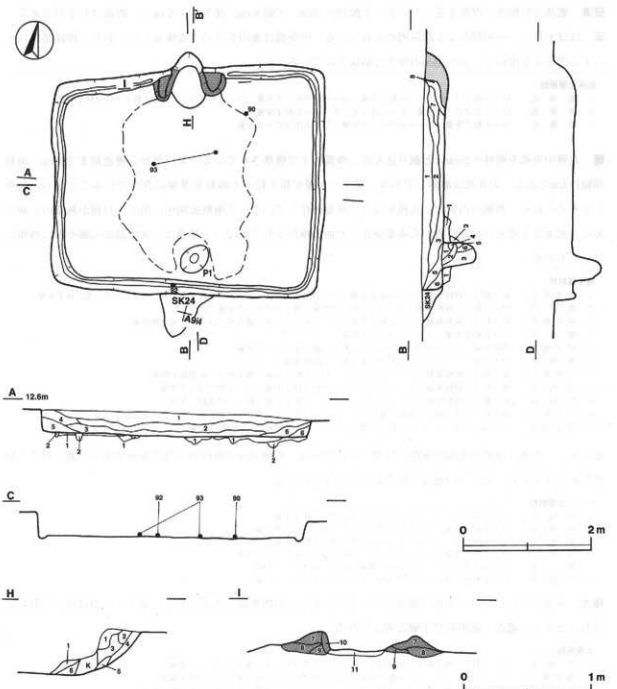
ピット土層解説
1　黒　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
3　暗　褐　色　ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子多量
4　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
5　褐　　色　ローム大ブロック・ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
6　黒　褐　色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量

覆土　８層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。第７・８層は焼土や砂粒を含むことから，竈から流出した土層と考えられる。

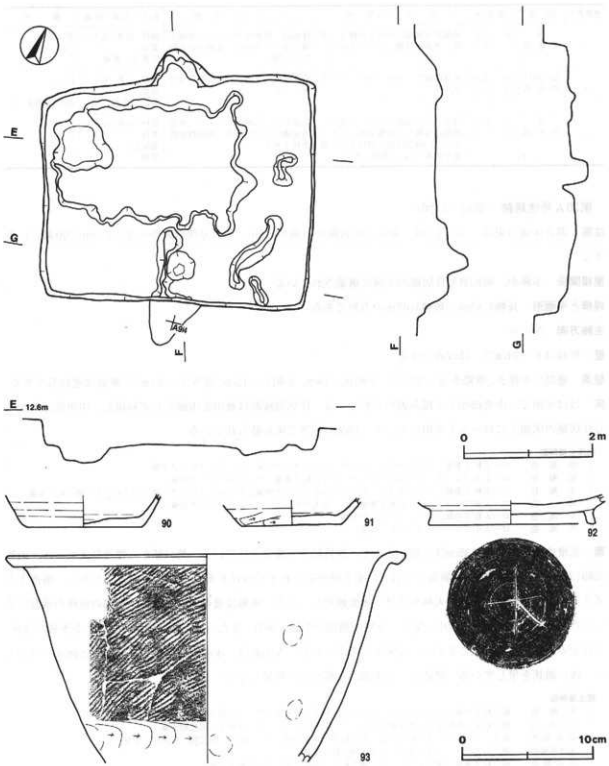
土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック・焼土小ブロック微量
2　極 暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
5　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
6　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
7　極暗赤褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量，焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量
8　極暗赤褐色　砂粒中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム中ブロック微量

遺物　土師器片52点，須恵器片８点が出土している。P90の須恵器坏の底部片は，竈東袖脇の床面から出土している。P91の須恵器坏の底部片は，北西部の覆土中からそれぞれ出土している。P92の須恵器高台付坏の底部片は，南壁際の床面から斜位の状態で出土している。P93の須恵器鉢は，中央部の床面から出土した破片２点が接合したものである。

所見　本跡からは，主柱穴が検出されなかった。同時期の他の住居跡が，規則的に主柱穴４か所を配置することと様相を異にしている。時期は，出土土器から８世紀後半と考えられる。



第47図　第19号住居跡実測図



第48図　第19号住居跡掘り方・出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
90	坏 須恵器	B〔2.7〕 C〔9.0〕	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り後、ナデ。底部2方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰白色、普通	第48図 25%

遺物番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
91	坏 須恵器	B（2.0） C　7.8	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部不定方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色，普通	第48図 25%
92	高台付坏 須恵器	B（2.3） D　13.0 E　1.2	底部の破片。平底。高台はハの字状に開く。	底部回転ヘラ削り。高台貼り付け後，ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰色，普通	PL16 50% 底部外面墨書「大」
93	鉢 須恵器	A［31.4］ B（16.2）	体部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して内彎気味に立ち上がり，口縁部は強く外反する。端部を面取りして，角張らせている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面横位の平行叩き，内面指頭痕を残すナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色 普通	PL16 25%

第20A号住居跡（第49～51図）

位置　調査区域の東部，A 9 j 3 区。第19号住居跡から南へ4.0m，第21号住居跡から北へ7.0m の距離に位置する。

重複関係　本跡が，第20B号住居跡の上部に構築されている。

規模と平面形　長軸4.85m，短軸4.62mの方形である。

主軸方向　N－0°

壁　壁高は8～24cmで，ほぼ直立する。

壁溝　竈部分を除き，壁際を巡っている。上幅16～19cm，下幅8～12cm，深さ4～6cmで，断面は逆台形である。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。住居周縁部は地山を床面として利用し，中央部は第20B号住居跡の床面上にローム土を用いて，8～18cmの厚さで床が貼られている。

貼床土層解説

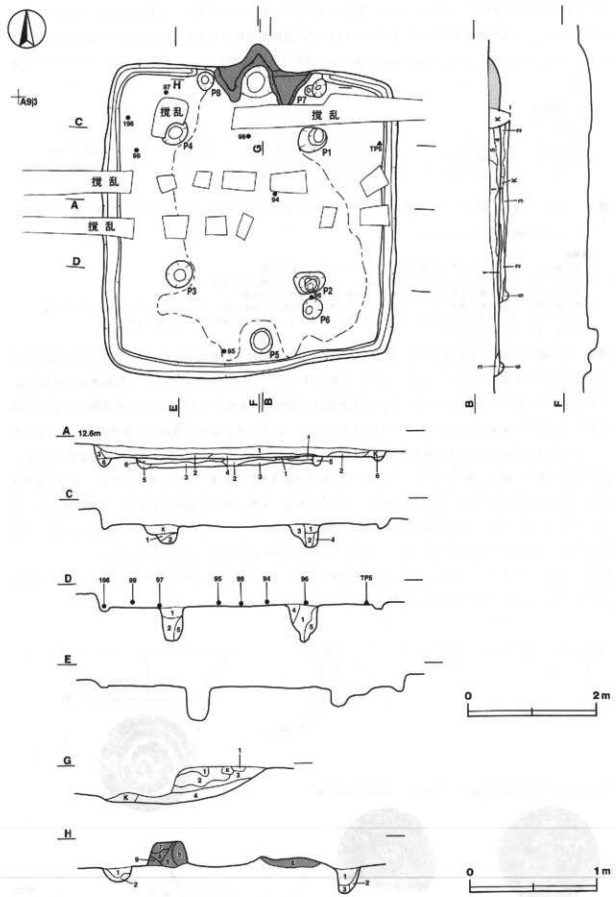
1	暗褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム大ブロック少量
2	暗褐色	ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
3	黒褐色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子少量
4	褐色	ローム中ブロック・ローム粒子多量，ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
5	黒褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
6	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量

竈　北壁中央部を壁外へ35cmほど掘り込んで，砂質粘土で構築されている。焚口部から煙道部まで98cm，両袖部幅134cmである。天井部は崩落しており，第2層が粘土粒子や砂粒を多量に含んでいることから，崩落土と考えられる。西袖の内側は，火熱を受けて赤変硬化している。東袖は遺存状態が悪く，袖部の痕跡が残存しているだけである。土層断面図中，第5～9層が袖部の土層である。また，第4層は焼土ブロックを多量に含み，下面が赤変硬化していることから，火床面と考えられる。火床面は，床面からわずかに3cmほど掘りくぼめられ，浅い皿状を呈している。煙道は，火床部から緩やかに外傾して立ち上がる。

竈土層解説

1	黒褐色	粘土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・粘土粒子・砂粒少量
2	灰褐色	粘土粒子・砂粒多量，焼土粒子中量，ローム中ブロック・ローム粒子・炭化物少量
3	暗赤褐色	焼土小ブロック・焼土粒子多量，粘土粒子・砂粒中量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量
4	極暗赤褐色	焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子多量
5	暗赤褐色	粘土粒子多量，焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒中量，ローム粒子少量
6	灰黄褐色	粘土粒子多量，砂粒中量，炭化粒子少量
7	灰黄褐色	粘土粒子多量，砂粒中量
8	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
9	灰褐色	粘土粒子・砂粒中量，ローム粒子少量

ピット　8か所（P1～P8）。P1は長径43cm，短径34cmの楕円形，深さ38cm，P2は長径47cm，短径31cmの楕円形，深さ57cmである。P3は径40cmの円形，深さ55cm，P4は径38cmの円形，深さ27cmである。いずれも各コーナー寄りに位置することから，主柱穴と考えられる。P5は南壁中央部の壁際に位置し，長径40cm，短径32cmの楕円形，深さ17cmである。竈に対する位置にあることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第49図　第20A号住居跡実測図

P6はP2の南側に隣接し，径30cmの円形，深さ62cmである。P2・6の上面からは硬化した面が確認されず，同時に存在していた可能性が高いことから，P6はP2の補助的な柱穴と考えられる。P7・8は径30cmほどの円形で，深さはそれぞれ13cm，22cmである。竈の袖を挟むように位置することから，竈施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説

1	黒	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2	黒	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
3	暗	褐	色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物中量，炭化粒子少量
4	暗	褐	色	ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
5	暗	褐	色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム大ブロック少量

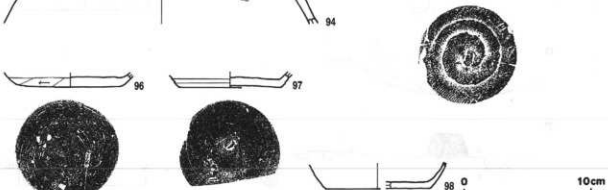
覆土　6層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。第4・5層は竈から流出したと考えられる砂粒を含んでいる。

土層解説

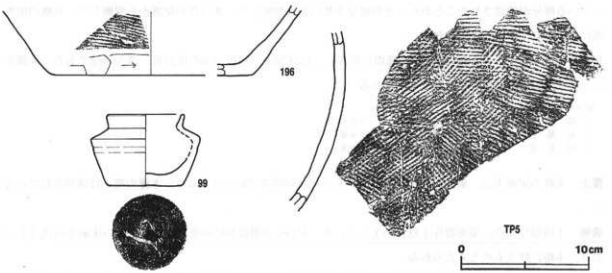
1	黒	褐	色	ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量
2	黒	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム大ブロック・焼土粒子少量
3	黒	褐	色	ローム粒子多量，ローム中ブロック中量，ローム小ブロック少量
4	黒	褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒中量，ローム中ブロック・焼土小ブロック少量
5	黒	褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒中量，炭化粒子少量
6	黒	褐	色	ローム粒子少量

遺物　土師器片187点，須恵器片50点，撹乱により混入した陶器片4点が出土している。図示した土器はいずれも覆土下層や床面から出土したものであり，本跡に伴うものと考えられる。P94の土師器甕の口縁部片は，中央部の覆土下層から出土している。P95の須恵器坏は南壁際の床面から土圧でつぶれた状態で，P96の須恵器坏は中央部の床面から正位でそれぞれ出土している。P97の須恵器坏の底部片は北壁寄りの覆土下層から，P98の須恵器坏の底部片は竈手前の覆土下層からそれぞれ出土している。P99は完形の須恵器短頸壺で，西壁寄りの覆土下層から横位で出土している。P196の須恵器甕は，北東コーナー寄りの床面と第1号遺物包含層（B 8 g8 区）から出土した破片が接合したものである。本跡と第1号遺物包含層は，直線距離にして約35m離れている。TP5の須恵器甕の体部片は，東壁際の床面から出土している。胎土や器形から，第1号遺物包含層（B 8 h9 区）から出土しているTP11の須恵器甕の体部片と同一個体と考えられる。

所見　本跡から出土した土器は，第1号遺物包含層から出土した土器と接合関係にあることから，両跡の関わりを考える上での好資料といえる。時期は，出土土器から8世紀後半と考えられる。



第50図　第20A号住居跡出土遺物実測図(1)



第51図　第20A号住居跡出土遺物実測図(2)

第20A号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
94	甕 土師器	A［23.0］ B（6.6）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内湾して立ち上がり，頸部で屈曲して，口縁部は外反する。端部は外上方へつまみ上げられ，外面に沈線1条を巡らす。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ，内面横位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 褐色 普通	第50図 5%
95	坏 須恵器	A　13.3 B　4.1 C　8.0	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部回転ヘラ切り。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	PL16 80%
96	坏 須恵器	B（1.2） C　8.2	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	30%
97	坏 須恵器	B（1.3） C　8.1	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端ヘラ削り後，ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰白色，普通	20%
98	坏 須恵器	B（2.0） C［8.3］	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部切り離し痕を残すナデ。	砂粒・石英・長石・雲母，黄灰色，普通	15%
99	短頸壺 須恵器	A　6.0 B　5.6 C　6.0	完形。平底。体部は外傾して直線的に立ち上がり，肩部に稜をもつ。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は短く直立する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。底部ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰色 良好	第51図 PL16 100%
196	甕 須恵器	B（5.5） C［15.8］	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面横位の平行叩き，下端横位のヘラ削り。内面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母，褐灰色，普通	3%
TP5	甕 須恵器	B（20.1）	体部の破片。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面横位の平行叩き，一部斜位の平行叩き，内面ナデ。	砂粒・石英・長石 灰白色，普通	5%

第20B号住居跡（第52図）

位置　調査区域の東部，A 9 j3 区。

重複関係　本跡の上部に，第20A号住居が構築されている。

規模と平面形　長軸3.15m，短軸2.90mの方形である。

主軸方向　N－3°－E

壁　壁高は8～18cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　竈部分を除き，壁際を巡っている。上幅10～14cm，下幅6cm，深さ3～6cmで，断面はU字形である。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈　第20A号住居によって掘り込まれたことにより，ほとんど残存していない。北部の床面から赤変してくぼ

んでいる部分が確認されたことから，その部分を焚口部と判断した。焚口部の位置から判断して，北壁の中央部に付設されていたと考えられる。

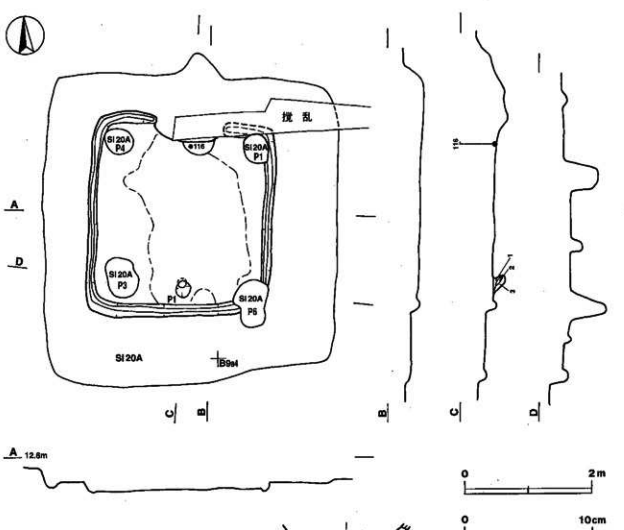
ピット　1か所。P1は南壁中央部の壁際に位置し，長径26cm，短径23cmの楕円形，深さ19cmである。位置から，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説
1　暗　褐　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
2　暗　褐　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3　暗　褐　色　　ローム粒子多量，ローム大ブロック少量

覆土　本跡の床面上に，第20A号住居跡の床が8～18cmの厚さで貼られており，本跡の覆土は検出されていない。

遺物　土師器片3点，須恵器片1点が出土している。P116の須恵器坏の底部片は竈手前の床面から出土しており，本跡に伴うものと考えられる。

所見　本跡は，重複している第20A号住居跡の床下から検出された。この2軒は，主軸方向がほぼ一致し，出土した土器の時期がほぼ同じと考えられることから，本跡を拡張して第20A号住居跡が構築された可能性が高い。時期は，出土土器と重複関係から8世紀中頃と考えられる。



第52図　第20B号住居跡・出土遺物実測図

第20B号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
116	坏 須恵器	B (1.4) C [7.6]	底部の破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母，褐灰色，普通	第52図 5%

第21号住居跡（第53～55図）

位置　調査区域の東部，B９ｃ４区。第20A号住居跡から南へ7.0mの距離に位置する。

重複関係　西部で第55号土坑を掘り込み，東部を第37号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸4.67m，短軸4.35mの方形である。

主軸方向　Ｎ－３°－Ｗ

壁　壁高は10～42cmで，ほぼ直立する。

壁溝　竈部分を除き，壁際を巡っている。上幅９～12cm，下幅５～８cm，深さ３～６cmで，断面はＵ字形である。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈　北壁の中央部を壁外へ10cmほど掘り込んで，砂質粘土で構築されている。焚口部から煙道部まで128cm，両袖部幅103cmである。天井部は崩落しており，第４層が粘土粒子や砂粒を多量に含んでいることから，崩落土と考えられる。また，第12層の下面が赤変硬化していることから，火床面と考えられる。火床面は，床面から10cmほど掘りくぼめられ，皿状を呈している。煙道は，火床部から緩やかに外傾して立ち上がる。

竈土層解説

1	暗赤褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量，焼土中ブロック微量
2	暗赤褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量，ローム中ブロック微量
3	暗赤褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量，ローム中ブロック微量
4	暗赤褐色	粘土粒子・砂粒多量，ローム粒子・焼土粒子中量，ローム小ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量
5	暗赤褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量，焼土中ブロック・砂粒微量
6	暗赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム粒子・砂粒少量
7	暗褐色	粘土粒子多量，ローム粒子・砂粒中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量
8	暗赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・粘土粒子・砂粒少量
9	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・粘土粒子少量，焼土中ブロック微量
10	暗赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック・砂粒中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土中ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
11	暗赤褐色	焼土小ブロック中量，ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量，焼土中ブロック・砂粒微量
12	暗赤褐色	焼土小ブロック多量，ローム粒子・焼土粒子中量，ローム小ブロック・焼土中ブロック少量，炭化粒子・砂粒微量

ピット　６か所（Ｐ１～Ｐ６）。Ｐ１～Ｐ４は，径15～18cmの円形，深さ21～66cmである。いずれも各コーナー寄りに位置することから，主柱穴と考えられる。Ｐ５は南壁中央部の壁際に位置し，長径37cm，短径24cmの楕円形，深さ26cmである。竈に対する位置にあることから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ６は北西コーナー部に位置し，長径72cm，短径49cmの楕円形，深さ12cmで，貯蔵穴の可能性がある。

ピット土層解説

1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
2	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量

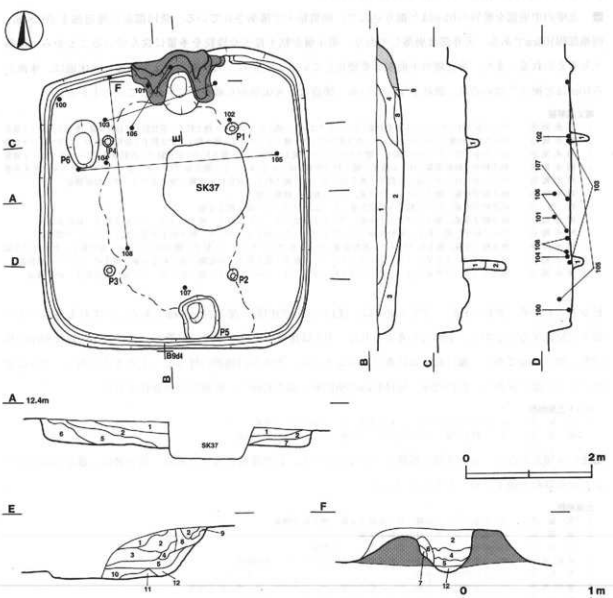
覆土　９層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。第９層は，竈から流れたと思われる砂粒や焼土ブロックを含んでいる。

土層解説

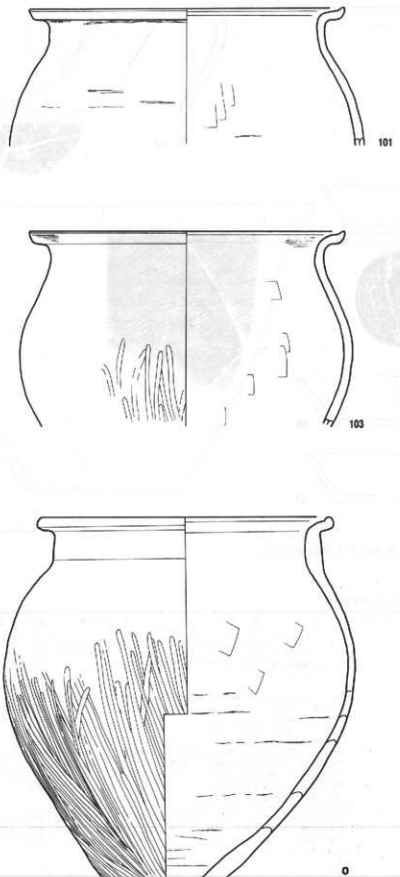
1	黒褐色	ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，焼土粒子微量
2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
3	黒褐色	ローム小ブロック中量，ローム中ブロック微量
4	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土小ブロック・砂粒微量
5	黒褐色	ローム小ブロック少量
6	極暗褐色	ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，ローム中ブロック・焼土粒子微量
7	暗褐色	ローム小ブロック中量，ローム粒子少量，焼土小ブロック微量
8	極暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
9	灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒中量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量

遺物　土師器片128点，須恵器片37点が出土している。遺物の多くは，覆土下層や床面から出土しており，住居廃絶時に遺棄された可能性が高い。P100の土師器甕は，北西コーナー部の床面から，壁際に掘られたように正位で出土している。P101の土師器甕の口縁部片は竈西袖の上部から，P102の土師器甕の口縁部片は北東コーナー寄りの床面から，P104の土師器甕の底部片は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。P103の土師器甕は，竈の東袖脇と北西部の北壁寄りの床面から出土した破片が接合したものである。P105の須恵器坏は西壁寄りの覆土下層と東壁際の床面から，P106の須恵器坏は竈西袖手前の床面と竈内の覆土中層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。P107の須恵器坏は，出入り口施設の北側の床面から破片の状態で出土している。P108の須恵器瓶は，竈西側の壁際の覆土下層と中央部の床面から出土した破片が接合したものである。

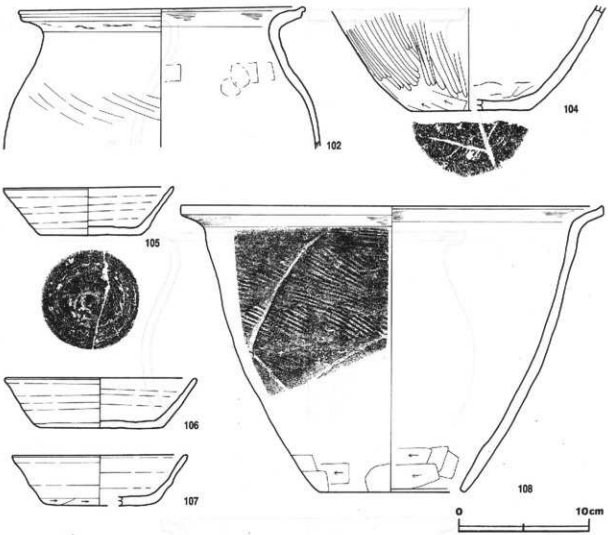
所見　本跡は，住居の規模や主軸方向などが第20A号住居跡と近似し，出土土器の時期もほぼ同じと判断できることから，両跡は同時に存在していた可能性が高い。時期は，出土土器から8世紀後半と考えられる。



第53図　第21号住居跡実測図



第54図　第21号住居跡出土遺物実測図(1)



第55図　第21号住居跡出土遺物実測図(2)

第21号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
100	甕 土師器	A 22.9 B 29.0 C 8.2	口縁部一部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり，頸部で強く屈曲し，口縁部は外反する。端部は上方へつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラ磨き，内面輪積み痕を残す横位のヘラナデ。	砂粒・石英・赤色粒子 にぶい褐色 普通	第54図 PL16 95%
101	甕 土師器	A [24.8] B (10.7)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部で強く屈曲し，口縁部は外反する。端部は外上方へつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ。内面横位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	10%
102	甕 土師器	A [22.4] C (11.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部で強く屈曲し，口縁部は外反する。端部は外上方へつまみ上げられ，外面に沈線1条を巡らす。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面横位のヘラナデ。内面に指頭による押さえ痕を残す。	砂粒・石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい褐色 普通	第55図 10%
103	甕 土師器	A [25.0] B (15.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部で強く屈曲し，口縁部は外反する。端部は外上方へつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ後，縦位のヘラ磨き，内面横位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母・赤色粒子 赤褐色 普通	第54図 PL16 10%
104	甕 土師器	B (8.1) C [9.2]	底部から体部にかけての破片。体部は内彎気味に外観して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ磨き，下端斜位のヘラ削り。内面横位のヘラナデ。底部木葉痕。	砂粒・石英・長石・雲母・赤色粒子 にぶい褐色　普通	第55図 10%

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
105	坏 須恵器	A 13.4 B 3.7 C 8.0	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。ロクロ目弱い。体部下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色，普通	第55図 PL16 75%
106	坏 須恵器	A 15.2 B 3.9 C 9.6	底部・体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部不定方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色，普通	PL16 70%
107	坏 須恵器	A [13.6] B 3.9 C [8.2]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部不定方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	20%
108	甕 須恵器	A [33.2] B 22.3 C [11.8]	底部から口縁部にかけての破片。体部は外傾して直線的に立ち上がり，口縁部で屈曲する。端部はわずかに上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面中位以上横位の平行叩き，下位横位のヘラ削り。体部内面中位以上ナデ，下位横位のヘラ調り。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色，普通	PL16 20%

第23号住居跡（第56図）

位置　調査区域の北西部，B 7 a6 区。第４号住居跡から北西へ15.0m の距離に位置する。

重複関係　南部を第２号溝に，東部を第３号溝に掘り込まれている。また，第１号道路が本跡の上部に構築されている。

規模と平面形　南部を第２号溝に掘り込まれているために，全容は不明である。短軸は3.95m であり，長軸は4.12m だけが確認できた。北東・北西コーナーが直角で，出入り口施設に伴うピットが検出されていることから，ほぼ現存値に近い方形と推定される。

主軸方向　N－14°－W

壁　本跡は，第１号道路が構築される際，あるいはそれ以前に床面近くまで削平されていたと考えられ，壁の立ち上がりは確認できなかった。

壁溝　西部際，北部際で確認されている。上幅11～15cm，下幅４～８cm，深さ３cmで，断面はU字形である。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈　遺存状態が悪く，火床部のみを確認した。火床部の土層断面は３層からなる。第２層の下面が赤変硬化していることから，火床面と考えられる。火床部は床面から約５cm掘りくぼめられて，皿状を呈している。また，覆土全体から竈材と考えられる砂粒が検出されており，竈が存在していたことが裏付けられる。

竈土層解説
1　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・砂粒中量，炭化粒子少量
2　暗赤褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・炭化粒子・砂粒中量，焼土中ブロック・焼土粒子少量
3　暗赤褐色　ローム粒子多量，砂粒中量，焼土粒子少量

ピット　５か所（P1～P5）。P1は，長径78cm，短径59cmの楕円形，深さ66cmである。P2～P4は，径41～69cmの円形，深さ32～44cmである。いずれも各コーナー寄りに位置することから，主柱穴と考えられる。P5はP2・P3の中間やや南寄りに位置し，長径36cm，短径28cmの楕円形，深さ29cmである。位置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

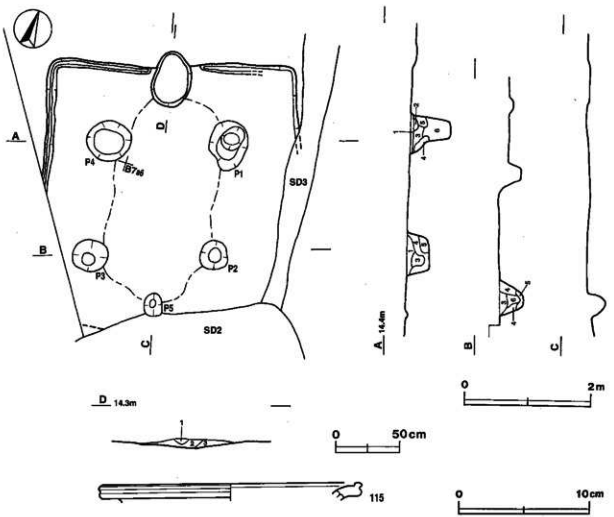
ピット土層解説
1　黒褐色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
2　暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大ブロック少量
4　褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
5　褐色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム大ブロック少量
6　暗褐色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

覆土　床面まで削平された後，本跡の床面直上に第１号道路が構築されたことから，堆積状況は不明である。

遺物　土師器片14点，須恵器片２点，撹乱により混入した陶磁器片７点が出土している。P115の土師器甕の

口縁部片は竈の火床部から出土しており，本跡に伴うものと考えられる。

所見　時期は，第4号住居跡と主軸方向が一致することや出土土器から判断して，8世紀後半と考えられる。



第56図　第23号住居跡・出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
115	甕 土師器	A [20.2] B (1.4)	口縁部の破片。口縁部は外反して開く。端部は上方につまみ上げられ，外面に沈線1条を巡らす。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母に赤い橙色，普通	第56図 5%

(2)　井戸跡

第1号井戸跡（第57～59図）

位置　調査区域の南部，B 8 g7 区。

重複関係　第1号遺物包含層の下層から検出された。

規模と平面形　長径2.42m，短径2.15m の楕円形で，深さ1.64m である。確認面から約0.50m までは漏斗状，それ以下は袋状を呈する。また，本跡の東側に隣接して，硬化した面が検出されている。長径2.60m，短径1.85m の東西に長い不整楕円形で，南側に緩やかに傾斜している。

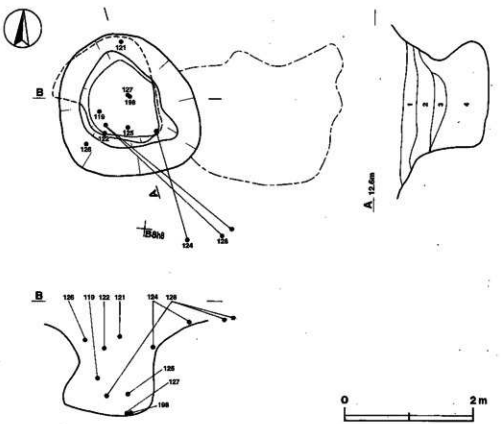
長径方向　N－29°－W

覆土　4層からなる。粘土粒子や砂粒を含むことや不自然な堆積状況から，人為堆積と考えられる。

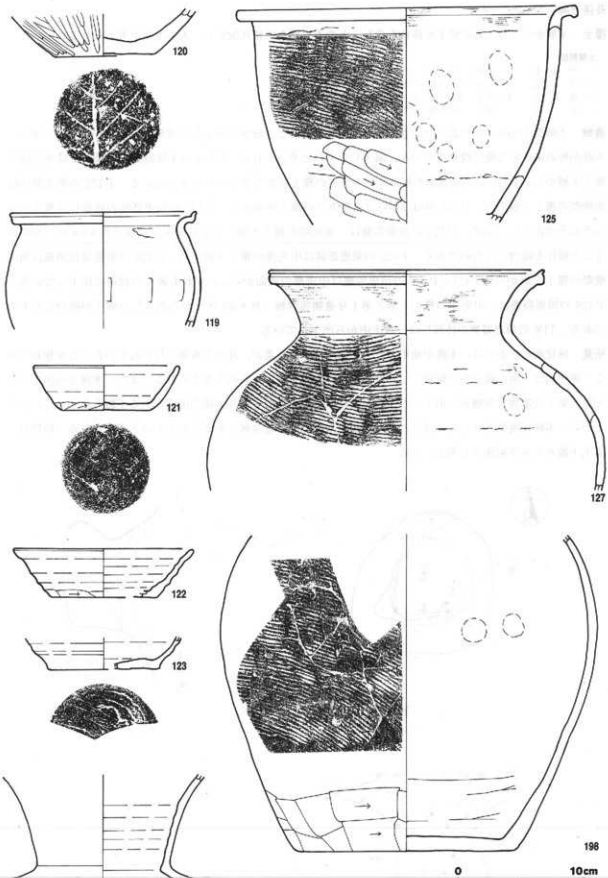
土層解説
1　黒　褐　色　　ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
2　黒　　色　　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
3　黒　褐　色　　粘土粒子・砂粒少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量
4　黒　　色　　粘土粒子・砂粒少量，ローム粒子微量

遺物　土師器片20点，須恵器片44点が出土している。上層と下層から出土した遺物に時期差がないことから，本跡が埋め戻される際に投棄されたか，混入したものと考えられる。P119の土師器甕の口縁部片は中央部の覆土下層から，P120の土師器甕の底部片は中央部の覆土中からそれぞれ出土している。P121の須恵器坏は北壁際の覆土上層から，P122の須恵器坏は南壁寄りの覆土中層から，P123の須恵器坏の底部片は覆土中からそれぞれ出土している。P124の須恵器盤は，東壁際の覆土上層と第1号遺物包含層（B 8 h8 区）から出土した破片が接合したものである。P125の須恵器鉢は中央部の覆土下層から，P126の須恵器長頸瓶は南西壁際の覆土上層から，P127・P198の須恵器甕は中央部の底面から，いずれも破片の状態で出土している。P128の須恵器甕は，中央部の覆土下層と第1号遺物包含層（B 8 g8 区）から出土した破片が接合したものである。TP6の須恵器甕の体部片は，覆土中から出土している。

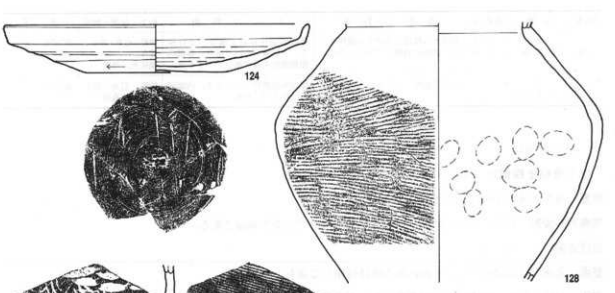
所見　硬化面の広がりは，本跡が使用されていた当時の諸作業が，井戸の東側で行われていたことを想起させる。硬化面は，南へ緩やかに傾斜しており，排水の便は良かったものと考えられる。また，本跡から出土した土器と第1号遺物包含層から出土した土器がほぼ同時期のものであり，接合関係にある土器も出土していることから，本跡が廃棄された後，ほとんど時間をおかずに遺物包含層が形成されたものと考えられる。時期は，出土土器から8世紀後半と考えられる。



第57図　第1号井戸跡実測図



第58図　第1号井戸跡出土遺物実測図(1)



第59図　第１号井戸跡出土遺物実測図(2)

第１号井戸跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
119	甕 土師器	A [14.7] B (9.1)	体部から口縁部にかけて緩片。体部は内彎して立ち上がり，頸部で強く屈曲し，口縁部は外反する。端部は外上方へつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ，内面横位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母・赤色粒子にぶい橙色 普通	第58図 15%
120	甕 土師器	B (3.6) C 7.8	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ磨き，内面ナデ。底部木葉痕。	砂粒・石英・長石・雲母・赤色粒子にぶい橙色，普通	10%
121	坏 須恵器	A [11.5] B 3.5 C 7.0	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。ロクロ目弱い。体部下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	60%
122	坏 須恵器	A [14.4] B 3.8 C [8.4]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部は軽く外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母，褐灰色 普通，火襷有	20%
123	坏 須恵器	B (2.5) C [8.8]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端ヘラ削り後，ナデ。底部切り離し痕を残す1方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	10%
124	盤 須恵器	A [24.0] B 3.8 C 11.2	体部・口縁部一部欠損。平底。体部はわずかに内彎して外方に開き，屈曲して口縁部に至る。口縁部はわずかに外傾する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色，普通	第59図 60%
125	鉢 須恵器	A [16.8] B (17.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，口縁部で屈曲する。端部はわずかに下方に突出させている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面横位の平行叩き，内面指頭痕を残すナデ。体部下端横位のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	第58図 25%
126	長頸瓶 須恵器	B (9.2)	体部から口縁部中位にかけての破片。頸部はくの字状に屈曲し，口縁部はやや外傾して立ち上がる。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。	砂粒・石英・長石・雲母，褐灰色，良好，肩部に自然釉	5%
127	甕 須恵器	A [21.8] B (17.5)	体部上位から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部で屈曲して，口縁部は外反する。端部は上下に突出させ，外面に沈線1条が巡る。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面横位の平行叩き，内面輪積み痕・指頭痕を残すナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色，普通	20%
128	甕 須恵器	B (20.4)	体部の破片。体部は内彎して立ち上がる。	体部外面横位の平行叩き，内面指頭痕を残すナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	第59図 30%

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特質	胎土・色調・焼成	備考
198	深鉢形土器	B (24.9) C 17.0	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面中位以上横位の平行叩き，下位横位のヘラ削り。体部内面指頭痕を残す横位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色，普通	第58図 40%
TP6	深鉢形土器	B (6.5)	体部の破片。わずかに内湾する。	体部外面横位の平行叩き，内面同心円状の当て具痕。	砂粒・石英・長石 褐灰色，良好	第59図 5%

(3) 粘土採掘坑

第1号粘土採掘坑（第60・61図）

位置　調査区域の中央部，B 8 e8 区。

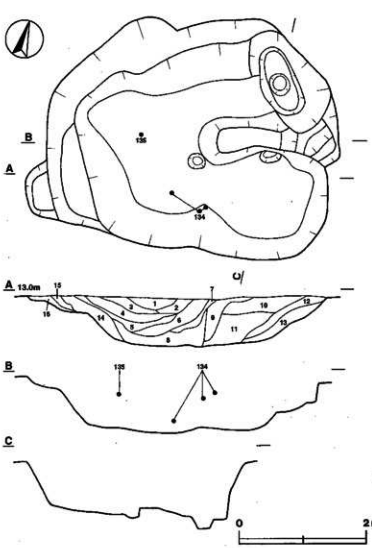
規模と平面形　長径4.65m，短径3.65m の不整楕円形で，深さ88cmである。

長径方向　N－84°－E

壁面　北東壁はほぼ直立し，それ以外の壁は外傾して立ち上がる。

底面　長径3.75m，短径2.50m の東西に長い不整形で，黄灰色粘土層を掘り込んでおり，全体に凸凹である。東壁際中央部の中位から下位にかけて3段の階段状の段差がある。硬化した面は確認できなかった。

覆土　16層からなる。粘土粒子や砂粒を含み，ブロック状に堆積していることから，人為堆積と考えられる。



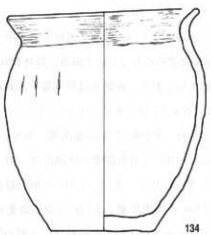
土層解説

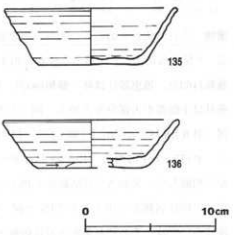
1	黒褐色	焼土粒子・砂粒少量，ローム粒子微量
2	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量，ローム粒子微量
3	黒褐色	砂粒中量，ローム粒子・焼土粒子少量，粘土粒子微量
4	黒褐色	砂粒中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，粘土粒子微量
5	黒褐色	砂粒多量，ローム粒子・粘土粒子少量
6	黒褐色	砂粒中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量，粘土粒子微量
7	黒褐色	砂粒多量，ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
8	明褐色	砂粒多量，粘土粒子中量，ローム粒子少量
9	暗褐色	粘土粒子多量，ローム粒子中量，ローム小ブロック・砂粒少量
10	にぶい黄褐色	粘土粒子多量，ローム粒子・砂粒中量，ローム小ブロック少量
11	褐色	粘土粒子多量，砂粒中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
12	暗褐色	粘土粒子・砂粒中量，ローム小ブロック・ローム粒子少量
13	暗褐色	粘土粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・砂粒少量
14	黒褐色	粘土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量
15	黒褐色	ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量
16	極暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

第60図　第1号粘土採掘坑実測図

遺物　土師器片53点，須恵器片６点が主に覆土中層から出土している。覆土が短期間に埋め戻された様相を呈していることから，出土した土器は本跡とほぼ同時期か，それと近い時期のものと考えられる。P134 の土師器甕は，中央部の覆土下層と覆土中層から出土した破片が接合したものである。P135 の須恵器坏は中央部の覆土中層から，P136 の須恵器坏は覆土中から，いずれも破片の状態で出土している。

所見　本跡は，黄灰色粘土層を掘り込み，覆土に粘土粒子や砂粒を含むことから，粘土採掘坑と考えられる。東壁際から確認された階段状の段差は，踏み固めた部分は確認されなかったものの，形状から粘土を採掘する際の昇降に使用された可能性が考えられる。時期は，出土土器から判断して，８世紀後半と考えられる。





第61図　第１号粘土採掘坑出土遺物実測図

第１号粘土採掘坑出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
134	甕 土師器	A［14.9］ B　17.4 C　8.2	底部から口縁部にかけての破片。平底，体部は内彎して立ち上がり，頸部でゆるやかにくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦位のヘラナデ，内面輪積み痕を残すナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	第61図 50%
135	坏 須恵器	A［13.4］ B　4.4 C［8.2］	底部から口縁部にかけての破片。平底，体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。底部切り離し痕を残すヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色，普通	30%
136	坏 須恵器	A［13.6］ B　3.8 C［8.2］	底部から口縁部にかけての破片。平底，体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端ヘラ削り後，ナデ。底部１方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄褐色，普通	20%

(4)　遺物包含層

第１号遺物包含層（第62～67図）

位置　調査区域の南部，Ｂ８ｇ７区・Ｂ８ｇ８区・Ｂ８ｈ７区・Ｂ８ｈ８区・Ｂ８ｈ９区。

重複関係　本跡の下面から第１号井戸跡が検出された。

規模　調査区の南西部から南東部にかけて黒色土が堆積しており，この黒色土の堆積する区域の北部中央に，東西約10m，南北約７m，厚さ20～30cmにわたって土器片の包含がみられる。

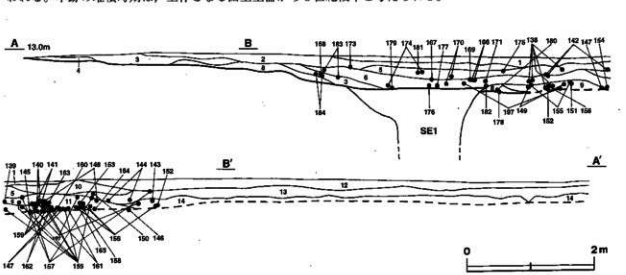
覆土　16層からなる。本跡の下面は黄灰色粘土層であり，南部に向かって緩やかに傾斜していることが確認された。この傾斜に沿って自然に流れ込んだと考えられる黒色土が堆積している。遺物は第６・９・11層に集中している。第９層は，竈材と考えられる粘土粒子や砂粒を含んでいる。

土層解説

1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
2	黒色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム小ブロック・焼土小ブロック微量
3	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
5	黒色	ローム小ブロック・ローム粒子微量
6	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量
7	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子少量
8	極暗褐色	ローム粒子中量
9	暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒・小礫中量，炭化粒子少量
10	黒色	ローム粒子・焼土粒子微量
11	極暗褐色	ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・砂粒・小礫少量
12	黒褐色	ローム粒子少量，焼土粒子微量
13	暗褐褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
14	黒暗褐色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
15	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
16	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

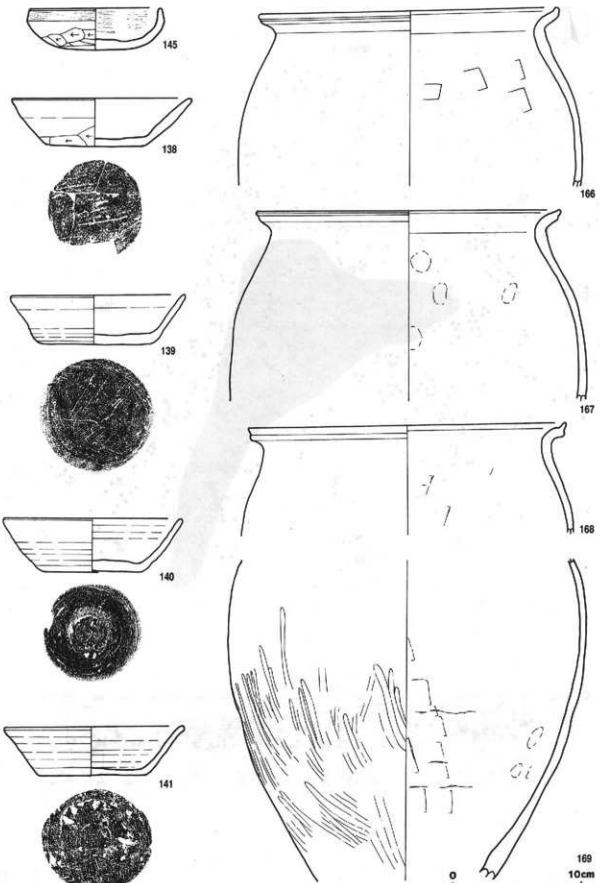
遺物　奈良時代の土師器片1209点，須恵器片1202点，古墳時代の土師器片９点，縄文土器片27点が出土している。上位から出土した土器と下位から出土した土器に，時期的な差は認められない。土師器片は坏類46点，甕・甑類1163点，須恵器片は坏・盤類885点，鉢・甕・甑類317点が出土しており，食膳具は須恵器が，煮炊具・貯蔵具は土師器が大部分を占める。図示したP138～144は北東部（B８h7区）から，P145～157・P197は東部（B８h8区）から，P158～165・TP11は南部（B８h9区）から，P166～174は北西部（B８g7区）から，P175～184は西部（B８g8区）からそれぞれ出土している。P197の須恵器甕の体部片は，胎土や器形から判断して，第20Ａ号住居跡から出土したP196と同一個体と考えられる。また，TP11の須恵器甕の体部片は，同住居跡から出土したTP5と同一個体と考えられる。P196の須恵器甕とP128の須恵器甕の接合関係については，それぞれ第20Ａ号住居跡・第１号井戸跡で紹介している。粘土粒子や砂粒は，土器の出土した範囲の最下層から確認されている。

所見　本跡からは，器面の摩耗した土器に混じって破断面の鋭利な土器が多く確認されており，それらは自然に流れ込んだものとは考えにくい。土層断面に人為的に掘り込んだ形跡が見られないことや，完形の土器が出土していないことなどから，本跡は，破損等により使用できなくなった土器が投棄された「土器捨て場」の可能性がある。遺物の出土状況から判断して，土器は南部に傾斜する自然地形を利用し，北部から南部へ一方向に投棄されたものと推測される。また，第９層で確認された粘土粒子や砂粒は，焼土粒子や炭化粒子が混じっていることから，竈からかき出されたものか，竈の作り替えに伴って不要となった竈材が投棄されたものと思われる。本跡の堆積時期は，主体となる出土土器から８世紀後半と考えられる。

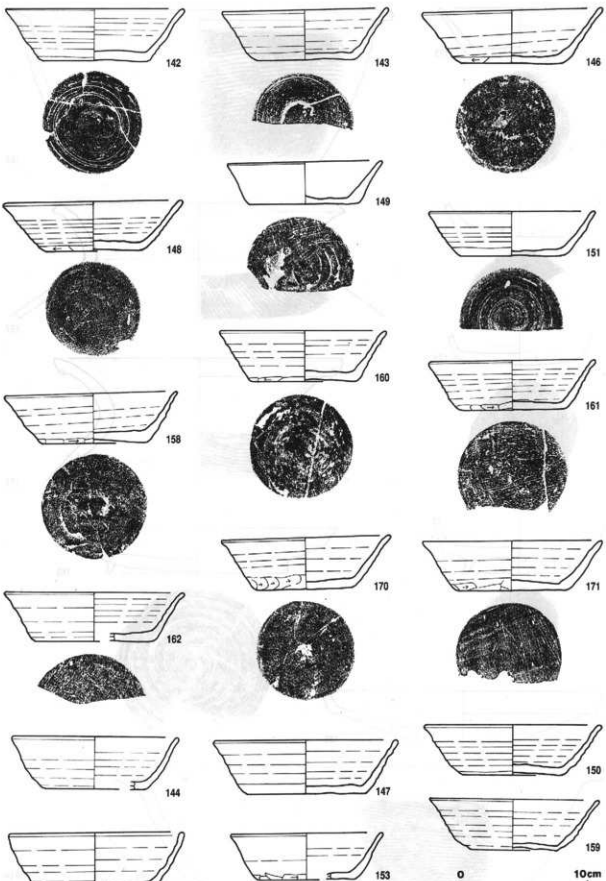


第62図　第１号遺物包含層土層断面図

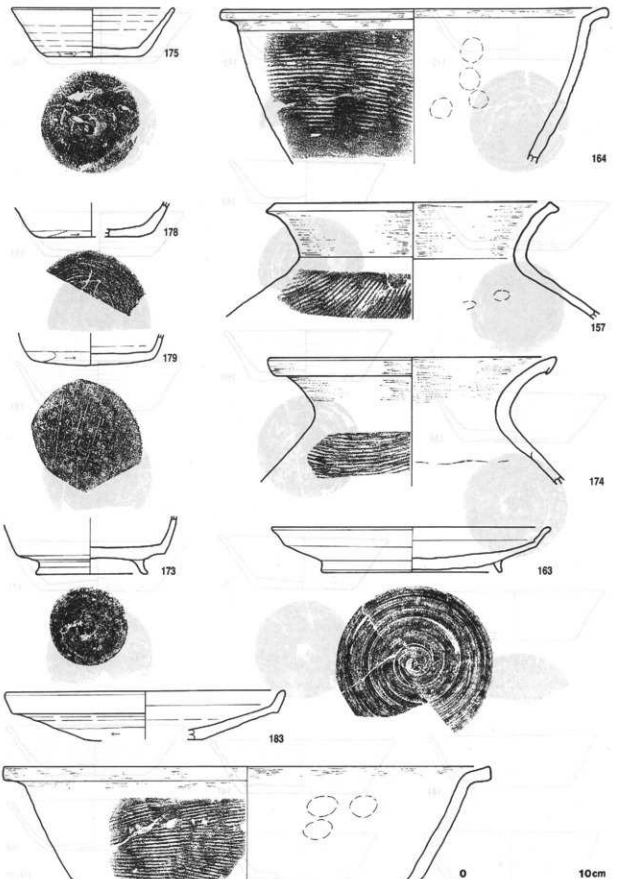
第63図　第1号遺物包含層実測図



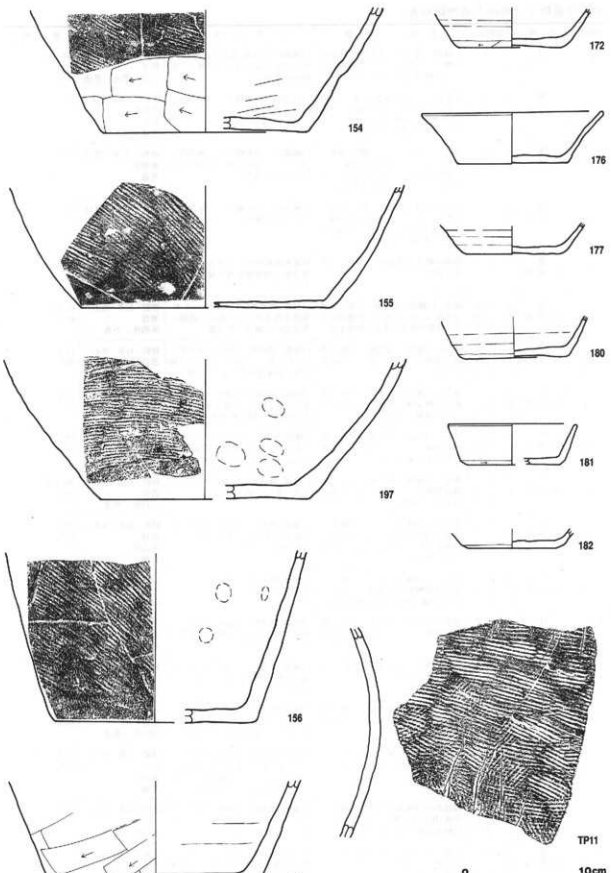
第64図　第1号遺物包含層出土遺物実測図(1)



第65図　第１号遺物包含層出土遺物実測図(2)



第66図　第1号遺物包含層出土遺物実測図(3)



第67図　第１号遺物包含層出土遺物実測図(4)

第1号遺物包含層出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
145	坏 土師器	A 10.4 B 3.3	口縁部一部欠損。丸底。底部から内彎して立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面，体部内面横ナデ。底部外面不定方向のヘラ削り。底部内面中央ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい橙色，普通	第64図 PL17 95%
166	甕 土師器	A 23.5 B (14.0)	体部中位以下欠損。体部は内彎して立ち上がり，頸部はくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。端部は上方につまみ上げられ，外面に沈線1条を巡らす。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ，内面横位のヘラナデ。	砂粒・石英・雲母 赤色粒子 橙色 普通	20%
167	甕 土師器	A [24.0] B (15.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部で屈曲して，口縁部は外反する。薄部は外上方につまみ上げられ，外面に沈線1条を巡らす。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。体部内面に指頭による押さえ痕を残す。	砂粒・石英・雲母 赤褐色 普通	15%
168	甕 土師器	A [25.0] B (8.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部で強く屈曲して，口縁部は外方へ短く開く。端部は外上方へつまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ナデ，内面横位のヘラナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	10%
169	甕 土師器	B (25.1)	体部の破片。体部は，内彎して立ち上がる。	体部外面縦位のヘラ磨き，内面輪積み痕・指頭痕を残す横位のヘラナデ。	砂粒・石英・雲母 明褐色，普通	35%
138	坏 須恵器	A 14.3 B 3.9 C 7.8	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。体部中位がわずかに肥厚する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。作り締。	砂粒・石英・長石・雲母 灰褐色，不良	PL17 80%
139	坏 須恵器	A [13.7] B 3.9 C 8.7	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。ロクロ目弱い。底部1方向のヘラ削り後，周縁部不定方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰褐色，普通	PL17 80%
140	坏 須恵器	A [14.2] B 4.2 C 7.8	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰白色，普通	PL17 60%
141	坏 須恵器	A [14.0] B 3.8 C 8.4	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部回転ヘラ切り後，1方向のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色，普通	PL17 60%
142	坏 須恵器	A [14.2] B 4.1 C 8.0	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰白色，普通	第65図 55%
143	坏 須恵器	A [13.1] B 4.0 C [7.6]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。端部は丸くおさめている。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色 普通	PL17 45%
144	坏 須恵器	A [13.0] B 4.1 C [8.0]	底部から口縁部にかけての破片。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄褐色，普通	30%
146	坏 須恵器	A 14.0 B 4.4 C 7.8	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部手持ちヘラ削り後，ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色，普通	PL17 95%
147	坏 須恵器	A [14.4] B 4.2 C 9.4	底部・体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，1方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 明赤褐色，不良	PL17 60%
148	坏 須恵器	A 14.0 B 3.8 C 7.4	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。ロクロ目強い。体部下端ヘラ削り後，ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色，普通	PL17 70%
149	坏 須恵器	A [12.4] B 3.3 C 8.7	底部・体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。ロクロ目弱い。体部下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部回転ヘラ切り後。不定方向のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色 普通	PL17 60%
150	坏 須恵器	A [14.0] B 3.9 C 7.9	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。ロクロ目強い。底部回転ヘラ切り後，1方向のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰白色，普通	55%
151	坏 須恵器	A [13.2] B 3.5 C 8.0	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端ヘラ削り後，ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色，普通	40%
152	坏 須恵器	A [13.8] B 5.0 C [8.4]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部はわずかに内彎して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	40%

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
153	坏 須恵器	A [12.2] B 3.6 C [7.6]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色，普通	第65図 PL17 30%
158	坏 須恵器	A 13.8 B 4.0 C 8.4	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，1方向のヘラナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 灰黄色，普通	PL17 80%
159	坏 須恵器	A [13.4] B 4.0 C 7.0	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り離し。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい橙色，不良	PL17 60%
160	坏 須恵器	A [13.1] B 4.0 C 8.3	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ，体部下端下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部回転ヘラ切り後，1方向のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色，普通	PL17 70%
161	坏 須恵器	A 13.3 B 3.9 C 8.3	底部・体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部2方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色，普通	PL17 60%
162	坏 須恵器	A [14.0] B 3.8 C [9.2]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，2方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色，普通	40%
170	坏 須恵器	A 13.5 B 4.0 C 7.7	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，1方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰色，普通	PL17 80%
171	坏 須恵器	A 14.1 B 3.9 C 8.7	底部・体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母，灰白色 普通，火襷有	PL17 60% 体部内面油類付着
172	坏 須恵器	B (3.0) C [8.3]	底部から体部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	第67図 20%
175	坏 須恵器	A [12.8] B 3.8 C 7.4	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後，不定方向のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰色，普通	第66図 65%
176	坏 須恵器	A [14.3] B 4.0 C 8.7	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。ロクロ目弱い。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰白色，普通	第67図 50%
177	坏 須恵器	B (2.4) C 7.6	底部から体部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，2方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰色，普通	45%
178	坏 須恵器	B (2.6) C [8.6]	底部から体部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り後，ナデ。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・雲母 明褐色 普通	第66図，PL17 40% 底部箆書「九」
179	坏 須恵器	B (2.5) C [9.6]	底部から体部にかけての破片。丸みを帯びた平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色，普通	40%
180	坏 須恵器	B (3.7) C [8.4]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後，1方向のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色，普通	第67図 30%
181	坏 須恵器	A [10.2] B 3.2 C [7.3]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。ロクロ目弱い。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，良好	30%
182	坏 須恵器	B (1.5) C [6.8]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部2方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰色，普通	25%
173	高台付坏 須恵器	B (4.4) D 8.8 E 1.1	体部中位以上欠損。体部は下位に使を有し，外傾して立ち上がる。高台はハの字状に開く。接地面は平らである。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ切り離し。高台貼り付け後，ロクロナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色 良好	第66図 PL17 55%
163	盤 須恵器	A [22.1] B 3.5 D 14.2 E 1.0	高台部・体部・口縁部一部欠損。平底。体部は若干内彎して外方に開き，屈曲して口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。高台はハの字状に開き，断面台形。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。底部は回転ヘラ調り後，高台貼り付け。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色 普通	PL17 55%
183	盤 須恵器	A [22.0] B (3.6) C [9.2]	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部はわずかに内彎して外方に開き，屈曲して口縁部に至る。口縁部は外傾して短く立ち上がる。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端，底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色 普通	25%

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
164	鉢 須恵器	A [30.2] B (12.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎して立ち上がり，口縁部で屈曲する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面輪積み痕を残す横位の平行叩き，内面指頭による押さえ痕を残すナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色 普通	第66図 30%
165	鉢 須恵器	A [38.2] B (9.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部はわずかに内彎して立ち上がり，口縁部で屈曲する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面横位の平行叩き，内面指頭による押さえ痕を残すナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色，普通	20%
154	甕 須恵器	B (9.8) C [16.1]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面斜位の平行叩き，下端横位のヘラ削り，内面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	第67図 25%
155	甕 須恵器	B (9.6) C [19.6]	底部から体部にかけての破片。平底。体部はわずかに内彎しながら，外傾して立ち上がる。	体部外面斜位の平行叩き，内面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色，普通	20%
156	甕 須恵器	B (13.3) C [16.0]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外面斜位の平行叩き，内面指頭による押さえ痕を残すナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色，普通	20%
157	甕 須恵器	A [21.8] B (9.3)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部で屈曲し，口縁部は外反する。端部は外下方につまみ出されている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面斜位の平行叩き，内面指頭による押さえ痕を残すナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色 普通	第66図 10%
174	甕 須恵器	A [23.0] B (10.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり，頸部で屈曲し，口縁部は外反する。端部は下方に突出する。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面横位の平行叩き，内面ナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰白色 普通	10%
184	甕 須恵器	B (8.2) C [16.0]	底部から体部にかけての破片。体部は外傾して立ち上がる。	体部下位外面斜位のヘラ削り，内面横位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色，普通	第67図 35%
197	甕 須恵器	B (11.0) C [16.4]	底部から体部にかけての破片。平底。体部はわずかに内彎しながら，外傾して立ち上がる。	体部外面横位の平行叩き，内面指頭による押さえ痕を残すナデ。	砂粒・長石 灰黄色 良好	10%
TP11	甕 須恵器	B (17.8)	体部の破片。体部は内彎する。	体部外面横位の平行叩き，一部斜位の並行叩き。内面ナデ。	砂粒・石英・長石 灰白色，普通	5%

4　その他の時代の遺構と遺物

当遺跡から，縄文時代，古墳時代及び奈良時代の遺構のほか，中・近世または年代が明らかではない遺構として，竪穴住居跡1軒，掘立柱建物跡1棟，溝跡10条，道路跡1条，土坑51基を確認した。以下，確認した遺構と出土した遺物について記載する。

(1)　竪穴住居跡

第18号住居跡（第68図）

位置　調査区域の北東部，A 9 j2 区。

規模と平面形　1辺2.96mの方形である。

主軸方向　N－20°－W

壁　壁高は8～11cmで，外傾して立ち上がる。

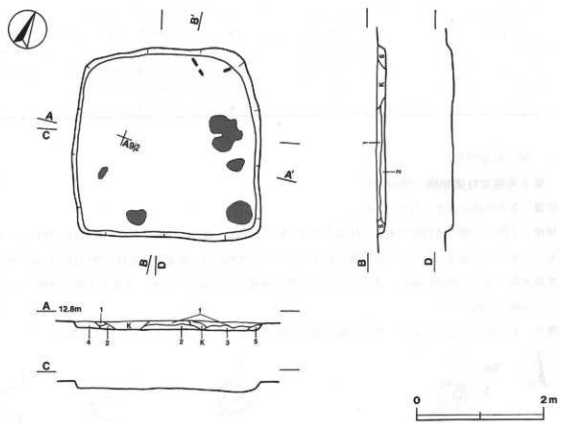
床　ほぼ平坦で，特に踏み固められた部分は認められない。

覆土　6層からなる。ロームブロックを含みブロック状に堆積していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子中量，ローム大ブロック・ローム小ブロック・焼土小ブロック少量
2　黒　褐　色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3　暗 赤 褐 色　ローム粒子多量，ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量
4　にぶい赤褐色　ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック中量，ローム中ブロック・焼土粒子少量
5　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
6　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量

遺物　土師器細片５点，炭化材が出土している。

所見　本跡は，床面に焼土や炭化材が散見され，焼失住居の可能性がある。時期は，判断できる遺物が出土していないため，不明である。



第68図　第18号住居跡実測図

表２　鳥名前野遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)（長軸×短軸）	壁高(cm)	床面	内部施設					覆土	出土遺物	備考 重複関係 新旧関係(古→新)
							整備	主柱穴	出入口ピット	ピット	炉・竈	貯蔵穴			
1	A7 i5	N-30°-W	長方形	7.42 × 6.46	5	平坦	全周	4	−	−	炉	−	人為	土師器（高坏・壺），土製品（球状土錘）	本跡→SD３・SF１
2	A7 f5	N-25°-W	方形（長方形）	5.92 ×〔4.70〕	18～35	平坦	〔全周〕	2	1	−	−	1	自然	土師器（高坏・坩・甕），土製品（球状土錘）	本跡→SK12・SF１
3	A7 i7	N-34°-W	方形	4.54 × 4.24	11～14	平坦	全周	1	1	−	炉	2	自然	土師器（甕）	
4	B7 d9	N-16°-W	方形	4.50 × 4.25	2～13	平坦	全周	4	1	2	竈	1	自然	土師器（甕），紡錘器（坏・鉢）	
5	A8 e4	N-32°-W	方形（長方形）	5.87 ×〔2.26〕	8～16	平坦	−	2	1	−	−	1	自然	土師器（甕・鉢）	SI10→本跡
6	B8 a7	N-19°-W	方形	3.82 × 3.76	22～30	平坦	全周	3	1	−	−	−	自然	土師器（高坏・坩・甕）	SI14→本跡→SK２
7	A8 h4	N-15°-E	台形	3.53 × 3.05	6～14	平坦	全周	−	1	−	炉	1	自然	土師器（高坏・甕）	
8	A8 j4	N-6°-E	方形	3.76 × 3.65	27～29	平坦	全周	−	−	−	炉?2	1	人為	土師器（椀・高坏・坩・甕）	SK20→本跡
9	B8 b5	N-0°	方形	4.80 × 4.50	28～39	平坦	−	4	1	−	−	1	自然	土師器（高坏・壺・甕・台付甕）	
10	A8 e4	N-50°-W	方形	4.03 × 3.90	16～30	平坦	全周	−	1	−	炉	1	自然	土師器（高坏・器台・坩・椀・甕・手捏）	本跡→SI５
11	A8 e6	N-15°-W	方形（長方形）	4.56 ×〔2.75〕	6～9	平坦	〔全周〕	2	1	−	−	−	自然	紡錘器（坏）	
12	A8 f5	N-7°-W	方形（長方形）	4.32 ×〔3.37〕	18～25	平坦	〔全周〕	−	1	−	−	−	自然	土師器（甕）	本跡→SI13
13	A8 f6	N-28°-W	方形	6.60 × 6.38	9～16	平坦	一部	4	1	−	炉	1	自然	土師器（高坏・甕）	SI12→本跡→SK３
14	B8 a7	N-8°-W	方形	4.58 × 4.33	12	平坦	全周	1	1	−	炉	−	−	土師器（坩・甕）	本跡→SI６・SK１
15	B8 a9	N-18°-W	〔方形〕	4.38 ×〔4.26〕	−	平坦	一部	−	−	−	−	1	−	土師器（高坏・坩・甕）	

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)(長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	内部施設						覆土	出土遺物	備考 重複関係 新旧関係(古→新)
							壁溝	主柱穴	出入口ピット	ピット	炉・竈	貯蔵穴			
16	A8i0	N-17°-W	方形	4.08 × 3.83	5~17	平坦	全周	4	1	-	竈	1	自然	土師器(甕)，須恵器(坏)	
17	A8e0	N-22°-W	長方形	5.85 × 3.90	23~33	平坦	全周	2	2	-	竈	1	自然	土師器(坏・甕・鍋・ミニチュア)，石製品(紡石・砧錘車)	
18	A9j2	N-20°-W	方形	2.96 × 2.96	8~11	平坦	-	-	-	-	-	-	人為	土師器	
19	A9h3	N-16°-W	長方形	4.25 × 3.55	25~36	平坦	全周	-	1	-	竈	-	自然	須恵器(坏・高台付坏・鉢)	SK24→本跡
20A	A9j3	N-0°	方形	4.85 × 4.62	8~24	平坦	全周	4	1	3	竈	-	自然	土師器(甕)，須恵器(坏・短頸壺・甕)	SI20B→本跡
20B	A9j3	N-3°-E	方形	3.15 × 2.90	8~18	平坦	全周	-	1	-	竈	-	-	須恵器(坏)	本跡→SI20A
21	B9c4	N-3°-W	方形	4.67 × 4.35	10~42	平坦	全周	4	1	1	竈	-	自然	土師器(甕)，須恵器(坏・甑)	SK55→本跡→SK37
22	A8j2	N-35°-W	長方形	3.75 × 3.30	4~12	平坦	-	2	1	-	炉	-	不明	土師器(高坏・壺・甕)	
23	B7a6	N-14°-W	[方形]	(4.12) × 3.95	-	平坦	[全周]	4	1	-	竈	-	-	土師器(甕)	本跡→SD2・SD3

(2) 掘立柱建物跡

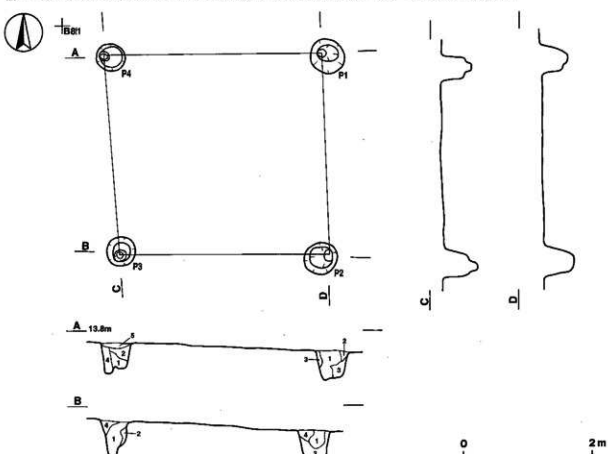
第1号掘立柱建物跡（第69図）

位置 調査区域の西部，B8f1区。

規模 1間×1間の建物跡である。柱間寸法は，桁行3.37m，梁行3.12mである。柱穴は，径44cm～55cmの円形で，深さ42～56cmである。柱抜き取り痕はP1～3で認められ，推定される柱の径は13～15cmである。

主軸方向 本跡の西側に墓壙と考えられる土坑群が隣接していることから，東側を正面と判断し，N－93°－Wの軸線を主軸とした。

覆土 第1層はしまりが弱く，柱抜き取り痕の土層と考えられる。第2～5層は埋土である。



第69図 第1号掘立柱建物跡実測図

土層解説
1 黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，しまり弱
2 黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
3 暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック微量
4 暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
5 黒 褐 色　ローム小ブロック中量，ローム粒子少量

遺物　混入したと考えられる土師器細片10点が出土している。

所見　本跡は，西側に近世の墓壙と思われる土坑群が隣接することから，墓域に伴う小堂の可能性が考えられる。詳細な時期は，判断できる遺物が出土していないために不明である。

(3) 溝　跡

当遺跡から溝跡10条を確認した。性格については不明なものが多いが，第6号溝跡は最近の地籍図の筆境と位置がほぼ一致していることから，土地の区画溝的な役割をもっていたものと考えられる。ここでは遺構に伴う遺物が出土している第1号溝跡及び第2号溝跡について記述し，その他は一覧表に記載する。

第1号溝跡（第4・70図）

位置　調査区域の南西部，B7h9区～B7d8区。

重複関係　本跡の覆土の上部に，第1号道路が構築されている。本跡と第1号道路は，方向をほぼ同じくする。

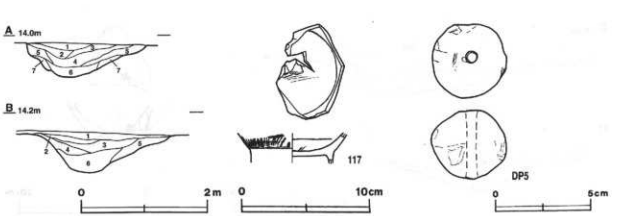
規模と形状　上幅1.80～2.20m，下幅0.32～0.60m，深さ87～95cmである。北部が調査区域外に延びており，確認できた長さは17.2mである。断面は緩やかなU字形である。

方向　B7h9区から北北西方向（N－20°－W）に直線的に延び，北端部（B7d8区）で北西方向（N－40°－W）に緩やかに折れ，調査区域外に至っている。

覆土　7層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1 黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
2 暗 暗 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
3 黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
4 黒 褐 色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
5 黒 褐 色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
6 暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
7 暗 褐 色　ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

遺物　陶磁器片9点，土師器片31点，須恵器片2点，土製品1点（球状土錘）が出土している。P117の磁器椀は，中央部（B7f9区）の覆土中層から出土した破片3点が接合したものであり，肥前系の広東椀と考え



第70図　第1号溝跡・出土遺物実測図

られる。DP5の球状土錘は，南東部（B７h9区）の覆土上層から出土しており，土師器片，須恵器片とともに混入したものと考えられる。

所見　時期は，重複関係や出土した磁器片から近世（18～19世紀）と考えられる。

第１号溝跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
117	磁器	椀 B〔2.4〕 D〔6.4〕	底部から体部にかけての破片。高台は端部欠損のため，所画形は不明である。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。透明釉施釉。体部外面に染め付けによる草木文ヵ。	長石 灰白色 良好	第70図，PL18 10% 肥前系

遺物番号	器種	計測値 径(cm)	長さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)	特徴	胎土・色調	備考
DP5	球状土錘	3.9	3.5	0.7	26.4	やや扁平な球体，ナデ	砂粒・長石・雲母，にぶい赤褐色	第70図，PL18，95%

第２号溝跡（第４・71図）

位置　調査区域の南西部，B７c6区～B７a6区。

重複関係　本跡の覆土の上部に，第１号道路が構築されている。本跡が，第23号住居跡の南部を掘り込んでいる。

規模と形状　上幅1.60～1.90m，下幅0.20～0.80m，深さ54～60cmである。南端と西端がともに調査区域外に至ることから，全体の規模は不明であり，確認された長さは8.4mである。断面は緩やかなU字形である。

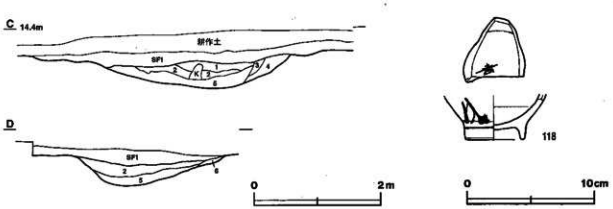
方向　B７c6区から北方向（N－3°－W）に直線的に延び，B７a6区で西方向（N－92°－W）に屈曲し，調査区域外に延びている。

覆土　６層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
2　暗　褐　色　　ローム中ブロック少量，ローム小ブロック・ローム粒子微量
3　暗　褐　色　　ローム粒子少景，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
4　暗　褐　色　　ローム粒子少量，ローム大ブロック微量
5　暗　褐　色　　ローム粒子中景，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
6　暗　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量

遺物　陶磁器片３点，土師器片11点が出土している。P118の磁器椀の底部片は覆土中から出土しており，肥前系の小形の広東椀と考えられる。土師器片は混入したものと考えられる。

所見　時期は，重複関係や出土した磁器片から，近世（18～19世紀）と考えられる。



第71図　第２号溝跡・出土遺物実測図

第２号溝跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
118	広東椀 磁器	B (3.5) D 4.3 E 1.4	底部から体部にかけての破片。断面三角形の高台が付く。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。透明釉施釉。見込み部に「吉」の染め付け。	長石 灰白色 良好	第71図，PL18 10% 肥前系

以下に，上述した遺構を除く溝跡の土層解説を記載する。(第72図)

第４号溝跡土層解説
1 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
3 黒 褐 色 ローム粒子少量
4 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

第５号溝跡土層解説
1 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・砂粒少量
2 暗 褐 色 ローム粒子・砂粒少量
3 黒 褐 色 ローム小ブロック微量

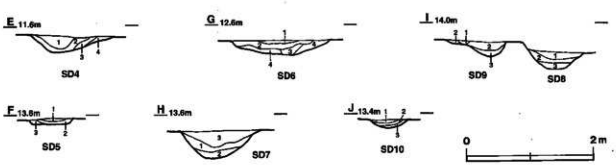
第６号溝跡土層解説
1 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量，焼土小ブロック微量
2 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子・砂粒少量
3 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量，焼土粒子微量
4 黒 褐 色 ローム粒子・砂粒微量

第７号溝跡土層解説
1 黒 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
3 黒 褐 色 ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量

第８号溝跡土層解説
1 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2 黒 褐 色 ローム粒子少量
3 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

第９号溝跡土層解説
1 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
2 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

第10号溝跡土層解説
1 黒 褐 色 ローム粒子少量，ローム中ブロック微量
2 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
3 黒 褐 色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量



第72図　第４～10号溝跡土層断面図

表３　鳥名前野遺跡溝跡一覧表

溝跡番号	位置	走行方向	規模 (m) 長さ	上幅	下幅	深さ	立ち上がり面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係 (古→新)
1	B7h9～B7d8	N－20°－W	(17.2)	1.82～2.20	0.32～0.60	0.78～0.95	緩斜	緩やかなU字状	自然	土師器片21，須恵器片２，陶磁器片９，土製品１（球状土錘）	本跡→SF１
2	B7c5～B7a6	N－３°－W N－92°－W	(8.4)	1.60～1.90	0.20～0.80	0.54～0.80	緩斜	緩やかなU字状	自然	土師器片11，陶磁器片３	SD2→本跡→SF１
3	B7a5～A7i6	N－３°－W	(9.5)	0.24～0.92	0.10～0.44	0.06～0.08	緩斜	緩やかなU字状	－		SI１・SD3→本跡
4	B9j7～A9g8	N－11°－E	(41.0)	0.90～1.14	0.20～0.42	0.04～0.41	緩斜	緩やかなU字状	自然	土師器片24，須恵器片11，陶製片２	SK32・SK33→本跡
5	B8c2～B8c4	N－88°－E	8.2	0.30～0.64	0.26～0.58	0.11～0.14	外緩	平坦	自然	縄文土器片１，土師器片３，陶製片１	
6	B9i7～B8f9	N－98°－W N－９°－W	(40.3)	0.40～1.60	0.12～0.48	0.18～0.26	緩斜	緩やかなU字状	自然	縄文土器片１，土師器片16，須恵器片13，陶磁器片７	第１号遺物包含層→本跡
7	C8d4～B8h1	N－43°－W	(32.6)	0.60～0.84	0.30～0.64	0.10～0.38	緩斜	緩やかなU字状	自然	縄文土器片２，土師器片18，須恵器片３，陶磁器片４	本跡→SD10
8	C8a2～B7h0	N－27°－W	(25.2)	1.00～1.40	0.24～0.46	0.16～0.24	緩斜	緩やかなU字状	自然	縄文土器片４，土師器片23，須恵器片７，陶磁器片３	本跡→SF１
9	C8a1～B7h0	N－24°－W	(22.6)	0.88～1.32	0.04～0.16	0.16～0.22	緩斜	緩やかなU字状	自然	土師器片９，須恵器片４，陶磁器片４	本跡→SF１
10	C8b2～C8a6	N－84°－E	13.6	0.16～0.50	0.08～0.36	0.80	緩斜	緩やかなU字状	自然		SD７→本跡

(4) 道路跡

第1号道路跡（第4・73図）

位置　調査区域の南端から北端，C8c2区～A7f5区。

重複関係　第1・2・23号住居跡，第1・2・8・9号溝跡の上部に本跡が構築されている。

規模と形状　表土除去の際，黒色土の堆積した層の中から硬化した面が帯状に検出されたことから，道路跡として調査した。規模は，調査できた範囲で，長さ78.0m，幅2.8～5.1mである。断面は，弧状あるいは台形である。

方向　南端の調査区域外（C8c2区）から北北西方向（N－20°－W）の調査区域外（A7f5区）までほぼ直線的に延びている。

トレンチ土層　5層からなる。硬化面がほぼ露出した状態で検出されたため，覆土の堆積状況は不明である。道路跡の構築状況を確認するために硬化面にトレンチを入れて観察したところ，硬化面は1層のみで，下位から硬化した面は確認されなかった。第1層が締まりが強いことから，路面として使用された面と考えられる。第5層の下面はハードローム層である。

土層解説

1	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，締まり強
2	黒褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，ローム中ブロック微量
3	極暗褐色	ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
5	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

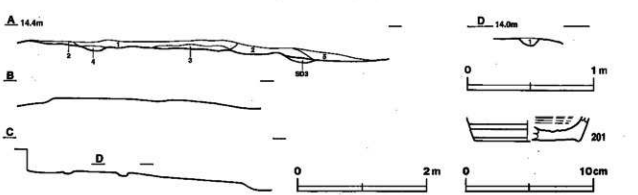
轍痕　B7j0区からB7h9区にかけて2条の溝が確認された。幅7～14cm，深さ3～6cm，長さ10.5mで，断面はU字形である。2条の溝の間隔は約100cmで，B7j0区から北北西に向かって同じ間隔を保ったまま，ほぼ直線的に調査区域外に延びている。これらの溝は轍と考えられ，補修されたとみられる。補修材と考えられる土は，鉄分をわずかに含み若干青みがかった粘土質の土に砂粒を混ぜたもので，周囲の土層と比べて特に硬く締まっている。

土層解説

1	褐灰色	粘土粒子中量，ローム粒子・砂粒少量，粘性強，締まり普に強

遺物　陶磁器細片14点，土師器細片25点，須恵器細片17点が出土している。P201の瀬戸・美濃系の陶器瓶の底部片は，硬化面下の覆土中から出土している。土師器片・須恵器片は，混入したものと考えられる。

所見　トレンチの土層からは，人為的に構築された様子が確認されなかったことから，自然堆積した黒色土が人の往来と共に踏み固められ，硬化したものと考えられる。補修痕のある2条の溝は，荷車等の轍の跡と考えられる。時期は，重複関係や出土した陶器片から，近世から近代と考えられる。



第73図　第1号道路跡土層断面・出土遺物実測図

第1号道路跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
201	陶器	B (1.9) C [8.2]	底部の破片。断面逆台形の短い高台が付く。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。削り出し高台。	長石 にぶい黄褐色 良好	第73図 10% 瀬戸・美濃系

(5) 土 坑

今回の調査の結果，56基の土坑が確認された。調査区域全体に分布しており，内訳は，方形及び長方形のもの9基，円形及び楕円形のもの43基，不定形のもの4基である。このうち，出土遺物や重複関係から縄文時代の陥し穴と考えられる第20号土坑は縄文時代の項で，古墳時代のものと考えられる第15・17・19・56号土坑については古墳時代の項で取り上げている。その他の土坑は，出土遺物が少ないため，時代・性格とも不明なものが多い。調査区域の西部に分布する第4～10号土坑については，規模・形状がほぼ等しく，覆土の堆積状況が不自然なものであることや，その東側に墓域に伴う小堂と考えられる掘立柱建物跡が存在することから，墓壙の可能性が考えられる。調査区域の東部に分布する第28～32・34～36号土坑も，規模・形状・覆土の堆積状況が類似し，前者と同様に墓壙の可能性がある。第21～23号土坑は，形態が第20号土坑に類似しており，縄文時代の陥し穴の可能性がある。

ここでは，代表的な遺構をいくつか取り上げ，それ以外については一覧表及び実測図を掲載する。

第4号土坑（第74図）

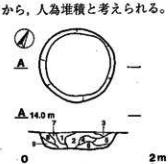
位置 調査区域の西部，B 7 e0 区。第5号土坑の西側0.6m，第6号土坑の北側0.5m に位置している。

規模と平面形 径1.15m ほどの円形で，深さ27cmである。底面は，平坦である。

壁面 ほぼ直立する。

覆土 9層からなる。ロームブロックを含み，ブロック状の堆積状況を示すことから，人為堆積と考えられる。

土層解説
1 暗 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
2 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
3 暗 褐 色 ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
4 極暗褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
5 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
6 暗 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック中量，ローム粒子少量
7 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
8 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
9 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

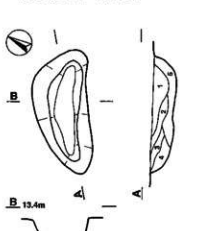


第74図 第4号土坑実測図

遺物 出土していない。

所見 本跡及び以下に記載する第5～10号土坑，第28～32号土坑は，径がほぼ1m の円形で，土層断面を観察すると埋め戻した痕跡が認められることから，近世の墓壙の可能性が考えられる。これらの土坑は，互いに0.3～1.3m の距離に位置し，近接するものの切り合っていないことから，互いに重複しないように意識して構築されたものと考えられる。また，深さが10～30cmで，墓跡としては掘り込みが浅い。現在の地表面から確認面までの深さが40～50cmあり，遺構の上半部が削平されてしまったことによるものと考えられる。詳細な時期は，遺構に伴う遺物が出土していないため明らかでない。

第21号土坑（第75図）



第75図　第21号土坑実測図

位置　調査区域の北西部，A８i4区。第20号土坑の南東側0.5m，第22号土坑の北側0.4mに位置している。

規模と平面形　長径1.90m，短径0.85mの楕円形，深さ72cmである。

長径方向　N－48°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　長径1.42m，短径0.31mの楕円形で，ほぼ平坦である。

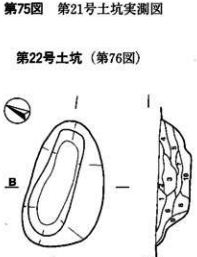
覆土　5層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色		ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2	暗褐色		ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
3	暗褐色		ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
4	暗褐色		ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック微量
5	褐	色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

所見　遺構の形態から，縄文時代の陥し穴の可能性が考えられる。詳細な時期は，遺物が出土していないため不明である。

第22号土坑（第76図）



第76図　第22号土坑実測図

位置　調査区域の北西部，A８j5区。第21号土坑の南側0.4m，第23号土坑の北側0.6mに位置している。

規模と平面形　長径1.95m，短径1.13mの楕円形で，深さ68cmである。

長径方向　N－70°－E

壁面　外傾して立ち上がる。

底面　長径1.34m，短径0.41mの楕円形で，ほぼ平坦である。

覆土　10層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1	黒褐色		ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色		ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
3	黒褐色		ローム小ブロック・ローム粒子少量
4	黒褐色		ローム中ブロック・ローム粒子少量
5	極暗褐色		ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
6	暗褐色		ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム中ブロック微量
7	暗	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック微量
8	暗褐色		ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
9	褐	色	ローム小ブロック・ローム粒子多量，ローム中ブロック少量
10	褐	色	ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

所見　遺構の形態から，縄文時代の陥し穴の可能性が考えられる。詳細な時期は，遺物が出土していないため不明である。

第23号土坑（第77図）

位置　調査区域の北西部，A８j4区。第22号土坑の南側0.6mに位置する。

規模と平面形　長径2.90m，短径1.27mの楕円形，深さ89cmである。

長径方向　N－32°－E

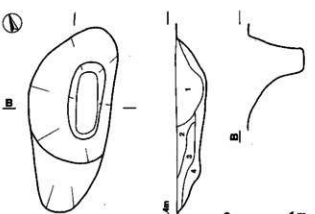
壁面　下半はほぼ直立し，底面から50cmの高さから上が外傾して立ち上がる。

底面　長径0.96m，短径0.33mの楕円形で，ほぼ平坦である。

覆土　4層からなる。レンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
4　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

所見　本跡は，遺構の形態から，縄文時代の陥し穴の可能性が考えられる。詳細な時期は，遺物が出土していないため不明である。



第77図　第23号土坑実測図

第49号土坑（第78図）

位置　調査区域の西部，B 7 a0 区。

重複関係　南部を第45号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長径1.50m，短径1.17mの楕円形，深さ90cmである。底面は，凹凸がある。

長径方向　N－59°－W

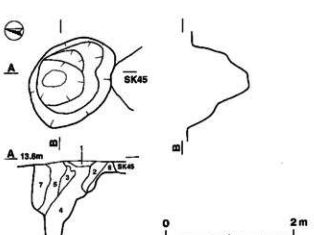
壁面　外傾して立ち上がる。

覆土　7層からなる。粘土粒子や砂粒を多く含み，ブロック状に堆積していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　粘土粒子中量，ローム小ブロック・ローム粒子・砂粒少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　粘土粒子多量，ローム小ブロック・ローム粒子・砂粒少量
3　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子少量
4　にぶい黄褐色　粘土粒子多量，ローム粒子少量
5　暗　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・粘土粒子少量，炭化粒子微量
6　灰　黄　褐　色　ローム粒子・粘土粒子中量，砂粒少量
7　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化粒子・粘土粒子微量

遺物　出土していない。

所見　本跡は，覆土に第1号粘土採掘坑で確認された黄灰色粘土粒子が多量に含まれていることから，窯材用に採掘された粘土の貯蔵施設の可能性がある。時期は，遺物が出土していないために断定できない。



第78図　第49号土坑実測図

以下に，上述した土坑を除く，特徴的な土坑について実測図及び土層解説を記載する。（第79・80図）

第5号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量
3　暗　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
4　黒　褐　色　ローム中ブロック中量

第6号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
2　極暗褐色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
4　黒　褐　色　ローム小ブロック・ローム粒子少量
5　黒　褐　色　ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量

第7号土坑土層解説
1 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 極暗褐色 ローム小ブロック中量,ローム中ブロック・ローム粒子少量
3 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量,ローム中ブロック少量
4 暗 褐 色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量

第8号土坑土層解説
1 黒 褐 色 ローム粒子少量
2 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
3 暗 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子中量,ローム中ブロック少量
4 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
5 極暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量,ローム小ブロック微量

第9号土坑土層解説
1 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 暗 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
3 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
4 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

第10号土坑土層解説
1 黒 褐 色 ローム粒子微量
2 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
3 極暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
4 黒 褐 色 ローム粒子少量
5 黒 褐 色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

第28号土坑土層解説
1 黒 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 黒 色 ローム粒子少量
3 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
4 黒 褐 色 ローム粒子中量,ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

第29号土坑土層解説
1 黒 褐 色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
2 黒 褐 色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
3 黒 褐 色 ローム小ブロック中量,ローム中ブロック・ローム粒子少量
4 暗 褐 色 ローム粒子多量,ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
5 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量
6 黒 色 ローム粒子少量

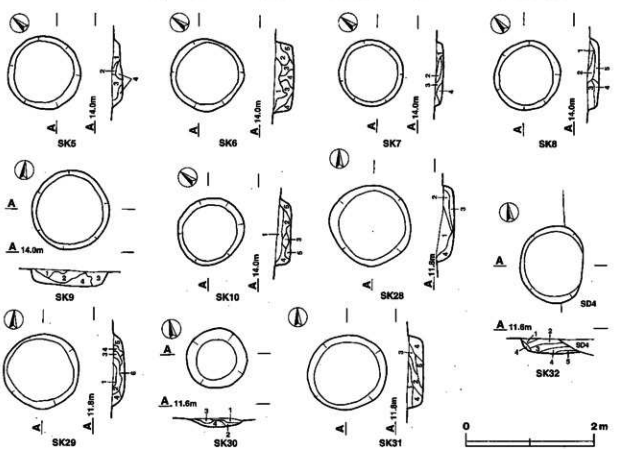
第30号土坑土層解説
1 暗 褐 色 ローム中ブロック中量, ローム中ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
2 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
3 暗 褐 色 ローム粒子中量,ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4 極暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量

第31号土坑土層解説
1 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 黒 褐 色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
3 黒 色 ローム粒子微量
4 黒 褐 色 ローム粒子中量,ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
5 黒 褐 色 ローム粒子中量,ローム大ブロック・ローム小ブロック少量

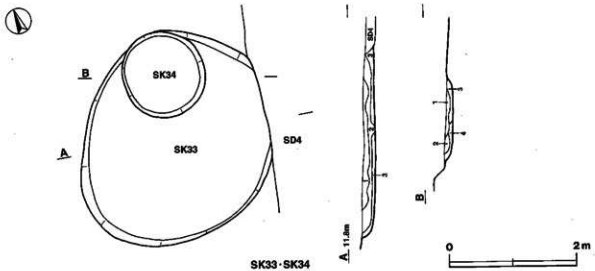
第32号土坑土層解説
1 暗 褐 色 ローム小ブロック中量,ローム中ブロック・ローム粒子少量
2 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
3 暗 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
4 極暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
5 暗 褐 色 ローム中ブロック中量,ローム小ブロック・ローム粒子少量

第33号土坑土層解説
1 黒 色 ローム粒子少量
2 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3 暗 褐 色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 粘土粒子少量

第34号土坑土層解説
1 黒 褐 色 ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
2 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量
3 黒 褐 色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
4 黒 褐 色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子少量



第79図 その他の土坑実測図(1)



第80図　その他の土坑実測図(2)

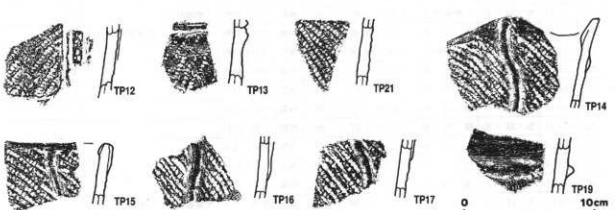
表4　鳥名前野遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向(長軸方向)	平面形	規模 長径(m)×短径(m)	規模 深さ(cm)	立ち上がり面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
1	B8a7	N－12°－E	不定形	1.25 × 0.70	60	外傾	凹凸	自然		SI14→本跡
2	B8a7	N－13°－E	不定形	2.40 × 0.80	57	緩斜	平坦	自然	土師器片3	SI6→本跡
3	A8e7	N－15°－E	隅丸長方形	1.60 × 0.75	27	外傾	平坦	人為		SI13→本跡
4	B7e0	－	円形	1.15 × 1.12	27	直立	平坦	人為		
5	B7e0	－	円形	1.17 × 1.13	17	直立	平坦	人為	土師器片1	
6	B7f0	－	円形	1.13 × 1.13	30	直立	平坦	人為	土師器片3	
7	B7f0	－	円形	1.05 × 1.02	10	直立	平坦	人為		
8	B7f0	－	円形	1.10 × 1.00	13	直立	平坦	人為		
9	B7f0	－	円形	1.23 × 1.20	20	直立	平坦	人為	土師器片1	
10	B7g0	－	円形	1.10 × 1.00	15	直立	平坦	人為	土師器片2	
11	A7i6	N－50°－E	隅丸長方形	1.24 × 0.80	15	外傾	平坦	人為		
12	A7f6	N－27°－W	隅丸長方形	1.35 × 1.05	50	直立	平坦	人為	土師器片37	SI2→本跡
13	A7g6	N－80°－E	隅丸長方形	1.30 × 1.10	55	直立	平坦	人為	土師器片11	
14	A7g7	N－7°－W	楕円形	1.18 × 0.95	29	外傾	凹凸	人為	土師器片35	SK15→本跡
15	A7g7	N－88°－E	[隅丸長方形]	2.41 × 1.68	31	外傾	凹凸	人為	土師器片88	SK19→本跡→SK14
16	A7f7	－	円形	1.25 × 1.22	52	外傾	平坦	人為	土師器片14	
17	A7f7	N－30°－E	不整楕円形	2.93 × 1.95	33	緩斜	凹凸	自然	土師器片27	
18	A7g8	N－87°－E	楕円形	1.47 × 1.08	30	外傾	平坦	自然	土師器片15，須恵器片2	
19	A7h8	N－7°－W	隅丸方形・隅丸長方形	0.78 ×(0.68)	17	外傾	平坦	自然	土師器片1	
20	A8i4	N－50°－E	楕円形	2.41 × 1.10	78	外傾	皿状	自然	縄文土器片6	本跡→SI8
21	A8i4	N－48°－E	楕円形	1.90 × 0.85	72	外傾	平坦	自然		
22	A8j5	N－70°－E	楕円形	1.95 × 1.13	68	外傾	平坦	自然		
23	A8j4	N－32°－E	楕円形	2.90 × 1.27	89	外傾	平坦	自然		
24	A9h3	N－6°－W	不定形	0.82 × 0.68	16	外傾	平坦	人為		本跡→SI19
25	A8i6	－	円形	0.73 × 0.67	48	外傾	平坦	自然	土師器片3	
26	A8h6	N－62°－E	楕円形	1.10 × 0.80	23	外傾	平坦	人為	土師器片7	
27	A8h5	N－73°－E	楕円形	0.55 × 0.38	25	緩斜	皿状	人為	土師器片1，須恵器片1	
28	B9a6	－	円形	1.30 × 1.26	18	外傾	平坦	人為		
29	B9d7	－	円形	1.20 × 1.18	18	外傾	平坦	人為		

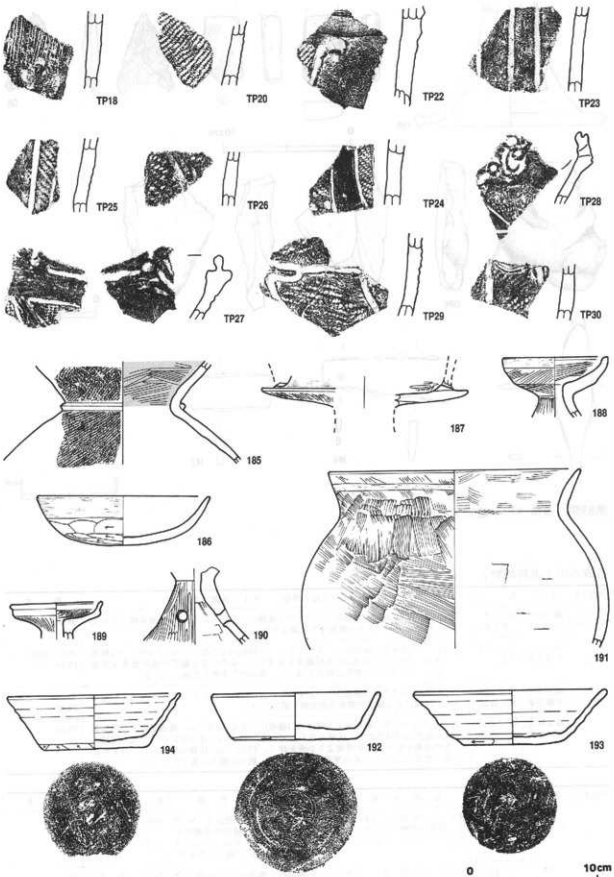
土坑番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模 長径(m)×短径(m)	規模 深さ(cm)	立ち上がり面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
30	B9d8	−	円形	0.92 × 0.90	10	緩斜	皿状	人為		
31	B9d7	−	円形	1.25 × 1.16	23	外傾	平坦	人為		
32	B9i7	−	楕円形	1.20 × 1.00	20	外傾	皿状	人為		本跡→SD 4
33	B9i7	N−85°−W	楕円形	3.34 × 2.90	24	外傾	平坦	人為		本跡→SK34, SD 4
34	B9f7	−	円形	1.34 × 1.30	26	外傾	皿状	人為		SK33→本跡
35	B9g6	−	楕円形	1.50 × 1.26	8	緩斜	皿状	人為		
36	A9j6	−	円形	1.70 × 1.62	33	外傾	平坦	人為	縄文土器片1，土師器片5	
37	B9c4	−	円形	1.32 × 1.32	24	外傾	平坦	人為	土師器片7，須恵器片2	SK55→SI21→本跡
38	A9g4	N−1°−W	楕円形	1.68 × 0.62	10	外傾	平坦	人為		
39	A8h0	N−10°−W	隅丸長方形	1.12 × 0.90	15	緩斜	皿状	人為	土師器片2，須恵器片1	
40A	A9g1	N−7°−W	楕円形	1.52 × 0.75	10	緩斜	傾斜	人為		SK40B→本跡
40B	A9g1	N−12°−E	楕円形	1.13 × 0.75	8	緩斜	平坦	人為		本跡→SK40A
42	A8h0	−	円形	0.80 × 0.75	16	外傾	平坦	人為		
43	B8d7	N−5°−E	隅丸長方形	2.25 × 0.73	7	外傾	平坦	人為		
44	B9g3	N−39°−E	楕円形	2.15 × 1.35	40	直立	傾斜	人為	縄文土器片3，土師器片3	
45	B7a0	N−46°−W	隅丸長方形	1.28 × 1.00	17	直立	平坦	人為		SK49→本跡
46	B7a9	N−60°−E	不定形	0.75 × 0.73	50	直立	凹凸	人為		
47	A8g8	N−8°−W	楕円形	1.25 × 0.60	7	緩斜	皿状	人為		
48	B8d3	N−4°−E	楕円形	1.90 × 0.92	6	外傾	平坦	自然		
49	B7a0	N−59°−W	楕円形	1.50 × 1.17	90	外傾	凹凸	人為		本跡→SK45
50	B8i7	−	円形	0.65 × 0.65	5	外傾	平坦	自然	土師器片3	
51	B8i7	N−12°−W	楕円形	1.90 × 0.75	4	外傾	平坦	自然	土師器片9，須恵器片1	
52	B8h8	N−5°−E	楕円形	2.52 × 0.73	5	外傾	傾斜	自然	縄文土器片3,土師器片21,須恵器片16	
53	B8g8	N−12°−W	楕円形	1.15 × 1.02	15	緩斜	皿状	自然		
54	B8i7	N−13°−W	楕円形	2.44 × 1.00	5	外傾	傾斜	自然	土師器片2，須恵器片3	
55	B9c3	−	[円形]	1.25 ×(0.65)	40	外傾	平坦	人為		本跡→SI21→SK37
56	C8c2	N−9°−W	楕円形	0.57 × 0.50	20	外傾	凹凸	人為	土師器片7，須恵器片2	

5　遺構外出土遺物

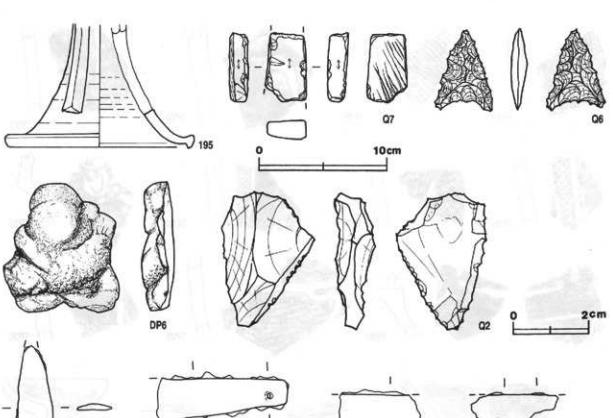
今回の調査で，遺構に伴わない旧石器時代から近世にかけての遺物が出土している。ここでは，これらの出土遺物のうち特徴的なものについて掲載する。



第81図　遺構外出土遺物実測図(1)



第82図　遺構外出土遺物実測図(2)



第83図　遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表

図版番号	時　期	形　式	器形及び文様の特徴　　胎土・色調・焼成	備　考
TP12・13・21	縄文時代中期中葉	阿玉台Ⅱ～Ⅳ式特行	TP12・13・21は深鉢の胴部片で、いずれも直線的に立ち上がる。RLの単節縄文を地文とし、隆帯に沿って2列の結節平行沈線文を施している。	第81図 PL19・20
TP14～19	縄文時代中期後葉	加曽利EⅠ式	TP14・15は深鉢の口縁部片で、波状を呈し、口唇部内面が肥厚する。TP16～19は胴部片である。TP14～17はRLの単節縄文を地文とし、隆帯による縦位の波状壁垂文を施している。TP18・19は横位の隆帯を巡らし、櫛歯状の条線文を施している。	第81・82図 PL19・20
TP20・22～26	縄文時代中期後葉	加曽利EⅡ～Ⅲ式	TP20・22～26は深鉢の胴部片で、いずれも直線的に立ち上がる。LRの単節縄文を地文とし、沈線による幅広の懸垂文間を磨り消している。	第82図 PL20
TP27～30	縄文時代後期前葉	堀ノ内Ⅰ式	TP27・28は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部片である。TP27は、波頂部直下の円形刺突文を起点に口唇部直下に沈線を巡らしている。TP28は、波頂部に空いた孔の周縁に1条の沈線が巡り、円形刺突文3か所を伴う。TP29・30は深鉢の胴部片で、わずかに内弯して立ち上がり、LRの単節縄文を地文に、蛇行沈線文が施されている。	PL20

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
185	壺 弥生土器	B（8.1）	体部から口縁部中位にかけての破片。体部は内弯して立ち上がり、頸部でくの字状に屈曲する。	口縁部・胴部外面に附加条一種（附加2条）の縄文。口縁部内面横位のヘラ磨き。頸部に断面三角形の隆帯を貼り付ける。口縁部内面赤彩。	砂粒・赤色粒子 にぶい橙色 普通	第82図 PL18 5%
186	坏 土師器	A　13.7 B　4.0	口縁部一部欠損。丸底。底部から内弯して立ち上がり、口縁部に至る。端部はわずかに外反する。	口縁部内・外面、体部内面横ナデ。底部外面不定方向のヘラ削り。底部内面中央ナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 灰黄褐色、普通	PL18 80%

図版番号	器　種	計測値(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
187	装飾高坏 土師器	B（2.5）	坏部の破片。坏部下位に装飾の突帯をもち，中位に透かし孔が空く。	坏部外面縦位のヘラ磨き，内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・石英・長石・雲母，褐灰色，普通	第82図 PL18 10%
188	器　台 土師器	A　8.4 B（4.7） E（1.6）	脚部一部欠損。脚部はハの字状に開く。器受部は下位に稜をもち，内湾して立ち上がる。口縁部は外傾する。器受部中央は穿孔されている。	口縁部内・外面横ナデ。器受部内・外面横位のヘラ磨き。脚部外面縦位のヘラ磨き，内面ナデ。	砂粒・石英・長石・赤色粒子 橙色 普通	PL18 50%
189	器　台 土師器	A［7.2］ B（2.9）	器受部の破片。器受部は内湾して立ち上がり，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外上方へつまみ上げられている。器受け部中央は穿孔されている。	口縁部内・外面横ナデ。器受け部外面縦位のヘラ磨き，内面放射状のヘラ磨き。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通	PL18 30%
190	器　台 土師器	E（6.0）	脚部片。脚部はハの字状に開き，中位に円形の透かし孔4か所が空く。器受部中央は穿孔されている。	脚部外面縦位のヘラ磨き，内面横位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石 明赤褐色 普通	PL18 25%
191	壺 土師器	A［19.8］ B（14.0）	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり，頸部でくの字状に屈曲し，口縁部は外傾する。	口縁部内・外面ハケ目調整後，横ナデ。体部外面縦位のハケ目調整，内面横位のヘラナデ。	砂粒・雲母・赤色粒子 にぶい赤褐色 普通	PL18 20%
192	坏 須恵器	A［13.3］ B　3.7 C　9.6	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。ロクロ目弱い。体部下端回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰黄色，良好	PL18 70%
193	坏 須恵器	A［15.1］ B　4.2 C　7.7	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端ヘラ削り後，ナデ。底部1方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 黄灰色，普通	PL18 70%
194	坏 須恵器	A［13.6］ B　4.2 C　8.0	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり，口縁部に至る。	口縁部，体部内・外面ロクロナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部2方向のヘラ削り。	砂粒・石英・長石・雲母 褐灰色，普通	60%
195	高　坏 須恵器	D［14.5］ E（9.7）	脚部の破片。脚部はハの字状に開き，中位に長方形の透かし孔を穿つ。裾部は屈曲し垂下する。	脚部内・外面ロクロナデ。透かし孔はヘラ切り。	砂粒・石英・長石・雲母 灰白色，普通	第83図 PL18 20%

遺物番号	器　種	計測値				特　徴	胎土・色調	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
DP6	泥面子	3.3	3.1	0.9	6.5	七福神(恵比寿)	長石，にぶい赤褐色	第83図，PL18，100%

遺物番号	器　種	計測値				材　質	特　徴	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q2	剥　片	3.6	2.4	0.9	6.4	瑪　瑙	自然面打面の剥片	第83図，PL19
Q6	石　鏃	2.1	1.5	0.4	0.8	黒曜石	両面押圧剥離の左右対称形，無茎	PL19
Q7	砥　石	(5.5)	3.3	1.5	(39.3)	凝灰岩	砥面4面，うち1面に11条の線刻有，研磨に使用か	PL19

遺物番号	器　種	計測値							材質	特　徴	備　考
		全長(cm)	刃身長(cm)	刃身幅(cm)	茎部長(cm)	茎最部幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
M1	鏃	(8.1)	(5.5)	(1.9)	(2.6)	(0.9)	(0.3)	(12.1)	鉄	鏃身から茎最の破片，柳葉式	第83図，PL19

遺物番号	器　種	計測値						材　質	特　徴	備　考
		全長(cm)	刀身長(cm)	身幅(cm)	重ね(cm)	茎長(cm)	重量(g)			
M2	刀　子	(4.3)	(4.3)	(1.7)	(0.4)	−	(9.9)	鉄	刃部の破片	第83図，PL19
M3	刀　子	(4.5)	(3.4)	(1.5)	(0.4)	(1.1)	(7.1)	鉄	刃部から茎部の破片	PL19
M4	小　刀	(6.9)	−	−	−	(6.9)	(22.5)	鉄	茎部の破片，目釘穴有	PL19

第4節　ま　と　め

今回の調査で，旧石器時代から近世までの遺構や遺物が検出され，東谷田川流域における先人の生活の一端について解明することができた。ここでは，時代ごとに調査の結果を整理し，まとめとしたい。

1　旧石器時代から弥生時代まで

旧石器時代の遺物としては，剥片1点が表土から出土しているだけである。石質は瑪瑙である。

縄文時代の遺構としては，形態から陥し穴と考えられる土坑4基を確認した。第20号土坑の覆土中層から，阿玉台式期の土器片が少量出土している。壁がほぼ直立していて崩れが早く，覆土が堆積しやすいことを考慮して，時期を出土土器とほぼ同時期の中期中葉と判断した。第21～23号土坑については，遺物が出土していないものの，第20号土坑の南側にほぼ50cmの間隔で確認され，形態も類似していることから，同時期の陥し穴の可能性が高い。竪穴住居跡は確認されなかったが，遺構外から阿玉台式期・加曽利E式期・堀ノ内式期の土器片，及び黒曜石製の石鏃が出土している。以上のことから，中期中葉から後期前葉にかけてわずかながら人々の生活の痕跡をうかがうことができ，主に狩猟の場であったと推測される。

弥生時代の遺物としては，後期に属する南関東系の壺の体部から口縁部にかけての破片が遺構外から出土している。これまで，東谷田川流域における弥生時代の遺構の調査例は少なかったが，新たに土器片が確認されたことによって，今後，弥生時代の遺構がさらに確認される可能性が高まったといえる。

2　古墳時代

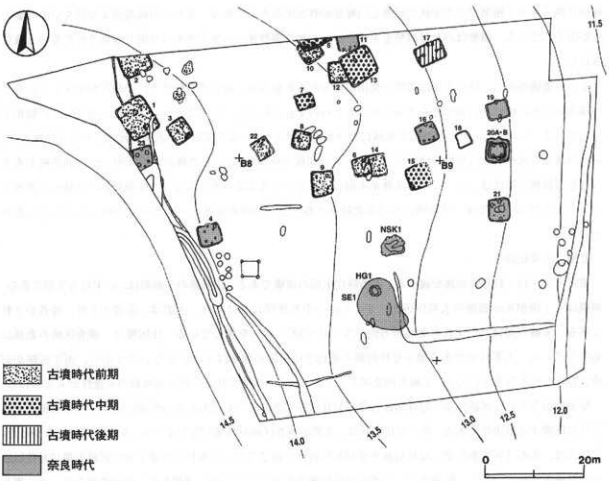
当遺跡において，初めて集落が形成された時期である。当遺跡で最も多くの遺構が確認されている。この時代の遺構としては，竪穴住居跡15軒，土坑4基が確認されている。遺構は調査区域北部を中心に分布しており，さらに北方・西方へ集落が広がっていることが予想される。出土土器から推定できる住居跡の所属時期の内訳は，前期10軒，中期4軒，後期1軒である。

Ⅰ期（4世紀中頃）

第1～3・6・8～10・12・14・22号住居跡，第15・17・19・56号土坑が属する。古墳時代前期の遺構である。第1・3・14号住居跡は，覆土が薄いために出土土器が少なく，住居跡単体での時期判断は困難であるが，前葉あるいは後葉に比定される遺構が検出されていないことや，遺構外から出土した土器についても同様のことがいえることから，中葉に属するものと判断した。

住居跡の平面形は，長軸と短軸の差がない方形を呈するものが主体である。規模は，1辺が6m前後の大形住居と，3～4mの小形住居に分けられ，前者が2軒に対して後者が7軒と優越する。大形住居である第1号住居跡と第2号住居跡の間隔は3.5mしかなく，壁外に周堤を想定した場合，両住居跡の間隔はさらに短くなり，「火災時における延焼をさけるという防火対策」の面から住居間の距離は20m以上離れていたという論説[1]もあることから，両住居跡が同時に存在したとは考えにくい。主軸方向を同じくすることから，立て替えに伴う小移動の可能性が考えられる。両住居跡の新旧関係については，第1号住居跡の出土遺物が少ないために不明である。小形住居については，第6号住居跡と第14号住居跡が重複していることから，大形住居の立て替えに伴って2期に分かれるものと想定されるが，主軸方向に統一性が見られず，現時点では集落を2期に分けて考えることは困難である。

炉はいずれも床面を浅く掘りくぼめた地床炉であり，中央部に付設された第8号住居跡を除き，住居の北部，



第84図　島名前野遺跡集落変遷図

あるいは北東部に設けられている。最も多くの土器が出土した第9号住居跡からは，炉が検出されていない。壁際の床面から，煤が付着し，煮炊きに使用されたと考えられる甕4点が出土していることから，同住居跡は屋外炉を有していたか，あるいは倉庫的な役割を担っていたものと考えられる。貯蔵穴を有する住居跡は5軒あり，いずれも出入り口に近い南東部あるいは東部のコーナー寄りに位置している。第3・10号住居跡の貯蔵穴の周囲には，貼床と同様の土で突き固められた高まりが巡っている。高まりの上面が平坦で，高さが均一であることから，「木製の蓋をのせ，床面と一体化させていた」[9]可能性が考えられる。

床面の硬化した部分が確認できた住居跡はわずかに5軒で，第1・6・8・9号住居跡からは踏み固められた痕跡が検出されなかった。これらの住居跡の床面は湿気を帯びた軟弱な床質であり，調査中においても，貯蔵穴や主柱穴の中位まで湧水したような状況である。当時の湧水位が現在より低かったとしても，湿気を多分に含んでいたことは十分に想定され，柱材の腐朽は一般に考えられている以上に早かったものと考えられる。当遺跡から東へ約100mの位置に東谷田川が流れており，水利の便は良かったものの，低地にあることから定住するには湿気を防ぐための何らかの工夫が必要だったと考えられる。

土器は，椀・高坏・器台・坩・壺・甕・台付甕で構成されている。高坏は，元屋敷系高坏や脚部が大きくラッパ状に開く小形高坏が出土している。器台は，脚部が高い小形器台が主体で，受け部が丸みをもつものや端部をつまみ上げたものなどがある。甕は，体部が球形を呈するものが主体で，頸部や口縁部の形態によって分類が可能である。頸部で緩やかに屈曲し口縁部が外反するものと，頸部でくの字状に屈曲し口縁部が外上方へ直

線的に開くもの，頸部でくの字状に屈曲し口縁部が外反するものである。また，口縁端部が波状を呈する甕1点が出土している。調整はハケ目調整を主体とし，ハケ目調整後にヘラナデやヘラ削りが施されたものも散見される。

また，遺構外から，坏部下端に鍔状の突出が見られる装飾高坏（器台の可能性有）の破片が出土している。口縁部の下部に楕円形の透かし孔とみられる大きめの穿孔が行われていることから，前期の中でも古い様相を呈している[5]といえる。東・西谷田川流域における出土例として，境松遺跡[6]の前期に比定される住居跡から，同様の透かし孔を有する装飾器台が出土している。利根川章彦氏は，「この種の土器は明らかに別系統と考えられる少数例を除けば，ほとんどを北陸系土器の系譜として考えるべきであることを積極的に評価しておきたい。」[3]としており，今後，当地域における北陸系土器の受容の問題を考える上での好資料となるものと思われる。

Ⅱ期（5世紀前半）

第5・7・13・15号住居跡が属する。古墳時代中期の遺構である。住居跡の平面形は，いずれも方形である。規模は，1辺が6m前後の大形住居と，3～4mの小形住居に分けられ，内訳は，前者が2軒，後者が2軒である。主軸方向は，いずれも北北西方向（N－15～32°－W）を指している。住居跡は，調査区域の北部に集中している。大形住居である第5号住居跡と第13号住居跡の間隔は4mしかないことから，両住居跡が同時に存在したとは考えにくい。主軸方向を同じくすることから，立て替えに伴う小移動の可能性が考えられる。

炉が検出された住居跡は第7号住居跡と第13号住居跡であり，それぞれ住居中央部の東寄り，中央部の北西寄りに位置する地床炉である。第5号住居跡は，北部が調査区域外に延びているため，炉は確認できなかった。主柱穴は，大形住居である第5号住居跡と第13号住居跡で確認され，小形住居の第7号住居跡や第15号住居跡からは検出されていない。貯蔵穴は，いずれの住居跡でも出入り口に近い南部あるいは南東部のコーナー寄りに付設されている。

土器は，高坏・坩・甕・甑で構成されている。高坏は，坏部と脚部の接合がソケット状を呈している。調整は，坏部はハケ目調整後にナデが施され，脚部は縦方向のヘラ磨きが施されている。坩は，口径と体部径がほぼ等しく，体部が球形を呈するものや，算盤玉状を呈するものがある。甕は，底部が突出し，調整は体部外面にヘラナデやヘラ削り調整，内面にハケ目調整が施されるものが多い。甑は出土数が少なく，折り返し口縁の鉢形甑の口縁部片1点のみが出土している。

Ⅲ期（7世紀後半）

第17号住居跡が属する。古墳時代後期の遺構である。確認された住居跡は1軒だけであるが，本跡が調査区域の北部際に位置することや，当遺跡の西側に隣接する島名前野東遺跡から，同時期と考えられる遺構が検出されていることから，該期の遺構がさらに西方あるいは北方に広がっている可能性がある。

本跡は，長軸が短軸の1.5倍という横長で，南西壁と北東壁の中央部を結ぶライン上から主柱穴2カ所が確認されており，他の住居跡とは様相を異にしている。さらに，主柱穴と壁をつなぐように，同じライン上からそれぞれ長さ110cmと112cm，上幅12cmと19cm，下幅4cmと11cm，深さ5cmと8cmの溝2条が検出された。「主柱穴と壁溝をつなぐ柱壁間溝によって，屋内を区分」[6]したものと考えられ，住居中央部が硬化した床で，溝によって仕切られた部分が軟質な床であることから，生活空間を使い分けていた様子がうかがわれる。

出土した土器はいずれも土師器で，坏・甕・甑・ミニチュア土器で構成されている。坏は1点だけで，径12.8cmの小形のもので，口縁部が短く直立している。甕は長胴化し，底径が大きく安定感がある。口縁端部をわずかにつまみ上げられたものも1点あり，常総型甕の影響がうかがえる。調整は，ヘラナデやヘラ削りを主

体としており，体部下位にヘラ磨きが施されたものも認められる。甑は，体部と口縁部との境にくびれを持たず，体部からそのまま外反する。須恵器は共伴していない。

以上のように，古墳時代には，4世紀中葉，5世紀前葉，7世紀後葉と3期に集落が営まれていたことが確認できた。当該期の住居跡は，南部の埋没谷をさけるように，調査区域北部及び北西部に集中している。集落は，さらに調査区域の北側，あるいは北西側に広がっていたことが想定され，より大きな集落であった可能性が考えられる。事実，当遺跡の西側に隣接する鳥名前野東遺跡からは，遺構として方形周溝状遺構や竪穴住居跡，遺物として土師器や石製模造品が検出されるなど，古墳時代前期から中期・後期にかけての集落跡が広がっていることが確認されており，当遺跡との関連がうかがわれる。鳥名前野東遺跡は現在調査中であり，今後の調査の成果をふまえて集落の変遷を探っていきたい。

3　奈良時代

第4・11・16・19・20A・20B・21・23号住居跡，第1号井戸跡，第1号粘土採掘坑，第1号遺物包含層が属する。これらの遺構は，いずれも出土土器から8世紀中葉から後葉に比定されることから，同時に存在した可能性が高く，律令期の集落の様相を考える上での好資料といえる。

住居跡の平面形は，いずれも方形である。規模は，1辺4.0～4.5mの小形住居を主体とし，第20B号住居跡だけが1辺3.0mの小規模の住居である。第20B号住居跡は，第20A号住居跡に拡張された可能性が高いことから，第20A号住居跡に建て替えられた時期には，いずれの住居も同じ規模を有していたことになる。主軸方向は，N－14～17°－Wに振れるものが主体である。第20A・20B・21号住居跡だけが，N－0～3°－Eを指す。内部施設は，いずれも北壁中央部に竈を持ち，対する南壁中央部の壁際に出入り口施設に伴うピットを有している。第19号住居跡を除き，主柱穴4か所を規則的に各コーナー寄りに配していることも，特徴として挙げられる。柱間寸法は，いずれも2.0m前後で一致している。第19号住居跡からは，主柱穴が検出されていない。さらに，竈の両袖を挟むようにピットが存在する住居跡が2軒，竈脇に貯蔵穴を有する住居跡が3軒確認されている。

住居跡は，南部に広がる埋没谷をさけるように，調査区域の西部から北部，東部にかけて分布しており，西側から第4・23・11・16・19・20A（B）・21号住居跡の順に並んでいる。注目されるのは，これらの住居跡が南部を除いて径55mほどの円形に位置していることである。住居間の距離は，それぞれ15m，42m，19m，10m，4m，7mである。第23号住居跡と第11号住居跡の間隔が42mと離れていることから，北西部の調査区域外にさらに竪穴住居跡が存在するか，あるいは両住居跡を境に二つの集落に分かれる可能性が考えられる。一方，第19号住居跡と第20A（B）号住居跡の間隔は，4mと狭い。第19号住居跡からは主柱穴が検出されず，他の住居跡と異なる住居形態をとることと考え併せると，集落内において特異な感を受ける。

さらに，住居跡が存在しない調査区域南部から，第1号井戸跡，第1号粘土採掘坑，第1号遺物包含層が確認されている。これらの遺構は，黒色土が堆積する埋没谷との境に位置している。

第1号遺物包含層は，集落の最南端に位置している。土器は，東西約10m，南北約7m，厚さ30cmにわたって確認されている。土層断面に人為的に掘り込んだ形跡が見られないことや，出土した土器の破断面が鋭利なことから，南側に傾斜する自然地形を利用して，破損等の理由から不必要となった土器を集落のはずれに捨てたものと考えられる。土器と共にそれ以外の不要物も捨てられた可能性が考えられるが，おそらく腐食したことにより，その痕跡をとどめていないものと思われる。出土した土器片の総数は2400点を超えており，当該期の住居跡1軒あたりの出土土器の平均数が94.7点であることから，単独の住居から投棄された土器の量とは考

えにくく，むしろ集落に付随した「土器捨て場」であったと判断できる。集落との関わりを裏付けるように，本跡から出土した須恵器片の一部と，直線距離にして35m 離れた第20A号住居跡から出土した土器が接合関係にあることが確認されている。また，第1号遺物包含層の最下層からは，東西3.5m，南北5.0m の広い範囲にわたって，砂粒や粘土粒子が確認されている。これらは，焼土や炭化物を含むことから，竈からかき出されたものや，竈の作り替えに伴って不要となった竈材が投棄されたものと考えられる。特に，第20B号住居跡の竈は，第20A号住居跡へと拡張される際に壊されたと推測できることから，この砂粒や粘土粒子の中に第20B号住居跡の竈材が含まれている可能性が考えられる。

第1号井戸跡は，第1号遺物包含層の西北部の下面から検出されている。井戸跡の東側からは硬化面が確認されており，当時の諸作業が行われた際に踏み固められたものと推測される。硬化面が南側へ傾斜していることや，その南側に埋没谷が広がっていることから，排水の便が良く，作業しやすい環境だったことは想像に難くない。推測の域を脱しないが，作業に伴って出された不要物が，そのまま埋没谷へ捨てられたことも考えられる。また，井戸跡は，本跡以外に確認されていないことや東谷田川が当遺跡から100m 離れていることから，集落を営む際に必要な水のほとんどは，この井戸でまかなわれていたものと考えられる。土層断面を観察すると，第1号井戸跡は人為的に埋め戻されており，出土した土器が住居跡から出土したものとほぼ同時期と判断できることから，井戸の廃絶の時期は集落移転と同時だった可能性が高い。さらに，第1号遺物包含層は，埋め戻された井戸跡の上部にも形成されていることから，井戸跡周辺では，井戸の廃絶と不要となった土器の投棄が一連の作業の中で行われたと考えられる。

第1号粘土採掘坑は，井戸跡の北側15m の距離に位置している。黄灰色粘土層を掘り込んでおり，東壁際には，採掘の際の昇降に利用したと考えられる階段状の段差が確認されている。規模は，長径4.65m，短径3.65m，深さ0.88m で，一つの集落に必要な粘土の量は十分にまかなえたものと推測される。さらに，第4号住居跡の北側10m，第23号住居跡の東側13m の距離に位置する第49号土坑は，覆土に第1号粘土採掘坑で確認された黄灰色粘土粒子を多量に含んでいることから，竈材用の粘土の貯蔵施設の可能性が考えられる。

奈良時代の土器は，坏・高台付坏・盤・高盤・長頸瓶・短頸壺・甕・鉢・甑で構成されている。坏は須恵器が主体で，口径が14cm前後，底径が8 cm前後，器高が4 cm前後の平底のものが大半を占め，中には口径が10cm，底径が7 cm，器高が3 cmほどの小形のものも見られる。口径に比して底径の比率が大きく，器高が低いのが特徴である。底部の調整は，回転ヘラ削りと手持ちヘラ削りが確認できる。体部下端の調整については，おおむね手持ちヘラ削り調整，手持ちヘラ削り後ナデ調整，無調整に分類することができる。須恵器盤は，高台が付くものと無台のものが出土している。須恵器甕・鉢・甑は，体部外面に横位の平行叩き，下位に横位のヘラ削りが施されており，口縁端部のつまみ上げはほとんどない。土師器甕は，常総型が主流で，口縁端部がつまみ上げられ，体部下位に縦位のヘラ磨きが施されている。口縁端部外面に沈線1条が巡るものも見られる。高盤，長頸瓶，短頸壺は，いずれも1点のみの出土である。腰帯具や硯といった身分や役職を表す遺物は出土していない。

時期については，8世紀中葉及び後葉に比定される土器が大半を占め，9世紀に比定されるものは出土していない。遺構外から出土した土器についても同様のことがいえる。このことから，該期の集落は8世紀中葉から営まれ，遅くとも8世紀末葉には終焉を迎えたものと考えられる。

以上のように，遺構の配置や出土した土器の様相から集落を観察すると，それぞれの住居は自立性を強く持っていたとは考えにくく，互いに結びついた生活共同体であったと判断できる。住居群を一つの集落とみなした場合，中央に広場を有し，それを囲むように西部から北部・東部にかけて規模や主軸方向を同じくする住居群

が位置し，南部には井戸や粘土採掘坑，遺物包含層（土器捨て場）が位置するという景観が想定でき，それぞれの遺構が互いに有機的に結びついていた様子をうかがうことができる。さらに，集落の出現，消滅にやや唐突な感があることや，中央に広場を持つ環状の集落形態をとることから，当集落はいわゆる「計画村落」的な様相を呈しているともいえる。律令制下において，「戸令」では，郡の下に里が設定され，里は50戸を基準に編成されるとされ，一般に1戸は20～30人程度とみなされている。当該期の集落をこの1戸と想定した場合，東部の住居群の配置にやや不安定な様子が見られることから，土器の同一形式内での建て替えや小移動があったことを考慮しても，5～8軒のまとまりで集落をとらえることができ，集落内の人数としてほぼ妥当な数字になるものと思われる。以上のように，当遺跡の集落には，律令体制における最小の単位集団の生活の場としての姿を垣間見ることができる。

これらの住居群を二つの集落とみなした場合には，西部の住居跡2軒，北部から東部にかけての住居跡5軒の集落に分けることが可能である。西部の住居群は，調査区域の西部際に位置することから，これらの住居跡が所属する集落は，さらに西方に広がっているものと考えられる。二つの集落は，同時に存在した場合と，一つの集落が小移動した場合が想定されるが，そのいずれかを断定するには，調査区域の西側の遺構確認が必要である。少なくとも，前述した井戸跡や遺物包含層が，出土土器の接合関係から，東側の集落と密接に結びついていることが明らかであり，東側の集落を律令制下における最小の単位集団としてとらえることができよう。

その後，集落は，9世紀を待たずに終焉を迎えている。集団で移転したものと考えられるが，その要因を探る手がかりは，現在のところつかめていない。水分の多い地盤という自然環境の影響を受けて，より高所へ移動したことも考えられる。いずれにしても，9世紀以降，住居は構築されず，当遺跡における集落の変遷は，奈良時代をもって終わりを告げる。

当遺跡からは，この時代に比定される掘立柱建物跡は確認されていない。未報告ではあるが，隣接する島名前野東遺跡から，同時期に比定されると思われる大形の竪穴住居跡と軸方向を同じくする複数の掘立柱建物跡が検出されており，当遺跡との関連がうかがわれる。島名前野東遺跡は現在調査中であり，今後の調査の成果に期待したい。そして，当遺跡で集落を営んでいた人々がその後何処へ移動していったのか，周辺地域の調査が進むにつれ，やがて解明されていくものと思われる。

4　近世以降

中世の遺構・遺物は確認されていない。近世では墓壙の可能性がある土坑が，調査区域西部から7基，東部から8基確認されている。いずれも径1.0～1.3mほどの円形で，人為的に埋め戻された痕跡がある。調査区域西部の土坑群に隣接して，墓域に伴う小堂と考えられる掘立柱建物跡1棟も検出されていることから，当遺跡は近世においては墓域であったと推測される。また，調査区域中央部からは，最近の畑地の畝境と一致する第6号溝跡が検出されていることや，遺構外から畑作に関係するとされる泥面子が出土していることから，畑地として利用された様子もうかがえる。

今回の調査の結果，当遺跡は，古墳時代及び奈良時代の集落跡を中心とする複合遺跡であることが確認された。旧石器時代・縄文時代・弥生時代は，遺構・遺物がわずかながら確認されたことから，当遺跡周辺に人々が生活していた痕跡がうかがえる。古墳時代に入ると，本格的に人々の生活が開始され，奈良時代まで断続的に集落が形成される。当時の人々が，東谷田川に隣接し，水資源が豊かで平坦なこの地を求めて移り住んできたことは想像に難くない。しかし，水分の多い地盤という自然環境の影響からか，集落はいずれも断続的であ

り，奈良時代の集落を最後に，人々の生活の痕跡は薄れ，わずかに墓域や畑地として確認されるだけとなる。

註

1）前迫ひろみ　「東日本における古墳時代後期集落分析の一視点－集落変遷をめぐる疑問点を通して－」『古代集落の諸問題』　玉口時雄先生古希記念考古学論文集　1998年11月

2）笹森健一　「竪穴住居の使い方」　『古墳時代の研究　2　集落と豪族居館』　雄山閣出版　1994年６月

3）利根川章彦　「北陸系装飾器台の系譜についての小論－いわゆる「特殊な器台」について－」　『研究紀要』第15号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1999年３月

4）茨城県教育財団　「主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書　境松遺跡」　『茨城県教育財団文化財調査報告』第41集　1987年３月

5）註３と同じ。

6）石野博信　『日本原始・古代住居の研究』　吉川弘文館　1991年５月

参考文献

・白石真理　「常陸における土器群の確期と交流」　『庄内式土器研究』ⅩⅦ（－庄内式並行期の土器生産とその動き－『北関東を中心とした庄内式並行期の土器の移動』）　庄内式土器研究会　1998年７月

・古墳時代研究班　「茨城の「Ｓ字状口縁台付甕」について（３）」　『研究ノート』７号　茨城県教育財団　1998年６月

・樫村宣行・土生朗治・白石真理　「茨城県における５世紀の動向」　『東国土器研究』５号　東国土器研究会　1999年５月

・宇野隆夫　『律令社会の考古学的研究　北陸を舞台として』　桂書房　1994年８月

・阿部義平　「律令期集落の復元－村上遺跡の復元模型をめぐって－」　『国立歴史民族博物館研究報告』第22集（共同研究「古代の集落」）国立歴史民族博物館　1989年３月

・鬼頭清明　「郷・村・集落」　『同上』

・鬼頭清明　『律令国家と農民』　塙書房　1989年10月

・藤井一二　「開拓と村落－８世紀の村落形成を中心にして－」　『日本村落史講座　第２巻　景観１（原始・古代・中世）』　雄山閣出版　1990年８月

・佐々木虔一　『古代東国社会と交通』　校倉書房　1995年９月

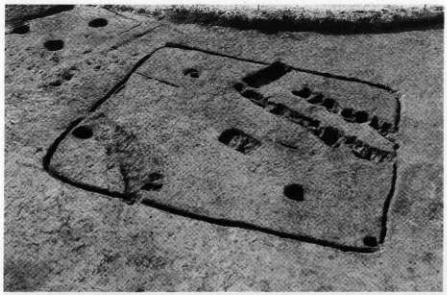
・鳥羽政之　「律令期集落の成立と変貌（上）－北武蔵の７，８世紀の事例を中心として－」　『土曜考古』　第22集　土曜考古学研究会　1998年５月

写 真 図 版

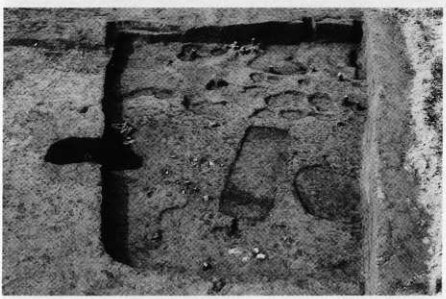
島名前野遺跡遠景

島名前野遺跡調査区域全景

PL 2



第 1 号住居跡完掘状況



第 2 号住居跡遺物出土状況

第 3 号住居跡完掘状況

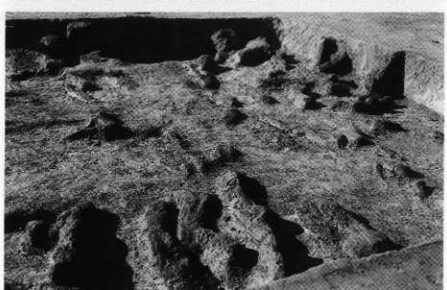
第5・10号住居跡完掘状況

第6・14号住居跡完掘状況

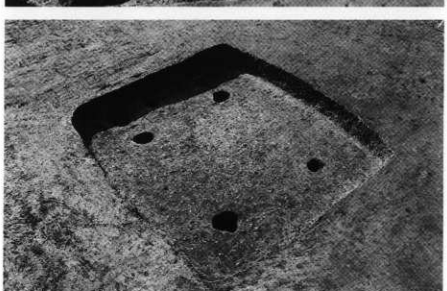
第7号住居跡完掘状況

PL 4

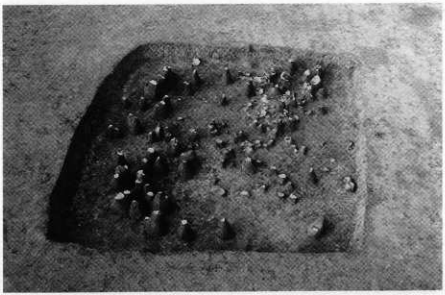
第 8 号住居跡完掘状況



第 8 号住居跡炭化材出土状況

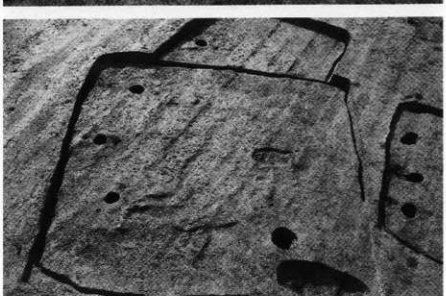


第 9 号住居跡完掘状況



第 9 号住居跡遺物出土状況

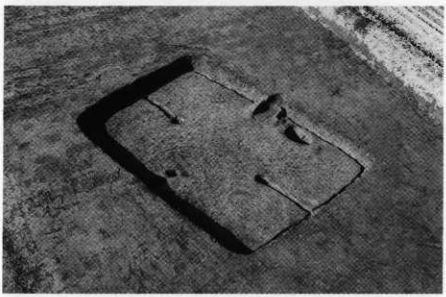
第12号住居跡完掘状況



第13号住居跡完掘状況

PL 6

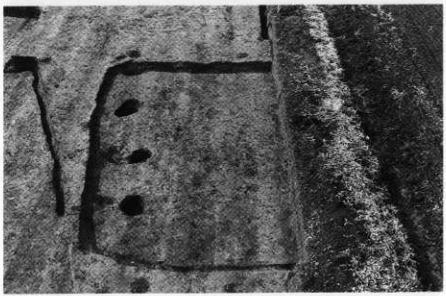
第15号住居跡遺物出土状況



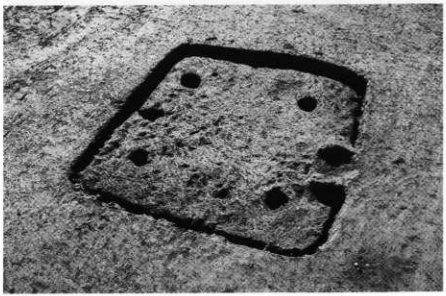
第17号住居跡完掘状況

第17号住居跡遺物出土状況

第 4 号住居跡完掘状況

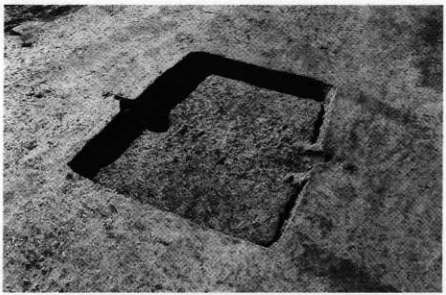


第11号住居跡完掘状況

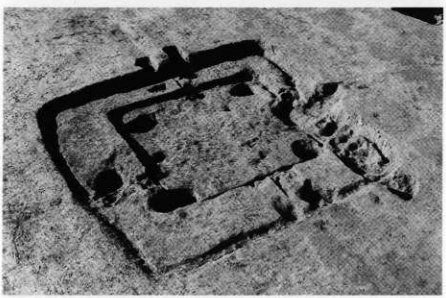


第16号住居跡完掘状況

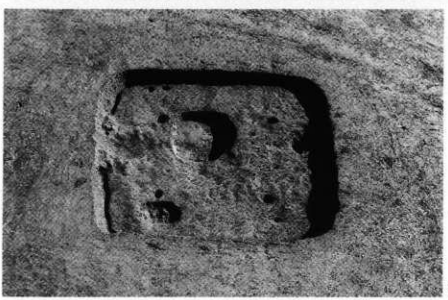
PL 8



第19号住居跡完掘状況



第20B号住居跡完掘状況



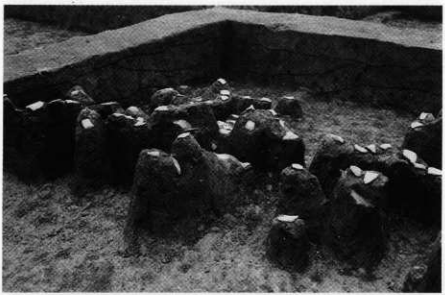
第21号住居跡完掘状況

第21号住居跡竈完掘状況

第１号粘土採掘坑完掘状況

第１号遺物包含層遺物出土状況

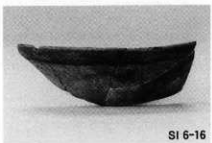
PL 10



第1号遺物包含層遺物出土状況

第4～9号土坑完掘状況

第20～23号土坑完掘状況

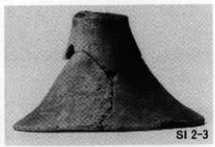

SI 6-16

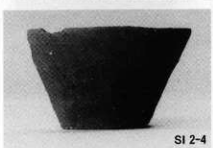
SI 7-21

SI 8-24

SI 8-25

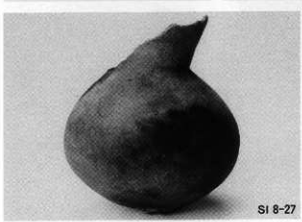
SI 8-26


SI 2-3


SI 2-4

SI 8-28

SI 5-15


SI 8-27

SI 2-5

SI 2-6

SI 8-29

第２・５～８号住居跡出土遺物

PL 12

SI 9-33

SI 9-35

SI 9-37

SI 9-42

SI 9-41

SI 9-44

SI 8-30

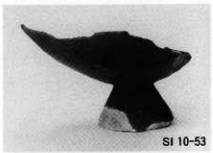
SI 9-43

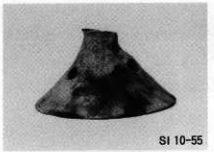
SI 8-31

SI 9-45

SI 9-36

第 8 ・ 9 号住居跡出土遺物


SI 10-53


SI 10-55

SI 10-54

SI 9-34

SI 15-78

SI 10-67

SI 9-47

SI 9-51

SI 9-48

SI 9-39

SI 9-46

SI 9-50

SI 9-40

SI 9-38

SI 9-52

第9・10・15号住居跡出土遺物

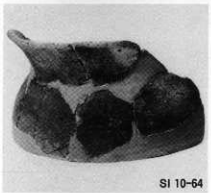
PL 14

SI 17-83

SI 15-80

SI 10-56

SI 15-79


SI 10-64

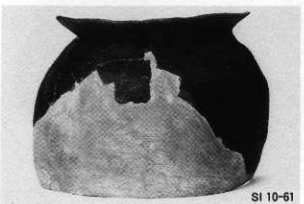
SI 10-62

SI 10-63

SI 10-60

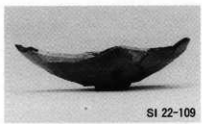
SI 10-59

SI 15-81


SI 10-61

SI 12-70

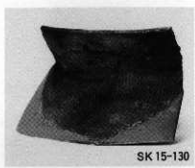
第10・12・15・17号住居跡出土遺物


SI 22-109

SK 17-132

SI 17-88

SK 15-129


SK 15-130

SI 22-112

SI 17-85

SI 17-86

SI 22-111

SK 17-133

SK 56-137

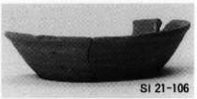
SI 17-84

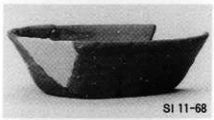
第17・22号住居跡，第15・17・56号土坑出土遺物

PL 16

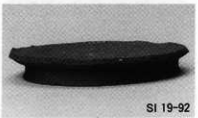
SI 20A-95

SI 21-105


SI 21-106

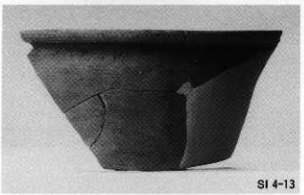

SI 11-68

SI 20A-99


SI 19-92

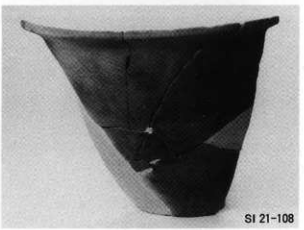
SI 19-93

SI 21-103


SI 4-13

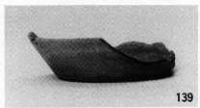
SI 16-8

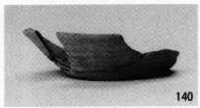
SI 21-100


SI 21-108

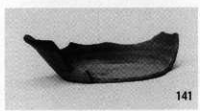
第4・11・16・19・20A・21号住居跡出土遺物

145


139


140

147


141

143

146

138

149

148

153

158

159

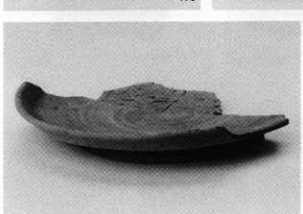
160

161

170

171

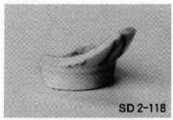
173

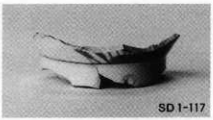

163

178

第 1 号遺物包含層出土遺物

PL 18

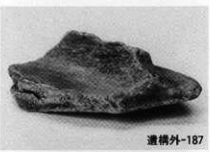

SD 2-118


SD 1-117

遺構外-186

遺構外-192

遺構外-193


遺構外-187

遺構外-189

遺構外-188

遺構外-185

遺構外-191

遺構外-190

遺構外-195

遺構外-6

SI 1-1

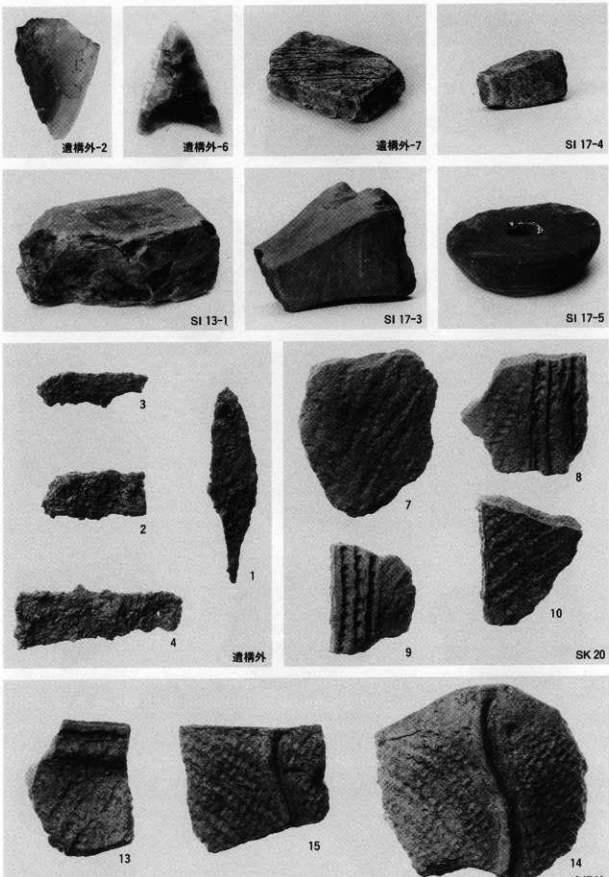
SI 2-2

SI 2-3

SI 9-4

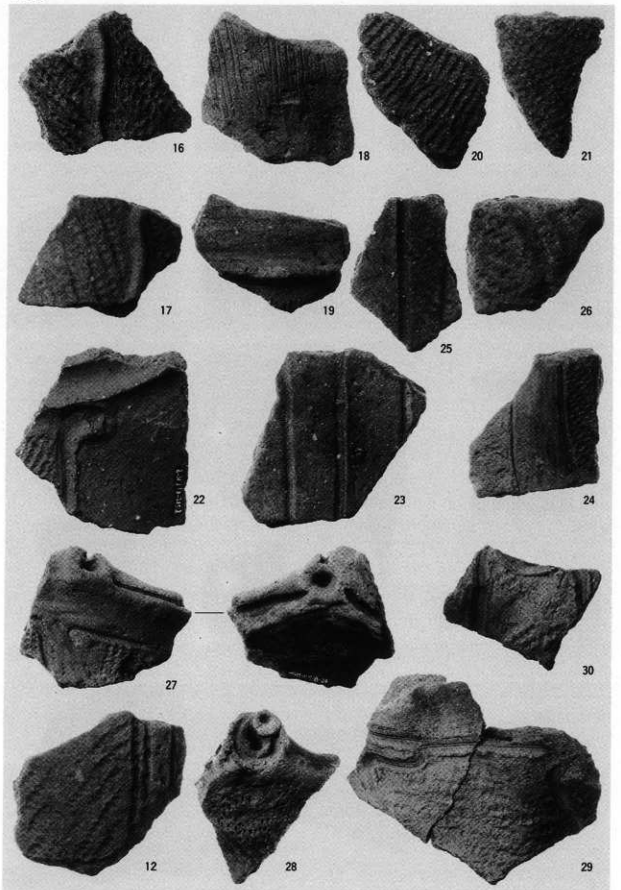
SD 1-5

第１・２・９号住居跡，第１・２号溝跡，遺構外出土遺物



第13・17号住居跡，第20号土坑，遺構外出土遺物

PL 20



遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第175集

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ

島名前野遺跡

平成13(2001)年3月15日　印刷
平成13(2001)年3月21日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
ＴＥＬ 029－225－6587

印刷　有限会社川田プリント
〒310-0041 水戸市上水戸4丁目6－53
ＴＥＬ 029－253－5551